
遼州戦記 保安隊日乗 7

橋本 直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遼州戦記 保安隊日乗 7

【Nコード】

N11350

【作者名】

橋本 直

【あらすじ】

遼州同盟司法局実働部隊『保安隊』隊員吉田俊平が突然姿を消した。特殊な契約と言うことでまるで関心を持たない上官達を後目に神前誠達は吉田の行方を追う。しかし、そこには吉田の過去と因縁が渦巻く事件が待ち受けていた。

殺戮機械が思い出に浸るとき 1

「なんだ？ 吉田の旦那は今日もお休みかよ」

部屋に入つて来るなりのいつも通りの辛辣な口調の西園寺要大尉の言葉で神前誠しんぜんまことはようやく隣の机の島の一角がここ三日間空席だった事实に気がついた。誠は自分の目でその事実を再確認すると一言言っただけで気が済んだように自分の机の上のモニターに視線を飛ばしている要を見て再び目を主を失った部隊のシステム担当の席へと向けた。

考えてみれば奇妙な話だった。遼州同盟司法局実働部隊、通称『保安隊』。司法実力部隊の一士官が三日間部隊に顔を見せず、そのことに隊員の誠が気づかなかつた。誠は第二小隊、吉田は第一小隊の所属で勤務が重ならないことも多いとは言つても一人一人、しかも少佐の階級の人物が顔を見せないと言うのに誰も話題にしないことが不思議に思えた。自然と誠は彼の所属する保安隊実働部隊の隊長の方へと目を向ける。

「クバルカ中佐、何か話は？」

要と一緒に入ってきた誠と要を部下に持つ第二小隊長カウラ・ベルガー大尉が部屋の上座の大きめの机、端末の画面に向けて声をかける。机の向こうには小さな、本当に小学校就学前のようにも見えるおさげ紙の少女の姿が見えた。

「あ？ 話？ ねーよ」

小さな頭が画面の後ろから飛び出す。実働部隊長クバルカ・ラン

中佐。その刺々しくはあるものの幼さのようなものを感じる表情にはまるで吉田がないことが当然だというように無関心、無感動な表情が浮かんでいた。めんどくさそうにそう言つとそのままキーボードを小さな手で叩きつづけている。その冷めた口調にひとたびは無関心を装っていた要が伸びをして少女を睨みつけながら叫んだ。

「いいのかよ、それで。脱走じゃねえか！ここが胡州だったら銃殺だぞ！」

「だって胡州じゃなくて東和だよ。だから大丈夫」

いきり立つ要に吉田の隣の席の小柄な女性士官、ナンバーゲニア・シャムラード中尉が答える。その姿を見つけた要はいつものタレ目でシャムを睨み付けながら立ち上がるとつかつかと歩み寄る。見下ろす要。それに小さなシャムは負けじとじつと要を睨みつけたまま答える。

「オメエ……いつも吉田と一緒にだよな？ 知らねえのか？ こいつがいねえわけ？」

要の見下すような視線。だが一枚上なシャムは要の攻撃的な目つきを見つけると余裕を込めた笑みを浮かべながら黙って頷く。

「なんだ？ ここはなんだ？ 鉄砲持ったり大砲持ったりことによつちやあアサルト・モジュールなんて言う物騒な巨大ロボットで戦争の真似事もやったりするところなんだぞ？ その兵隊が上官の許可も無く行方不明だ？」

「いつアタシが許可をしてねーって言った？」

またひよいと画面の脇から顔を出すラン。そのぼんやりとした表情に誠は吹き出しかける。だがすぐにそれを要に見つかってなんとか口を押さえて頂垂れた。

「じゃあ許可したのか？」

「してねーよ。しかもアタシの知ってる限りの連絡手段はすべてシヤットアウトだ」

それだけ言うとまたランは頭を引っ込めた。要は表情一つ変えずにつぶやかれたランの言葉に今にも暴れだしそうに顔を赤らめながらこぶしを握り締めてランを睨みつける。

「はあ？ マジで逃亡じゃねえか！」

「逃亡じゃ無いよ。連絡がつかないだけ」

捲し立てる要に茶々を入れたシヤムだが要の高圧的な一睨みに頭を掻いてそのまま自分の端末の画面に目を移した。誠は今にもランかシヤムに掴み掛りそうな様子の要を見ると思わず立ち上がった彼女を制することができるよう心に決めた。しかし要は軍用義体の持ち主。そしてランもシヤムもただの兵隊ではないだけあって、それが無駄なことだということには十分にわかるだけにさらにどうするべきか迷いながら様子を伺うことしかできなかった。

殺戮機械が思い出に浸るとき 2

「だからその状態を逃亡って言うんだよ！」

一気に捲し立てた要はようやくそこで第三小隊の面々がすでに着席している事実気がついた。事実はそうだとしても誰もがその事実に気づいても知らないふりを装っているようにさえ見えて、誠は少しばかりいきり立つ要の肩を持つように視線を鋭い目つきの方に向けた。

「おい、楓！」

今度はいつもは向けるはずの無いような笑顔で第三小隊小隊長で従妹に当たる嵯峨楓少佐に歩み寄っていく。黒髪を掻き上げながらいつもなら満面の笑みで応える楓がランを気にしながら迷惑そうに近づいてくる要を見つめていた。

「オメエ……知ってるだろ？」

「なんで僕が……」

さすがの誠もこの様子には楓に同情するしかなかった。楓はちらちらと部下の渡辺かなめ大尉とアン・ナン・パク曹長に視線をやりながら迷惑な従姉の言いがかりをばぐらかす方法を必死に考えているように見えた。

「なあ……教えてくれよ……ただとは言わないからさ。デートぐらいしてやるよ」

「本当ですか！」

今度は要が自分の言葉に後悔することになった。楓の要への憧れは誠から見ても異常だった。人造人間で楓の被官になるまで番号で呼ばれていた渡辺の名前を「かなめ」としたのも彼女の愛情故である。

らんらんと喜びに潤む瞳。そんな楓を見てじりじりと要が後ろに引き下がる。

「お姉様……僕……」

「知らねえならな……無理することは無いんだぞ……な？」

要は助けを求めるように最初は吉田の行方のことで文句を言いたそうにしていたカウラに目をやる。しかしカウラはすでに追及するのを諦めたというように自分の端末で作業を始めていた。

逃げることはできない。じりじりと楓が近づいてくる。

「そつだ！ 叔父貴なら知ってるだろ！ 神前！ カウラ！ 行くぞ！」

急に方向転換した要に襟首を掴まれて誠は立ち上がるしかなかった。

「なんで私まで……」

そつ言いながら顔を出したランに手を合わされて仕方なくカウラも立ち上がる。

「それじゃあ！」

颯爽と要は実働部隊の詰め所を後にした。

「隊長に聞くのか？」

不服そうにつぶやくカウラを情けなさそうに見つめる要。

保安隊隊長、嵯峨惟基特務大佐。楓の父でもある喰えない中年士官の間拔けな面を思い出して誠はため息をつく。

「無駄だと思っけどな……」

「何か言ったか？」

引くに引けない。そんな表情の要を前に面と向かって文句を言う度胸は誠には無かった。

殺戮機械が思い出に浸るとき 3

廊下をただ一直線に要は進む。人気がないのが幸いだと誠は思った。もしいればまた勢い込んだ要が尋問して回るかもしれない。隣を見れば呆れた顔のカウラが上官だからつきあうのだという顔をして歩いている。

「おい！ 叔父貴！ いるんだろ！」

ノックと言うより破壊しない程度にドアをぶん殴る要。驚いて止めに入ろうとする誠だがすでに要は勝手にドアを開けて隊長室に入っていた。

「おい！」

「なんだよ……聞こえてるよ。でかい声出せばいいってもんじゃねえだろ？」

いつものように手入れの行き届かない嵯峨の七三分けの髪が書類の山の向こうから顔を出した。疲れているのか、眠いのか。半開きの目が迷惑そうに詰問を始めようとする要を眺めていた。

「じゃあそのでかい声をださせた原因だけどう……」

「吉田の話か？」

誠もいつものこういつときの嵯峨の察しの良さには感心させられた。要も凶星を付かれて黙り込んでいる。それを確認すると嵯峨は制服の胸のポケットからしわくちやのタバコの箱を取り出して一本取り

出す。

「こつ言つ季節だ……旅にでも出たくなつたんじゃないの？」

「旅だ？ 許可は取つたのかよ」

「そりゃあふと梅の頼りに誘われての一人旅に許可なんて野暮なものを求めるのは……」

タバコに火を付ける為に黙り込む嵯峨。だが誠が聞いても嵯峨の言っていることは十分無茶苦茶だった。

「あいつは何か？ 芸術家か何かなのか？ え？ おい」

要の頬に怒りの引きつりが走る。また面倒なことになった。誠はそう思いながらゆっくりとタバコを吹かす嵯峨に目をやった。

「あいつがいないとお前等は何か困ることがあるのねえ……さつきからの口ぶりだと仕事が進まなくなるような被害があるみたいない感じだけど」

「直接の被害はねえけどよう！ 突然の出勤とかがあつたらどうするんだよ！」

要が右手を振り上げて殴りかかろうとするような仕草を見せる。ただそれを見慣れている嵯峨にはまるで効果がないのは確かだった。

「アイツが出るほどの事態が起きりゃあアイツの方からのこのこ出てくるよ。それにだ……」

そこまで言うと嵯峨はタバコを啜えたまま隊長の椅子から立ち上がりそのまま外に向かって顔を向けた。

「コンビを組んでるシャムが困ってないから今日まで気づかなかつたんだろ？ シャムがアンに施している特訓の為のシミュレーションメニュー。ちゃんとシャムの提案通りに提出されてるからアイツも文句を言うこともない。部隊の管理部のメインフレームの交換作業も渉の奴の報告じゃあ遅れが無いどころか予定より早く切り上がりそうだって……仕事はしてるんだからどこにしようが俺の知ったことじゃねえよ」

嵯峨は静かに開いた窓の隙間からタバコの煙を吐き出す。すきま風が微かに冷たく誠達の頬をなでた。

殺戮機械が思い出に浸るとき 4

「隊長……それは無責任じゃないですか？」

不意に思わぬところから声があったというように嵯峨がタバコを啜えたまま振り返った。声の主はカウラ。その鋭い瞳が薄ぼんやりとした部隊長の顔を射すくめる。だが嵯峨も手練れだった。にやりと笑ってタバコをもみ消すとそのまま何事も無かったかのように椅子に座る。

「無責任？ 一般的な部隊の隊員ならその言葉はまさにその通り。俺は部隊長失格だな。だが吉田は特殊な契約をしててね」

「年俸制……事があったときは歩合で割り増し。腕の立つ傭兵の契約方式か？」

要の言葉に否定も肯定もしない嵯峨。そして目の前の書類をぺらぺらとめくり話を続ける。

「あいつは腕利きだよ。どこの組織も欲しい人材だ。うちじゃあ三日や四日自由にしていいことにしてあいつのご機嫌を取り結んで契約を結んでいるわけだ。つまりだ。お前さん等が吉田と同じ事をすると……」

「脱走で銃殺」

要の当然のように吐かれた言葉に誠の額に冷や汗が走る。

「まあそう言うことだ。俺は野暮天にはなりたくないからな。探し

「たいなら自分で探せよ」

突き放されたような態度で要もカウラも何も言えずにその場に立ち尽くした。嵯峨はようやく決意が付いたというように目の前の冊子のページ目を開いてペンを握る。

「まだ何かあるの？」

「いいえ……失礼します」

何も言えずにカウラは踵を返す。要も誠も従うしかない雰囲気ができあがっていた。

「ああ、見つけたら教えてくれると助かるんだけど！」

出て行くこうとする誠達の背中に嵯峨の音が響く。

「おい、どつするよ」

要は扉を閉めてじっと下を向いているカウラに詰め寄る。その様子はたとえカウラが止めても自分一人で探しに出かけかねない勢いだっただ。

「今は勤務中だ。余計なことは考えるな」

それだけ言うとカウラは再び詰め所へと歩き始める。

「だけどあの様子だと叔父貴も吉田の旦那の行方は知らねえみたいだな……教えてくれなんて人にものを頼むのは叔父貴がすることじやねえ」

「それが分かってどうなる？ 明日は幸い非番じゃないか。明日考
えればいい」

カウラはそう言つと詰め所のドアを開いた。要も誠もカウラの許可
が出たことで探偵ごっこの真似事が始まると言つわくわくした感覚
に包まれていた。

殺戮機械が思い出に浸るとき 5

「吉田さんが来てない？ まあ特にうちは問題がないからねえ……」

弁当を掻き込みながらめんどくさそうに技術部整備班長の島田正人准尉が思い切り嫌な顔をしてつぶやいた。さすがに今日の島田に声をかけるのは誠も躊躇したがそんなことを許す要ではない。

島田の弁当を作った保安隊唯一の運用艦『高雄』の管制官のサラ・グリファン少尉が殺意を込めた視線で誠達を睨み付けてくる。野郎ばかりの整備班。いくら恋人の為とは言え弁当を作ってくるなど彼女の精一杯の勇気を感じさせる。そんな一時を明らかに要は意図的に土足で踏みにじるつもりだ。そのいつもの興味深そうなタレ目を見れば誠も十分に分かった。

「今、第一小隊の05式の一斉点検の最中なんだけど……データ送っても速攻でレスが入ってくるからなあ。本当にいないの？ 嘘でしょ」

「ならテメエのその何も見えていない目で確かめて見るか？ え？

」

要はそう言うつと島田の襟首を掴んで持ち上げる。長身の島田と言えど、軍用の特殊白兵戦用義体の持ち主の要の腕力に勝てるわけもない。ただされるがままにつるされる。

「だからうちじゃあ分かりませんって！ 吉田さんならシヤムちゃんが相棒じゃないですか！ 俺達に聞くよりそっちの方が！」

「分からねえ奴だな！ そのシャムが喋らないからテメエに聞いているんだろ？ 答える！」

「要ちゃん止めてよ！」

さすがに勢い余って首を絞め始めて島田が泡を吹き出したところでサラが止めにかかった。常人ならとくに窒息していたほどの時間ぎゅうぎゅうと首を絞められて一瞬白目を剥いた島田がなんとか咳をしながら我に変える。

「人をなんだと思ってるんですか？」

「え？ 死なない便利な弾避け」

要の言葉にカウラは大きくため息をついた。島田は体組織再生能力多可という体質の持ち主だった。これまでも何度か誠達の無謀な行動につきあわされて内蔵をぶちまけたり頭を銃弾で撃ち抜かれたりしているがこうして今は平気で要の暴虐からどうやって逃れようか必死に考えを巡らせている。

「吉田の旦那と一番話してるのはうちではキムですよ。アイツは鉄砲オタクだから吉田の旦那とは趣味が違いますから」

「吉田のは趣味じゃなくて実用だろ？ どうせ連中のことだ。どこかのメーカーのバレルが長持ちするとか、狙撃用の弾薬のパウダーのメーカーをどこにしたらいいかとか……そんなことが役に立つと思っ
うか？」

「いやあ、役に立つかと聞かれても……」

島田はとりあえず要の脅威がしばらく続きそうなのでうんざりしながら周りを見回した。いつもは人望厚い島田だがこと相手が要となるとあえて身代わりになりたくなるような古参兵達は周りにはいない。新兵達は要は自分達を端から相手にしないことは分かっているのでそれぞれがやややと雑談を続けている。

「お困りのようね！」

「げ……」

突然のハスキーな女性の声にうんざりしたような顔をする要。彼女がおそろおそろ振り向くとそこには紺色の長い髪をなびかせた少佐の階級章の長身の女性隊員が満面の笑みで立っていた。

殺戮機械が思い出に浸るとき 6

アイシヤはにんまりと笑いながら近づいてくるとそのまま要を蹴飛ばした。

「なにしゃがる！」

「いきなり『げ！』ってなによ！」

さすがの軍用の強化義体の持ち主の要も、遺伝子的に強化されて作られているアイシヤの骨格の蹴りは効果があるようで蹴られた肘をさすりながらアイシヤを見上げる。

「それより……面白いことしてるんでしょ？ 私も混ぜてよ」

興味津々、やる気満々のアイシヤのうれしそうな視線に誠達は頭を掻いた。アイシヤは運用艦『高雄』の艦長代理。階級も少佐と言うことで手に入る情報の権限は大尉のカウラや要より上に当たる。ただし、本人に本当にやる気があればの話で、こう言う場合アイシヤはただ興味だけで付いてくる可能性もあるのでどうにも信用できない。

「アイシヤ、止めなよ。ただでさえうちはお姉さんからの業務の引き継ぎとかで忙しいんだから……」

同じブリッジクルーと言うことでサラはなんとかアイシヤを止めにかかろうとする。

「それならほとんど終わってるわよ。それに面白そうじゃない、謎

の保安隊の改造人間の知られざる過去に迫るなんて……」

「吉田はいつから改造人間になったんだ？ 変身でもするのか？」

吐き捨てるようにそう言った要だが、すでにアイシヤはやる気でない。

「とりあえずこういうときはお金の流れから見るべきね！ 行きましよう！」

早速ぼんやりとしていた誠の手を取るとそのままハンガーの05式のコックピットの前に付けられた通路を執務室のある棟に向けて歩き出す。カウラと要は慌ててそれを追いかけた。

「金の流れ？ そんなもんうちでどうにかなるのか？」

要の慌てた声に振り向いたアイシヤはにんまりと笑う。

「うちの金の管理はどこが担当？ 管理部でしょ？ 経理担当は菰田君。カウラが頼めば多少の無理は……」

アイシヤの言葉にカウラが思い切り嫌な顔をする。

経理担当主任菰田邦宏曹長。誠も大の苦手な粘着質を絵に描いた顔の古参下士官はカウラのファンクラブ『ヒンヌー教』の教祖としてその手の趣味の隊員の絶大な支持を集めていた。

よく言えばスレンダー、悪く言えば胸がないカウラの自覚している欠点を崇拜するその奇妙なカルト宗教は部隊での影響力は絶大で、

誠達が生活している保安隊男子下士官寮の中では一大勢力をなしていた。当然のことながら勝手にそんなインチキ宗教の崇拝対象になったカウラにとっては迷惑以外の何物でもない。それでもしつこい菰田達の布教活動で、入れ替わりが激しくなった最近の保安隊内部でも大きな勢力を維持していた。

「ほら、わびしそうなカップ麺なんて食べてるわよ」

アイシャが指さすのは管理部のガラス張りの執務室。和気藹々と笑いあっている女子事務職員達からぽつんと離れて一人カップ麺を啜る菰田の哀れな姿が見える。

偶然顔を上げた菰田が誠達に視線を向けた。最初にカウラを見つけて笑顔が浮かんだものの、その中に誠の姿があるのを見つけて笑顔を訂正するような不機嫌そうな表情を浮かべている菰田。

アイシャは気にするわけでもなくそのままぐんぐんと近づいていくとそのまゝ管理部の部室に飛び込んだ。

「菰田君」

最初に話しかけてきたのがアイシャだったことで菰田の機嫌はさらに損なわれた。アイシャの詮索癖と騒動好きは周りを巻き込むだけ巻き込んでおいて自分は逃げ去るといふ要領の良さ。巻き込まれる可能性があると悟っただけで菰田も十分不機嫌になる。

手にしたカップ麺を静かに机に置き。大きく深呼吸をして何ともしれない騒動を巻き起こそうとしている紺色の髪の闖入者を忌々しげに見つめる。

「なんででしょうか……クバルカ少佐。今日は鈴木中佐が出て来ているんですから引き継ぎの方を……」

「いいのよ、そんなこと。それより……聞きたいことがあるんだけど」

不機嫌を突き抜けた表情。ともかく菰田の顔を見て誠はそんな感じだと確信した。ここにカウラがいなければ菰田はその場から立ち去っていただろう。偏屈な上司がこれから災難に遭うと言うことで女子職員は興味深そうに誠達を眺めている。

「実は吉田少佐の件なんだ」

その質問の核心がカウラの口から放たれたものでなければ答えなど期待できない。カウラも菰田とは話をするのも嫌なのだが仕方なく口を開いた。

菰田の表情が急に和らぐ。そしてそれに比例してカウラの口元の引きつりが大きくなる。

「ああ、ベルガー大尉。吉田少佐が休んでいる件ですか？」

「知ってるのか？ テメエ！」

今度は菰田の襟首を要が締め上げる。すぐにカウラと誠で間に入っただから良かったものの、放っておいたら島田と同じく窒息するところだった。しかも菰田は島田と違って首を絞めたら死ぬのだからまさに危ないところだった。

咳き込み、しばらく下を向いてもだえる菰田。

「大丈夫？」

背中をさするアイシヤを恨みがましい目で見つめる菰田。彼の予想はずでにこの時点での中していた。カウラが少し心配そうな顔をしているのを見つけて何とか機嫌を直した菰田は自分の気を落ち着かせながら椅子に座り直した。

「知ってるも何も……休んでいるじゃないですか」

「そりゃあ見れば分かる！ そう言うことじゃなくてだ。あいつがなんで休んでいるのか知らないかって聞いているんだよ！」

さすがの要も同じ間違いは起こさない。机をたたき壊さないように寸止めして軽く叩くようにして腕を振り下ろす。備品の発注伝票を処理しないで済むことを確認した菰田はしばらく思いを巡らすよう

に首をひねる。

「なんで？ そりゃあ用があるからじゃないですか？」

「知らないんだな！ じゃあアイツが休んで済む理由は知って……」

要に任せたらちがあかない。そう悟ったアイシャが要を突き飛ばす。いつもなら反撃で突き飛ばし返す要も自分の話の持つて行き方が間違っていたことに気づいたようで頭を掻きながら菰田にしなだれかかるアイシャを眺めていた。

「吉田さんの雇用関係の契約書……ここで保管しているじゃなくて？」

突然の甘えるようなアイシャの言葉。だがアイシャの本質をよく知っている菰田はただ助けを求めるように視線を誠に飛ばすだけだった。

「どうして返事をしてくれないのかしら？」

「クラウゼ少佐。守秘義務って言葉。知ってます？」

薄ら笑いを浮かべて拒否の姿勢を示してみせるのが最後の抵抗だった。菰田はアイシャにいらまれたままじつと黙り込んでいる。

「おい、アイシャ。それはまずいだろ。重要書類の管理はおそらく菰田じゃなくて高梨参事の担当だぞ」

「西園寺さんの言うとおりですよ！俺じゃあ何もできません！」

暴走するアイシャをさすがの要も止めに入る。明らかに出せないのは知っていたがたたいじめたかったと言うだけの理由で菰田を絞り上げていたのは誠が見てもよく分かった。

「まあ良いわ。それにしても……本当にどこにいるのかしら？」

「ここで相談されても困りますよ。とりあえず自宅とか……あの人以上なら音楽関係の知り合いが多いからどこかのスタジオに缶詰になっているとか……いろいろ考えられるでしょ？」

菰田の捨て鉢な意見。アイシャは手を打って菰田の肩をぽんと叩いた。

「そうね。とりあえず自宅を明日訪問。それから後のことはそれか

「考えましょう」

アイシャはそれだけ言つと啞然とする誠達を置いて平然と管理部の部室を出て行った。

「何がしたかつたんだ？ アイツは」

「私に聞くな」

要とカウラはただ呆然と立ち尽くしている。誠は我に返るとすべての苦痛を誠を恨むことで解消しようとしている菰田の顔があった。

「いやあ……とりあえず昼休みも終わりだし。明日にしましょうよ」

そう言つと誠はそのまま立ち去ろうとした。だが要のその肩を押さえつける。

「せつかくここに来たんだ。高梨参事に一応確かめるくらいの事はしてもいいんじゃないかねえのか？」

「そうだな。駄目なのは当たり前でも聞くだけ聞くのは無駄じゃないだろう」

誠はただ絶望に包まれた。そして恐怖を紛らわすべく室内を見回す。昼休みと言つことで付けられている端末のテレビ画面。そこには次から次へと兵器の映像が映し出されていた。

「また遼北と西モスレムが揉めてるんですか？」

何気ない誠の言葉。冷やかにカウラが頷く。

「あそこの宗教問題は複雑だからな。先週西モスレムのテロ組織の過激派が越境攻撃を仕掛けたらしい。遼北は西モスレム政府の関与を疑い、西モスレムはそれを否定した上で遼北内部でのイスラム教徒の不当弾圧を同盟会議にかけるといきり立ってる」

「あそこは一回ぶつかった方がいいんだよ。多少痛み分けすれば仲も良くなるじゃねえのか？」

相変わらずの要の不穏当な発言に誠はただため息をつくばかりだった。

殺戮機械が思い出に浸るとき 9

「そういうわけにも行かないだろ。同盟の有力加盟国だからなどちらも。それに確か……設立準備中の同盟軍事部隊が国境線沿いに展開しているはずだぞ」

「え？ シン大尉の部隊ですか？」

誠が思い出した。元管理部部長の寡黙なイスラム教徒。アブドウル・シャー・シン大尉。沈着冷静な保安隊の良心と呼ばれた人物。当然その名を聞けば元の部下である菰田もひねくれた性根を訂正して振り向いて画面を見なければならなくなった。

「あの人……確かパイロキネシスとですよね」

パイロキネシスと。この遼州の先住民族『リヤオ』の一部が持つ法術と呼ばれる能力の一つにある発火能力。愛煙家のシンはライターのとぐいを持ち歩かず、常にそれで火を付ける癖があった。そしてその力は彼のテリトリーに入った敵をすべて消し炭にすることができるという恐るべきもの。半年前、法術の存在が公にされてからは彼の力は同盟以外でも知られることになった。

「そりゃあ……大丈夫かね？ あの人西モスレムの軍籍があるから……遼北が黙ってないだろ？」

要の言葉にカウラはとぼけたように首を振るとそのまま部屋を出て行った。

「無視しやがって……」

「でもシン大尉は実直な人ですから。任務とあれば母国であっても容赦はしないようなところがありそうですね。」

「おい、神前。それは確かめたのか？ 遼北はたぶん疑心暗鬼に陥るぞ。まずいな……」

それだけ言うと要もまた部屋を出て行く。誠は一人画面に目をやった。

飛び回る西モスレム空軍のフランス製の航空アサルト・モジュール「ルミネール」が大地に突っ立っている同盟軍事機構の05式を威圧している様子が映っている。

「あれだな。西園寺さんがこの場にいたら何機か撃ち落とししてるんじゃないか？」

「確かに……」

菰田の言葉に同意してすぐに誠はドアの辺りを見回した。とりあえず要の姿は無い。振り向くとそこには同情の視線を送る菰田がいた。

「まあなんだ。とりあえずがんばれや」

なんとも慰めともつかない菰田の言葉に誠はただ苦笑いを浮かべて管理部の部室を出た。

「同盟……どうなるんだろうっな？」

不安は増す。危機は確実に広がってきている。そして保安隊はその

目とも言える存在の吉田が行方不明。

「考えても仕方がないか……」

誠は入隊以来そう諦める癖が身についてきている自分が少し情けなく感じられた。

翌日の朝。誠は気まずい雰囲気の中食事をとっていた。右隣には要、左隣にはアイシャ。どちらも今日は休暇を取ることになっていた。

「自宅に行つてどうにかなるのか？」

トーストを嚙りながら正面のカウラがつぶやく。誠もその言葉にただ苦笑いを浮かべる。

「ともかくそこからだろ。アイツの自宅。見たことないしな」

「要ちゃん……単なる好奇心？ それなら休みなんか取るんじゃないじゃ無かつたわ」

すでに食事を終えたアイシャがゆったりとコーヒーを啜りながら目を誠越しに要に向ける。要は不機嫌そうにスクランブルエッグの皿を手に持つとそのまま口に流し込んだ。

「自宅に行つたとする。不在ならどうする？」

「あれだ、アイツが制作に絡んでたアーティストの所属会社を片っ端から訪ねてだな……」

「要ちゃん。それだといつか通報されるわよ」

誠もただ呆れるしかなかった。誠もカウラもこうなつた要のやる気を取りあえず空振りでもいいからガス抜きしてやる程度の気持ちで休みを取つたのだが、明らかに要は暴走を始めていた。

「まあ……ある程度調べて駄目ならまた叔父貴に聞くさ」

さすがの要もカウラと誠の冷やかな視線を察してトーンダウンする。大きなため息を誠はついた。

「それにしても……あんまり食べないわね。誠ちゃん」

トースト一枚とスクランブルエッグ。それにソーセージ一本で食事を終えた誠を不服そうにアイシャが見つめていた。

「まあ朝ですから」

「昨日は飲んで無いじゃないの……もしかして何か作ってるの？」

誠の趣味のフィギュア作りの話を聞き出そうとしているアイシャだが、誠には特に話すことは無かった。確かに正月に実家に帰ったときに道具の一式は持ってきていたがそれは倉庫に眠ったままでとりあえず手を付けるめども立たない。

「まあ今日はいろいろとありそうなので」

「なら食っとけ！」

要が自分の皿の上のソーセージを誠の皿に移す。そしてにんまりと笑うわけだが、誠はどうにもただ愛想笑いを浮かべるしかなかった。

「なんだよ、気が向かないなら来なくて良いぞ」

「行かないとお前が何をするか分からないんだ。ついていくよ」
皮肉めいた笑みを浮かべながらカウラは静かにそうつぶやいた。

仕方なく誠はソーセージを食べる。味気ない感じ。

「旨いか？」

「ええまあ」

形式的なやりとり。要は特に感慨も無いと言つように立ち上がる。

「じゃあ十分後に駐車場。アイシャ。遅れたら置いていくからな」

「要ちゃん的車じゃないじゃない」

不服そうなアイシャを置いて立ち去る要をただ呆然と誠達は見送った。

「やる気ですね」

「ろくでもないことになりそうだ」

誠とカウラはため息をつく。ただアイシャは一人やる気があるというように元気よく立ち上がった。

「準備ですか？」

「まあね」

そう言つて誠とカウラは遅い朝食の食堂に残された。

「本当に大丈夫なんでしょうか？」

「まああれだ。ハンドルを握っているのは私だ。その意味はわかる
だろ？」

カウラもそれだけ言うのが精一杯だった。確かにこの下士官寮に住む要、カウラ、アイシャの三人が通勤や移動に使っているのはカウラの赤いスポーツカーだった。だが要も一応は自分の大型バイクを持っている。やるとなったら自分で動く可能性も無きにしもない。

「でも本当に大丈夫ですか？」

ソーセージを食べ終わると誠は念を押すように聞いてみた。カウラはただ儂く笑う。実際それ以上の事をカウラに求めることは酷だった。

「まあうちも遼北と西モスレムの軍事衝突が起きれば招集されるでしょうから……無理せずに行きますか」

誠は半分は自分自身に言い聞かせるようにしてそう言う立ち上がった。カウラも力なくそれに続く。二人だけの食堂。二人の思いは一つ。場合によってはロマンティックな場面になるのだが、それが要と言うトラブルメーカーに頭を抱えての場面と言うことなので全く持ってしまったらなかった。

「行きますか」

どうしても誠の出す声には倦怠感ばかりが浮き上がっているように感じられた。

誠はそのまま食堂を飛び出し、階段を上り、自分の部屋に飛び込む。遅れていけば要の機嫌は確実に悪くなる。その原因に自分があるのは得策ではない。

ジャンバーを羽織、財布を持つとそのまま階段を駆け下りた。

「神前はやる気なのか？」

まるで不思議な生き物を見るように食堂を出たばかりのカウラが誠を見つめていた。

「とりあえず僕が相手をしていますから、準備はゆっくりしてください」

「悪いな。助かる」

そう言うとカウラはゆっくりと階段を上がっていく。

誠はとってつけたような地味な玄関の靴箱からスニーカーを取り出して履いてそのまま道路へと飛び出した。

初春の風はまだ冷たい。仕方なくジャンバーのジッパーを閉めるとそのまま誠はポケットに手を入れて隣の駐車場に向けて歩き出した。すでに始業時間を過ぎている。止めてある車は二台。黒い小型車は先月異動した技術下士官の車で急な異動でパンクの修理の時間が無いため島田が直してから売りに行く予定なのがまだ手つかずで置い

である車だった。その奥に最新型の赤いスポーツカー。そしてその隣には……、

「早く来い！」

叫ぶ要の姿がある。誠は仕方なく小走りで要のところまで急いだ。

「アイツ等はまだか？ 気合いが足りねえよ」

「いや、これはあくまで休暇中のことで仕事じゃないですから……」

誠のいい訳に明らかに不機嫌になる要。そのタレ目が殺意がこもっているように歪む。

「なんだ？ 同僚が行方不明なのに気にならないのか？ オメエは冷たい奴だな」

「行方不明も何もちゃんと仕事は進めてるんだから無事なんですよ。余計なお世話はしない方が……」

ここまで言っただけは言葉を飲み込んだ。下手に逆らえばただ機嫌を損ねるだけ。こういうときは黙っているに限る。

「余計なお世話かもしないけどよう。やっぱりこういふとき心配してくれる人がいる方がいいと思わねえか？ アタシは心配してもらった方が……」

「私が心配して上げる」

突然後ろからアイシャに声をかけられて要はもんどり打って誠に抱きついた。

「あらー……朝から情熱的ね」

「脅かすんじゃないよ！ ちゃんと一声かけてから声をかける！」

「一声かけてから声をかけるって……やりかたが分からないから教えてよ」

いつものアイシャの減らず口。要はただ怒りをため込んでアイシャを睨み付けた。

「まあそれにしても寒いわね……要ちゃんは大丈夫みたいだけど」

アイシャが言うのももつともだった。要はいつも通り革ジャンの下はタンクトップ。短いジーンズのパンツの裾からは腿があらわに見える。

「ほつとけ、人ごとだろ？ それにしてもカウラの奴は……」

「さつき食堂を出たばかりでしたがからしばらくかかりますよ」

誠の何気ない一言に要の肩の上で切りそろえられた髪が揺れる。

「アイツも冷たいんだな」

「冷たいとかそう言う問題じゃ無いと思うんだけど」

アイシャの突っ込みは軽く無視され要はしばらく思索にふける。

「それにしても今年は雪が降りませんね」

「餓鬼かテメエは？ 雪なんか降っても道路が凍って面倒なだけだぞ」

ふてくされたような要の一言。確かにそれはその通りだが、誠にとってはコロニー育ちの要には雪が珍しいだろうと気を利かせたつもりだっただけに少しばかりショックだった。

「まあ雪は見たければ北に行けばいい訳だし……このままドライブなんてどう？」

何気ないアイシャの一言に殺気がこもった要の視線が飛ぶ。アイシヤは何となく戸惑ったようにただ誤魔化すように周りを見回した。

「島田君……まだ片付けて無いのね」

アイシャの視線の先には屋根のついた小屋のようなものがあり、その下にはバイクの部品が乱雑に置かれていた。バイクが趣味の整備班班長の島田の隠れ家と本人は自称している場所。島田と島田とつきあっているサラ以外が近づくと面倒なことになるのでアイシヤも少しばかり困ったような顔でその一隅を眺めていた。

「やっと来やがった」

要の声で誠は駐車場の入り口に目を向けた。エメラルドグリーンのパニーテール。自然界には存在しないその髪の色は彼女が人工的に作られた戦闘用の人間であることを示していた。

「待たせたな」

「待たせたなじゃねえよ！ とつとと出かけるぞ！ ああ、アイシヤはここにいて良いから」

「私はお留守番？ 嫌よ、ついていくから」

カウラが操作して開いたドアにおもむろに誠を押し込むアイシヤ。そのままいつもは要が座る後部座席にアイシャが長身を折りたたむようにして乗り込んだ。

「押し込まないでくださいよ」

180cmに近いアイシャが隣に座るとなると186cmの長身の誠はいつもよりさらに小さくなって後部座席に入り込まなければならぬ。

「文句を言わないの。男の子でしょ？」

「テメエがでかいんだ。いい加減にしろ」

「身長は工場出荷時から変わらないわよ」

アイシャがひねくれたように要を睨み付ける。アイシャの鮮やかな瑠璃色の髪の色を見れば確かに彼女が自然界で生まれた人間でないことは誰の目にも明らかだった。

うんざりした表情でカウラが車を出す。静かにエンジンが回り、車は砂利道を動き出した。

「それにしても……要ちゃん。吉田少佐の家は分かるの？」

「アイシャ……西園寺もそこまで馬鹿じゃない」

「フォローするのが馬鹿にするのかどちらかにしてくれ」

カウラの言葉に複雑な表情の要。車はそのまま路地へと進む。東都から西に60kmの郊外の都市豊川。その下町を静かにスポーツカ

―は動き始めた。

平日である。住宅街の人影はまばらで時折老人会の集まりでもあるのか同じバッグを持ったお年寄りがすれ違っていく。

「何かイベントでもあるのかしら？」

「アタシに聞くなよ。市役所なりなんなりに聞けばいいだろ？」

アイシャは普段は見ないお年寄りの姿に珍しそうに目を向けている。誠はただ苦笑いを浮かべながら早く目的地に着くことだけを祈りながら小さくなつてじっとしていた。

「しかしシャムが知らねえとは驚いたよな……」

「シャムちゃんが吉田少佐の家を知らなかったの？ まあたぶんいつも吉田少佐の方が迎えに行くんでしょうね。意外と吉田さんは紳士だし」

「紳士？ あれのどこが紳士なんだ？ 紳士は玄関じゃなく常に壁を昇つて進入するのか？ あれはただの空き巣の出来損ないだ」

さすがの吉田も要のかかればただの空き巣に身をやつすことになる。苦笑いを浮かべる誠だが、すぐに大通りにでる交差点に車がたどり着いたので周りを見回した。

いつも通り大通りには車の通りが激しい。営業車、トラック、バン、営業車、自家用車、バン。次々と通り抜ける車を見ながら誠はただ窮屈に座り続けていた。

「誠ちゃんそんなに向こうに行かなくても……ほら」

調子に乗ったアイシャが密着してきた。すぐに助手席の要が殺気を込めた視線で睨み付けてくる。

「何よ、怖い目」

「別になんでもねえよ」

要の捨て台詞にあわせるように車はそのまま大通りを郊外へ向かうことになった。

「そう言えば吉田さんの家ってどこなんです？」

誠は当たり前前の質問を当たり前前の顔でした。不意に振り向く要。明らかに不機嫌そうなのタレ目にただ誠は冷や汗を流した。

「北上川」

要の言葉から東都郊外屈指の豪邸ばかりが並ぶ街の名前が出て来たので誠はただあんぐりと口を開けた。

「ああ、吉田少佐らしいわね。傭兵時代にかなり溜め込んだんですよ。それにあの人はうちでも一番の高給取りらしいから……さすがというかなんというか」

別に驚くに値しないというように流れていく景色を見ながらアイシヤがつぶやく。確かに考えてみれば当然のことかもしれない。下手な航空機よりよっぽど高価な軍用義体を自前で用意する吉田の蓄えが半端なものと考えの方がどうかしている。

それに吉田の交際範囲には傭兵時代に場つなぎにしていた音楽関係のプロデューズの仕事のつながりもあることは誠も耳にしていた。最近ほとんどそちらでの仕事はしていないと聞いているがそれにしても一度当たれば大きいのが芸能業界である。それなりに長く活動をしてきたらしいのだから印税やその他の定期収入もあるのだろうかなどと誠の考えが次々と巡った。

「北上川近辺なら……要ちゃんの顔でなんとか情報を得られるんじ

やないの？何しろ胡州帝国宰相のご令嬢ですもの」

「あのなあ、アイシヤ。アタシはほとんど親父の仕事関係の人脈とはノータッチだ。確かにたまに領邦コロニー経営の関係で人に会うこともあるがほとんどは役人ばかりだぜ。経営者クラスはアタシに頭を下げても金にならないのは分かってるだろうからな。そんな暇があつたら直接摂州コロニーの統治組合にでも顔を出すんだろ」

すげない言葉で返す要。確かに要の言うとおり狭い下士官寮に彼女が移つてからも彼女の統治する領邦コロニーの関係者がやってきたことは一度もない。第三小隊の小隊長の嵯峨楓少佐が所有する泉州領邦コロニー群と比べれば少ないとはいえ1億近い人口の徴税権を握っている要。こういうときには彼女が遠い存在に感じられて誠はただ静かに黙り込んだ。

「このまま高速に乗るからな。暴れるなよ」

主に要を牽制するように一言言うとカウラはギアをトップに入れてそのまま道をできたばかりのバイパスへと車を進める。

「なあに、この車も菱川のフラッグカーだぜ。そう簡単にコントロールを失つたりしねえだろ？」

「めんどうなんだ。止めてくれ」

要の茶々に苦笑いでカウラが答える。車はそのまま目の前の大型トレーラーに続いて高速道路の側道を走る。

「あれ……前の車が積んでるのは菱川の機材かしら？」

「さあな。アタシの知った事じゃねえよ。ついたら起こしてくれ。寝るから」

それだけ言うと要はそのままとシートを倒してきた。誠は狭い車内がさらに狭くなり思わず顔を顰める。

「要ちゃんにはかなわないわね」

明らかに人ごとだというようにそれだけ言うとアイシャもまた誠の足下に長い足を伸ばしてきた。

「勘弁してくださいよ……」

バックミラーの中で苦笑しているカウラにそれだけ言うのが誠のできる唯一の抵抗だった。

カウラのスポーツカーも豊川では目立つ車だが北上川の高級住宅街の中ではどちらかと言うと地味な存在に変わる。誠はようやく目覚めた要が不機嫌そうな顔で振り向くのを見ながら苦笑いを浮かべた。

高速では要とアイシャはすっかり熟睡していてまるで話を切り出すこともできなかつた。運転するカウラが時折バックミラー越しに何かを語りかけようとするのは分かっていたが、アイシャが狸寝入りでないという保証は無い。二人ともただ何も言わずに風景が次第に都会的になっていくのを眺めているだけ。ただ無駄な時間を過ごしたというようにつまらなそうにカウラはハンドルを操作している。

「なんだよ…… ったく気取った街だな」

寝ぼけた頭を左右に振りながら眺めている要の一言。その一言がきつかけだったように突然ぱちりとアイシャが目を開いた。

「アイシャさん起きたんですか？」

誠の言葉にアイシャが目覚めたことを知った要がめんどくさそうな表情で振り返る。アイシャはそのままむっくりと起き上がると大きくため息をついた。

「どこぞ？」

「北上川だ。もうすぐ目的地だろ？」

「まあな、このままこの通りをまっすぐ行くと白壁の屋敷にぶち当

たるからそこを右だ」

淡々とそう言うと要は口をつぐむ。その行為が少し意識的なものを感じられたようでアイシヤがにやにや笑みを浮かべながら自分のジヤンバーのポケットから携帯端末を取り出す。

「北上川……現在位置。中央白壁通り……突き当たるのは『撰州東和別邸』。要ちゃんの別荘？」

予想通りの質問が来た。そんな感じで苦笑いを浮かべる要。誠も重箱の隅を突くようなアイシヤの態度にはさすがに要に同情したくなってきた。

「悪かったな。うちの家は外交官の家だからな。東和は胡州とは因縁のある土地だ。時にはここに居を構えて交渉に集中する必要があるわけだ。その為の連絡事務所みたいなもんだな」

「それなら大使館に一室設ければ良いじゃないの……っていつかさすが胡州貴族四大公家筆頭は考えることが違うわね」

「別にアタシが考えたわけじゃねえよ。昔からそうなってるって話なだけだ」

相変わらずふくれっ面の要を見ながら誠はただ呆然と周りの高級住宅街を眺めていた。下町育ちの誠には本当に無縁に見える門構えが並んでいる。家の屋根が見えるのは希で、ほとんどが大きな塀しか道路からは見えない。その道路も豊川の建て売り住宅なら二軒分はあるような広さの歩道を持っていてさらに中央のこれも広すぎる路側帯にケヤキの巨木が寒空に梢を揺らしていた。

「本当にお金って言うのはあるところにはあるのね」

感心しながら周りを眺めるアイシャ。誠も通り過ぎる車が高級車ばかりなのに圧倒されながら目をちかちかさせつつ見物を続ける。

「あれで良いんだな？」

カウラの声で誠は正面を見た。目の前には本当に部隊の防壁よりもさらに高い白壁とその上には銀色に光る瓦屋根を載せた塀が延々と続いているのが見えた。

「本当に……お金持ちはあるものね……」

冷やかすのも忘れたアイシャがあんぐりと口を開けたまま左右に長々と続く要の実家の別邸の壁を眺めていた。

右折して続く真っ直ぐな道。左手には延々と要の実家の所有物の屋敷の白壁が続いているのが見える。

「本当に……お金貸してよ」

「なんでその話が出てくるんだ？」

要は苦笑いを浮かべるしかない。確かにこのただでさえ豪邸の並ぶ街にこのような巨大な施設を所持できること自体かなりの驚きではない。誠もただ呆然とようやく視界の果てに白壁が終わりを告げるのを見てほつとため息をつくしかなかった。

道は相変わらず豊川のとってつけた移動手段以外の意味を持たないそれとはまるで違うものだった。

「でも駅から遠いみたいだけど……ああ、みんな車を持つてるから平気なのね」

自分を納得させるようにアイシヤがつぶやく。誠は時々見える標識でこの道の地下には地下鉄が走っているらしいことはすでに分かっていた。

「次は警察署の角を右で……二番目の信号を左か」

カウラも要の立場を再認識したように瞬きをしながら意味もなく道順を口の中でもごもごつぶやく。要は明らかにうんざりしたように頭の後ろに手をやったまま目をつぶっていた。

両側の豪邸が途切れてしゃれた雰囲気の商店が両脇に並び始める。アイシャは明らかに珍しそうにその店を眺めている。誠もまたこのような上品な店とは無縁だったことを思い出させられる。そう言えば大学時代にはこの近辺の出身の同級生とはどうも話が合わずに気まずい雰囲気の中で酒を飲んだことを思い出す。特に芸術家気取りが多い工学部の建築学科の連中とはそりが合わなかったのを思い出した。

「そこだよ」

「分かってる」

要の言葉にカウラは不機嫌そうに交差点を右折する。すれ違う車は相変わらず高級車ばかり。

そのまま同じようにしゃれた感じの先ほどよりは少し閑静な感じの並木道をカウラの車は進み、そのまま二番目の信号を左に入る。先ほどまでのとてつもない金持ち達の領分から抜け出たような少しラックの下がったような街並みにアイシャと誠は大きくため息をついた。

「ああいうところは私は駄目だね。息が詰まるというか……洒落が効かないような感じがして」

「そうだろうな。テメエの貧乏面にはにあわねえや」

鼻で笑う要を睨み付けるアイシャだが、先ほどの要の別邸の巨大さを思い知っているので反論もできずにただ黙り込んで左右の明らかに特別注文されたと分かるそれなりに立派な家々に目をやってまた

ため息をついた。

誠もアイシャと同感だった。コマーシャルでやっているような大手の住宅会社の量産型建て売り住宅とはまるで違う趣のある家々。それぞれに設計事務所の技師が丹精込めてデザインに工夫を凝らし尽くしたのが分かるような家々を見て、ただただため息をつくだけだった。

「もうすぐだな」

「こんな家が並んでるなら間違えようが無いわね。本当にお金のあるところにはあるものね」

アイシャはまた同じような台詞を口にしたため息をつく。ともかく公務員であるカウラ、アイシャ、誠にはとても住めるような世界でないことだけは車が進む度に思い知らされることになった。

「本当にお金持ちの街なのね」

感心したようにアイシャがつぶやいたとき車は急に路肩のコンクリートに右タイヤを乗り上げた。

「着いたぞ」

要の言葉に誠はまだぴんと来ずにただ呆然と周りを見渡した。目の前の打ちっ放しのコンクリートの表面を晒した奇妙な家屋が目を引き。立方体をいくつも組み合わせたようなその姿。ある部分は出っ張り、ある部分は引っ込み。明らかにバランスが悪そうに目の前の空間を占拠している。

「もしかしてあの家ですか？」

「らしいだろ？」

助手席の扉を開けながらにんまりと笑って要は下りていった。アイシャが序章席を倒してそのまま這い出る。誠もまた狭い車内から解放されようと急いで道に飛び出した。

閑静な住宅街。大通りからは遠く離れていて車の音もほとんどなかった。

「じゃあ行くぞ」

要の言葉に誠達は目の前の奇妙な建物の玄関に向けて歩き出した。

その建物の奇妙さに比べると玄関はそれなりに先進的な作りだがセキユリティーのしつかりした上流階級の家庭ならどこでも見かけるような普通のたたずまいをしていた。

「留守だったらどうする？」

冷静なカウラの突っ込みにチャイムを押そうとした要が少し躊躇いがちに振り向いた。

「こういうところだと聞き込みするだけ無駄だよ……お互い関心なんてまるでもっちゃいねえんだ。プライベートの尊重？ そりゃあ建前で実際は後ろ暗いことがあるからなんだけどな。そうでなきや人の上に立つてこんな家まで建てるような身分にはなれないのが世の中という奴の仕組みだ」

「よく分かってるわね。さすがザ・上流階級」

冷やかすアイシャを無視したが他に何ができるといっわけでもない。とりあえず要はチャイムを押した。

しばらく周りの家々を見回す。ある家は瓦に凝り、ある家は塀の漆喰を南欧風に仕上げたりなどそれぞれ大通りに面した豪邸とはまた違うこだわりを見せつけてくるのが誠にはどうにもなじむことができない。

「留守か？」

「だと思ったわよ……あの人が連絡をしてこないのに家にいると思っわけ？ じゃあこのまま東山町でも出てアニメショップでも寄っていきましょっよ」

アイシャがそう言ったときカウラが静かに門扉を開けた。打ちつ放しの家に似て飾り気のない鉄板で出来たそれはすると開いた。

「開くな」

開いた扉を見ると要はそのまま遠慮もせず敷地に立ち入っていく。アイシャもカウラもそれが当然というようにその後が続く。

「良いんですか？」

「良いも何も……開いてるんだから入るのが普通だろ？」

振り返つてにやりと笑う要。誠はただ呆れながらそのまま家の門までたどり着いて中をうかがっているカウラの方に目をやった。

誠が思ったのは吉田ならどこかにトラップの一つや二つ仕込んでいるのでは無いかと言うことだった。カウラがポケットからサンングラスのようなものを取り出したのもそのせいだろう。

「赤外線反応は無し……監視カメラはどうだ？」

「無いな……意外と管理は甘いんだな」

要の言葉でようやくカウラはドアを確認する。まるで当然のようにそれは開いた。

「不用心ね。これじゃあ泥棒に入られちゃうわよ」

「あの少佐殿の家に泥棒？ そりゃあ身の程知らずもいいもんだな」

警戒するアイシャを笑い飛ばすとそのまま家は踏み入った。誠も仕方なくその後続く。

玄関口。別に豪華さがあるわけでも機能性を感じるわけでもないそれなりに小洒落た雰囲気のある玄関だった。

「洋風に靴で上がるのか……気取ってるねえ」

要には全く遠慮がない。カウラは赤外線探知装置付きのサンングラスをかけて警戒したままその後ろに続く。三階建て、天井まで吹き抜けのホールのような玄関口に圧倒されていた誠だが、そのまま真っ

直ぐ歩き続ける女性陣において行かれてはたまらないとそのまま奥のドアに飛び込んだ。

「食堂か……使った様子は無いな」

テーブルの上の埃を指でさすりながら要がつぶやく。アイシャが無遠慮に冷蔵庫を開けると中身は空だった。誠はそのまま電気式のコンロの前に立つ。そこも久しく使用した形跡は見受けられない。

「しばらく使ってない……これは三四日という感じの雰囲気では無いな」

カウラの冷静な分析に誠も頷くしかなかった。

「あの少佐殿は家には帰っても寝るだけみたいな雰囲気があるからな。高速に乗って一時間。間に飯屋は山ほどある。自炊の必要も無いと言うことなんだろうな」

要はそう言つとそのまま隣のリビングに足を踏み入れた。そちらは多少人のいた形跡があった。ソファーにも人が寄りかかったようなへこみが残っているし、その手前のテーブルの上の音楽雑誌の山の上にも埃の気配は無かった。カウラは当然のように手元にあったテレビのリモコンを操作する。電源を入れると最近はやりのネオテクノ系の音楽を流している番組が流れていた。

「やっぱりそうだ。ここでテレビでも見て時間を潰してから寝たんだろうな……」

「そんな日常をトレースするのは良いんだけど……手がかりはどこ？」

アイシャの真つ当な質問に要は頭を掻きながら奥にあったドアに向かって歩き出した。

「勝手に動くなよ」

「動かなけりゃあ手がかりも見つからないってもんだよ」

平然と扉を開く要。その部屋だけは空調が効いているらしく、乾いた空気がリビングまで流れ込んできた。

「電気は……ここか」

いつも通りデリカシーもなく平然と電気を付ける要。誠はその光の中に現われたものに目を奪われた。

「ここは？」

ただ目の前に並ぶ木製の棚。その高さは優に三メートルは超える。そしてぱっと見た奥行きで30メートルはあるだろうこの部屋の雰囲気は誠はただ息を飲むしかなかった。

「凄えなあ……なんのコレクションだ？」

要は遠慮無く手前の木の棚の扉を開いた。誠もカウラもついそれを覗き込んでいる。いくつも並んでいる薄い物体。誠は初めて見るその物体をただ呆然と見つめるだけだった。

「まさか……レコード？ マジかよ……今更何に使うのかねえ……」
要は遠慮せずにその一枚を取り出す。三十センチ強の四角い板が目の前に現われる。表面には三人の黒い背広の男の写真がプリントされている。

「もしかしてLP版じゃないかしら？ それにしたら凄いコレクションよ。もう三百年以上前の代物だもの……その保存のための部屋。凄いわね」

いつの間にか部屋の奥で同じように扉を開けてレコード盤を取り出していたアイシャがつぶやく。誠もその言葉でようやく目の前の物体の正体を知った。レコードと呼ばれるものがあることは誠も知っている。アナログな記憶媒体が一般的だった20世紀の音楽を記録する媒体と言うことはアニソン以外の音楽に疎い誠も知っていることだった。特に懐古趣味が強い東和ではこう言う古い媒体は珍重される代物だった。

「この一つの箱で……五十枚以上入っているな。どれだけ集めたんだ？ あの人は」

ただ珍しい媒体の並ぶ部屋を見回すカウラ。彼女が呆れるのももつともな話だった。ざっと見ただけでも箱は百や二百という数ではない。その集められた音楽の数に誠も圧倒されるしかなかった。

「ジャズはねえのか？ 趣味人にしては気がきかねえな」

要はレーベルを一枚一枚確かめていく。手前の見えるところを見終わると下の箱を開けてまた検分を始める。

「吉田少佐はジャズって感じじゃないでしょ？ なんだかよく分からないけど……もつと軽い感じというか……電子音ばりばりの感じがしない？」

同じように奥で箱を開けては中身をのぞき見ているアイシャがつぶやく。

「そんなに開けて良いのか？ 後で証拠が残るとまずいだろ」

心配そうなカウラを要は一瞥すると手を振って気にするなと合図した。それを見ると誠も好奇心に負けてそのまま部屋の奥へと足を向けた。空気が凍ったように静かな部屋の中。ただ箱の扉を開く音とレコードのジャケットを要やアイシャが引き出す度に起きる摩擦音だけが響いている。

誠はそのまま手近にあった箱の扉を開いてみた。

ここにもぎつちりとレコード盤がひしめいていた。背表紙のような部分にはアルファベットの表記でそのレコード盤のタイトルが印字されている。よく読むと英語とドイツ語の表記が多いのが分かる。

試しに一枚を引き抜いてみた。

四人の男が道路を横断しているデザインのジャケット。誠はそれがどこかで見たことがあるような気がしていたがどうにも思い出せず、そのままそのレコード盤を箱の中に戻す。一枚いくらの値がつくのか。この家の設計からして相当な吉田のこだわりが感じられるだけに恐ろしくも思えてくる。

「これ割ったら切腹ものかしら」

さすがにアイシャも手にしたレコードの価値に気づき始めておっかなびっくり手にしたレコード盤を箱の中に戻すとそのまま入り口近くで箱を覗き込んでいるカウラのところの戻ってきた。

しかし、そんな価値のことなどまるで気にしない人物が一人いることは誠も十分分かっていた。

「大丈夫だろ？ どうせほとんどは最新のデータ化されて東都国立図書館とかで聞こうと思えば聞ける代物ばかりだろうからな。それに……」

要は平気で厚紙の中に入っている黒い樹脂製の円盤を取り出す。そしてそのまま天井に付けられた淡い光を放つ照明にかざして溝が彫られた表面をのぞき見た。

「相当酷使の後があるな……ターンテーブルか何かで回したんじゃないのか？ これは」

誠の聞き慣れない『ターンテーブル』という言葉。カウラもただ首を傾げてレコード盤を箱に戻す要を眺めていた。

ともかく凄いコレクション。誠は呆れつつ眺める。

そんな時要の表情が曇った。

「外に誰か来たな」

カウラとアイシャの顔にも緊張が走る。一応は不法侵入である。これがばれればろくな事にはならない。

「どつするのよ……」

そう言うとアイシャはそのまま隠れようと奥に移動しようとする。

「やべえ……警察だわ」

要の声が絶望に包まれた。完全に吉田の仕組んだ罠にはめられた。誠はその事実によつやく気がついた。

「説明すれば分かってもらえるんじゃないか？ 吉田少佐が行方不明なのは確かなんだから」

「カウラ……だからと言って不法侵入していい理由にはならねえだろ？」

珍しく要の言うことが正論だったのでそのまま誠は頷くしかなかった。

「警察だ！ 侵入している人物に告げる！ 直ちに出て来たまえ！」

インターフォンの向こうからの強い語気に奥に隠れていたアイシャも観念して誠達のところに出て来た。

「これは自首するしか無いわね……」

「まあ吉田少佐は行方不明だ。それに私達は一応彼の同僚。起訴もされないが……」

「小言の一つや二つですめばいいがな」

怒られ慣れしてる要は平然として苦笑いを浮かべるだけ。誠はと言えはすっかり萎縮してただ動悸が止まらないのに焦るばかり。

「行くぞ」

普段通りの要はそのまま諦めたと言うように出口へと向かう。カウラもアイシャも頂垂れたまま彼女に続いた。

「神前！置いていくぞ！」

要に見放されれば誠には立場がない。慌てて彼女の後を付ける。そのままがらんどうの玄関ロビーに出た三人は玄関先で厳しい視線を送る三人の警官の前にたどり着いた。

「君達は何者かね？ 防犯装置が作動しているのだから……物取りか何かか？」

あまりにあっさりと出て来た要達に拍子抜けしたような調子で巡査部長の階級章を付けた警邏隊員と思われる初老の警察官が尋ねてくる。

「いや……物取りというわけでは……ちょっと話すと長くなりそうですね。ですから署につきあいますよ」

慣れた調子の要の言葉に逆に当惑する警察官。それが要に出来る唯一の強がりだと分かって誠も同じような苦笑いを浮かべるしか無かった。

大きなため息を保安隊隊長室の椅子に座った嵯峨惟基特務大佐がついた。目の前の机には組み立て途中の拳銃の部品が散らかっているのはいつものこと。誠はただそれを見ながら嵯峨の片付けられない性格を思い出して何とか気を楽にしようとしたがそのなんとも悲しそうな瞳を見ると何も考えることが出来ずにただ黙り込んだ。

「あのさあ。俺達の仕事は警察の手に負えない超国家犯罪に対応すると言うのが建前なんだよね……それが警察のお世話になるのがこれで何回目だ？」

そう言つて再び嵯峨は大きくため息をついた。カウラは一人直立不動で正面に立つてじつと嵯峨を見つめている。不満そうな要とアイシャ。いつでも反論してやろうと睨みをきかせる二人になんとか黙っていてくれと祈りながら誠は胃を押さえて立ち尽くしていた。

「特にベルガー……お前さんはこれからしばらく運行部の25人をまとめなきゃならないわけだ……自覚あるの？」

「今回は吉田少佐の策にはまっただんです！ 自宅じゃ無くて正面の家に無断で監視カメラを置くなんて……」

「ばれなきゃ良いってもんじゃないだろ？ まあ事實はそうなんだけどさ……俺にも立場があるんだよ」

泣き言のようないつもの嵯峨の言葉に誠は隣の要の表情をうかがった。こちらも好戦満点。警察への通報は吉田自身によるものだと分かっているのに吉田の足取りはさっぱりつかめなかつた腹いせを叔

父にぶつけて晴らそうという表情に誠の胃がきりきり痛む。誠は黙って隊長の執務機の隣に立つ小柄に過ぎる実働部隊長クバルカ・ラン中佐の表情をうかがった。こちらはあきれ果てたという表情。要とアイシャがいくら騒いでも四人の処分は決まっていることが誠にも察しられた。

「先月の違法法術発動事件の時に散々豊川署の面々を挑発しただろ？ おかげですっかり東都警察は俺達を敵扱いだ。今回だって俺に直接本庁まで出て来いって話まで来た」

「応じたのか？」

「俺達は同盟直属の機関だぞ？ これで俺が出て行ったらいつでも俺達は頭を下げると舐められるからな……お前等を買っている親身な中佐殿の土下座外交のおかげでマスコミ対策付きでなんとか話を付けてきたんだ。感謝しろよ……」

嵯峨は隣に立つランに目を向ける。ランはただ黙ってカウラの方を眺めるだけだった。おそらくは相当な激しいやりとりがあっただろうと言うことは誠にも想像がつく。後で分かったが吉田が勝手に監視カメラを設置した家が東都警察の幹部の実兄の実業家の家だったこともこの状況を悪化させる一因だった。公私混同だと要がわめいていたがあつた素早い警察の反応も吉田が警察の思いやり警備を想定しての通報だと考えれば納得がいく。

「カウラ。とりあえず反省の言葉……お願いね」

「反省の言葉？ 確かに自分達の行動が法に反していたのは事実ですがあくまで私的な行動ですし……その私的な行動にこういった反応をするのはいかなるものかと……」

誠はカウラの性格を読み間違えた自分を責めた。こういうときは正論をぶつけるタイプ。本質的に事なかれ主義の嵯峨の配慮を無視するだろうと言うことは最初からわかっていたはずだった。

「そりゃあ理屈はそうだがね。世の中真つ当な意見が通る事なんてほとんど無いんだから……司法局の上の連中も直接は言わねえが、報告書を送る度にオメ工等の処分はまだかつて言葉の終わりにつけやがる」

「処分？　うちの内部の話だろ？　これもすべて吉田の馬鹿が……」

「黙れ！　西園寺！」

それまで黙っていたランの激しい言葉にさすがの要も口をつぐんだ。ランの表情は先ほどと変わらず厳しい。再び沈黙が保安隊隊長室を支配する。

「北上川で住居不法侵入……他の街ならまだしもあそこは止めて欲しかったんだよね……本音を言っとね。でもまあ……お前等も吉田探し……続けたいだろ？」

嵯峨が不気味な笑みを浮かべた。誠はその舌なめずりでも始めそうな表情を見て明らかに嫌な予感がするのを感じていた。

「吉田少佐捜しを続ける？」

カウラは嵯峨の言葉の意味が分からずに首をひねった。要とアイシヤは大きく頷いた。

「テメー等は二週間の停職だ。分かるな？」

厳しい表情のランの口から放たれた言葉に誠はただ呆然としていた。停職はさすがに初めてである。当然のことながら謹慎の時もそうだがその間の給料は天引きされる。誠は思い出せば配属以来まともな給料が支給されたことが無い事に気づいた。

「停職？」

「そう、これで心置きなく探せるだろ？ それに来月頭に第二惑星旧資源探査コロニー跡地で演習やるから。それまでゆっくり骨休めするのも選択の余地ではあるんだけど……」

「探します！」

嵯峨の言葉に食ってかかるアイシヤ。要も天井を向いて何か策でも考えているように見えた。

「停職……圧力ですか？」

冷静なのはカウラ一人だった。嵯峨はその言葉にしばらくランの顔を見た後、腕を頭の後ろに回しながらつぶやきを始める。

「まあね……東都警察は本当にうちを目の敵にし始めててさ。何かって言うとやれ証拠がどうだだの、捜査方法の遵法性に問題があるだの……この前の水島とか言う法術師。結構いい弁護士がついてね……どこから金が出るのか知らないけど」

「金の出所は米軍だろ？どこを經由しているかは知らねえけど」

要の言葉に嵯峨はとりあえずと言うように頭を掻く。

「うちは全部報告書にまとめて送ってるから義務は果たしているわけだが……そもそもうちが捜査に噛んだことを弁護士が相当突き上げてるみたいでね。検察からそのことで散々絞られたらしくて……まあ俺達のせいじゃないがこれからは協力は出来かねると言われたよ」

「けつの穴の小さい連中だな」

「一緒にいて分からなかったの？ 要ちゃん」

冷やかすアイシャに要が鋭い視線を向ける。嵯峨はとりあえず言うことは言い終わったとそのまま手を机の上の組みかけの拳銃に手を伸ばした。

「じゃあ荷物まとめて寮に帰って良いから。あと吉田の足取りがつかめたら報告してね」

「やなこつた！」

気楽につぶやく叔父に頭に來たと言うように吐き捨てる敬礼もせ

ずにもそのまま部屋を出ようとする要。カウラの敬礼を見て我に返った誠とアイシャはとりあえずの敬礼をして部屋を後にする。

「どうするの？」

挑発的なアイシャの言葉に要の顔はすでに笑みに支配されていた。

「叔父貴がまだ掴んでない情報だ。鼻を明かしてやろうじゃないか
！」

誠はこれからさらに面倒な事になりそうだと言つことで頭を抱えて詰め所への道を歩き出した。

「隊長……」

半分呆れたような口調でランがため息をつく。嵯峨は気にする様子もなく拳銃のスライドをやすりで削り始めた。

「アイツ等行くところまで行くかもしれませんよ」

「まあそれもいいんじゃないかねえの？ いざとなったら俺が辞表を書けば済むことだからね……」

あっさりとそう言ったまま嵯峨はひたすら作業に没頭している。

「ならあんな突き放すような言い方は……」

「子供じゃないんだからさ。いざとなったら俺が助け船を出してやるなんて言ったら失礼じゃないの。それに俺が吉田の行方を知らないし知りたいのは事実だから」

嵯峨の最後の言葉にランは意外そうに首をひねった。

「『草』や『遼南憲兵隊』も掴んでないんですか？」

『草』と『遼南憲兵隊』と言う言葉に嵯峨は眉を顰めながらランを睨み付けた。ランはその殺気のもった視線に珍しく口ごもって黙り込んだ。

『草』は遼南王家直属の諜報組織として嵯峨の祖母ムジャンタ・ラ

スバ女帝により組織された非公表機関と言うことは知られていたがその実態はランもよくは知らなかった。現在は嵯峨のコントロールにあるとされるが実際の程度の情報が嵯峨にもたらされているかはランも確認できていない。

その点、『遼南憲兵隊』は嵯峨が先の大戦で胡州帝国軍人として活動していた際の指揮していた部隊なのである程度の輪郭はランも承知していた。

ゲルパルト帝国、胡州帝国、遼南帝国の遼州三枢軸国家は地球に対し宣戦を布告。これによって発生した第二次遼州戦争だが、遼南帝国は暗君として知られたムジャンタ・バスバ帝は政治に飽きて酒色に溺れる有様ですでに朽ち始めていた。胡州はそれを立て直すべく治安維持部隊として憲兵隊を組織して派遣し治安維持の補助活動に当たらせた。その部隊長がムジャンタ・バスバ帝の嫡男であるムジヤンタ・ラスコーこと嵯峨惟基少佐であったことは歴史の皮肉以外の何者でもなかった。

『遼南憲兵隊』は遼北の赤化細胞活動に対する徹底的な武力制圧活動を行った。いくつもの村が一人のゲリラを出したという理由で女子供の例外なく処刑された。その処刑はすべて嵯峨の手で行われたと言われている。枢軸側の敗北を察知していた嵯峨は戦後、戦犯として極刑に処される可能性のある部下を出さないためにすべての罪を自分でかぶるつもりだったと後に遼北に投降した彼の部下だった憲兵軍曹が語っていたのをランは遼南共和国時代の資料で見たことがあった。

胡州の敗戦で四散した嵯峨の部下達がその後の遼南内戦時に潜行、欺瞞工作、煽動、暗殺等の共和軍の活動を鈍らせるあらゆる活動を行って人民軍の勝利をサポートした事はランもよく知っていた。そ

してそれでも彼等がかつて敵対した人民軍首脳部との確執から日の当たる場所を歩けない身分であることも十分に予想が出来た。

そして現在は彼等は嵯峨の手の届く範囲で情報収集活動を行っていることも十分予想が出来た。彼等は嵯峨の庇護無しでは永久に追われる日陰者にすぎない。だがその活動の成果は嵯峨の政治的発言力という形で世界を確実に変えつつある。勲章や名譽とは無縁の『遼南憲兵隊』の面々が嵯峨個人の為に活動をしている気持ちは共和軍と言う敗軍の将であるランを東和軍に推挙してくれた嵯峨の繊細な配慮を知っているだけにランには十分に理解できた。

「いつまでもさ……俺に頼ってばかりじゃ困るだろ？ まあ今回はさらに頼れる吉田が行方不明って訳だから自分でなんとかしないとイケないわな」

嵯峨がにやりと笑う。ランは呆れたようにため息をついた。

「使えるコネを生かせと……西園寺が暴走しますよ」

諦めかけたようなランの声に嵯峨はそのまま手にした拳銃のスライドを作業台に置くとそのまま油まみれの手を後頭部に回して伸びをする。

「まあいいじゃねえの？ 俺もそうだったしな。少ないとはいえ経験や人脈があれば使えるように訓練しておくことも重要なお仕事をこなすコツだよ。特に捜査関係、司法関係の仕事で情報収集をしようとするれば多少の無理が利く人脈を作っておくのも悪くはないだろ？」

「西園寺は……『東都戦争』の時の人脈を使いますよ」

ランの表情は明らかに曇っていた。シンジケート同士の大規模抗争である『東都戦争』と呼ばれる一連の事件の背後で胡州陸軍の表沙汰にはされていない権益の確保のために非正規活動に従事していた要のコネクションが真つ当な司法機関の情報収集活動の領域を超えることはランにも予想がついた。

「いいじゃねえの？ シンジケートの人間は軍人や警官よりも信用

できるよ。アイツ等は利益で動くからな。金を握っている限り裏切ることはないから扱いやすい」

平然と言い切る嵯峨。非正規活動の経験の無いランには目の前の元憲兵隊長が何を考えているのか分かりかねてただ黙り込むしかなかった。

「話は変わるけどさ……遼北と西モスレムの衝突。かなりヤバイらしいな」

嵯峨は手に着いた油が後頭部にべったりと張り付いた事に気がついて顔を顰めながらランに目をやった。

「突然変わりましたね……ヤバイのは誰でも分かると思うんですが……」

「いやあ、両軍の引き離しをやってるシンからの連絡でね。両軍の部隊長クラスは嫌がってるらしいが……前線の兵隊連中が挑発行為を勝手に初めているらしいや。発表はされちゃいねえがすでに死者は二桁になっただらしいぞ」

明らかに両軍が隠しているだろう情報。それを嵯峨が自分でそれを知った訳では無く生粋の軍人である同盟軍事機構の部隊長であるアブドゥール・シャー・シン少佐からの伝聞と表現したことにランは少し疑問を感じた。

「シンからですか？」

「そうシンから。うちのOBだからな、あいつも。仲間思いの情報通が教えてくれたんだろ？」

嵯峨の言葉でランはようやく答えにたどり着いた。

「吉田ですか……」

「他に誰がいるよ。吉田の野郎……何か掴んでいるはずなんだ。だから姿を消した。起きるぜ……きつとそう遠くないうちに予想もしていなかったようなことがね」

不謹慎な笑みを浮かべる嵯峨を呆れつつ、ランは大きいため息をつきながら頭を掻いた。

朝と言うには遅すぎる時間だった。

「どつするの？」

保安隊下士官寮の食堂。がらんとした空間でじっと誠の顔を見つめながら眉間にしわを寄せながらアイシヤがつぶやいた。

「どつするも何も……プラモでも作ります？」

「馬鹿か」

他に答えることが無くてぼけて見せた誠に隣の席に座っているカウラがつぶやいた。初春の日差しが窓からこぼれてくるのがすがすがしいが誠達の心は晴れない。一応は謹慎中の身の上である。そしてその間に吉田を探すように嵯峨には指示されているがまるで手がかりはない。

「どこかに転がっててくれると楽なんだけどなあ……誠ちゃん。ヒントちょうだい」

「僕が持っているわけが無いじゃないですか！」

アイシヤのとりとめのない言葉にただ答えるだけの誠。アイシヤは先ほどから暇そうに首をねじりながら誰もいない食堂を落ち着き無く見回している。当番ではない隊員は確かに今日も寮にいるのだが、謹慎中の男子下士官寮に似つかわしくない上に絡むとろくなことにならないアイシヤなどに関わり合いにはなるまいと食堂に近づくと

影は無かった。

「手がかり無しで人一人を捜す……しかもその人物は名の知れた傭兵上がり。人混みに紛れる名人だという……私達だけではどうしようもないだろ。仕方ないからおとなしくしているしか無いんじゃないか？」

「カウラちゃんは薄情ねえ。もしかしたら大変な事件に巻き込まれているのかもしれないのよ」

心配するような顔を急に作ってみせるアイシャ。そのバレバレの演技に誠はただため息をつく。

「ベルガー少佐。大変な事件に巻き込まれているなら報告書を定期的に作成したりナンバーバルゲニア中尉のシミュレーションのプログラムをしたりは出来ませんよ」

「誠ちゃんまで……。それは、吉田さんが優秀だからと言うことで良いじゃないの。それに今は遼北と西モスレムの衝突の危険性が迫っているのよ。おそらくそれ絡みで……」

「妄想もいい加減にしろ」

ただただ大きいため息をつくカウラ。部屋はそのまま沈黙に包まれる。

「テレビでも見ようかしら」

さすがに飽きたと言うようにアイシャが立ち上がったが、その時食堂の入り口の扉が開いた。

「西園寺。何かあったのか？」

この場の雰囲気になさわしくない不敵な笑みを浮かべる要にカウラはやりきれなさそうな表情でつぶやいた。

「なあに……仕込みに時間がかかってな」

それだけ言うと要はそのまま厨房の前のカウンターに向かって歩き出した。そのままポットとインスタントコーヒーを手にするとそのまま誠達の座るテーブルに置く。

「何……気味が悪いわね。そんなに気が利くなんて。コーヒー入れてくれるの？」

「入れるのはテメエだよ。アタシの仕込みの話。聞きたくねえのか？」

いかにもやり遂げたような表情の要に首をひねりながらアイシャはそのまま立ち上がるとカップを取りに立ち上がる。カウラはただ呆然とその有様を見ながら不思議そうな表情でどっかと腰を下ろす要を見つめていた。

「何を仕組んだ」

カウラの質問に素直に答える要ではない。にやにや笑いながら食堂に備え付けられた戸棚をあさっているアイシャの後ろ姿を満足そうに見ている要。しばらくすると不機嫌そうな表情でお盆に人数分のカップと砂糖とミルクを持ってアイシャが帰ってくる。その有様。十分話を切り出すまでの時間を貯めたと満足するように頷くとそのまま顔を突き出して口を開く。

「オメエ等には何も期待出来ねえからな。カウラは製造から八年。

同じロットの連中は公務員ばかり。アイシヤはまあ稼働時間が長い
が付きあいの幅は……まあ誠とどっこいだ」

「ほっておいてよ」

あっさり切り捨てられたアイシヤがめんどくさそうにカップにコー
ヒーを分けながらつぶやく。要はそれが満足できる反応だったとい
うように嫌らしい笑みを浮かべながら話を続ける。

「その点、アタシは裏社会でのコネがある。確かに叔父貴はいろん
なコネがあるが、すべての世界を知ってるわけじゃねえ。もしそう
ならこれまでのアタシ等の苦労は半分くらい無駄だったことになる
からな。そう考えるとアタシの昔のコネを使うっていうのが一番だ
と思うんだ」

「信用できるのか？」

アイシヤからコーヒーの入ったカップを受け取りながら渋い表情を
浮かべるカウラ。要はまだ平然として見つめてくるカウラをにらみ
返す。

「相手は電子戦、情報戦のプロだ。ネットでその動向を捜すのはま
ず無理。こちらが捜していると分かればひねくれ者の旦那のことだ。
いくらでも妨害工作をしてくる。その点実際に足を使える人間を揃
えておけば相手は物体だ。さすがの旦那も蒸発するってことが出来
る訳じゃないだろ？」

「そう言えば昔液化出来るサイボーグの出てるアニメがあったよ
うな……」

茶々を入れるアイシャを要は怒りの表情で睨み付ける。

「そんなことは無理だから大丈夫ですよ。でも……今は正規任務の部隊員ですよ、西園寺さんは。そう言う裏の世界の人ってそういう立場とかで人を見るんじゃないですか？」

誠の質問に機嫌を直した要が懐からカードの束を取り出した。

「地獄の沙汰もなんとやらだ。どうにか話を付けてみせるよ」

「さすが財閥。凄いわね」

珍しく嫌みのない調子でアイシャが見たこともない特典付きと思われるカードを手にとって感心したように眺めていた。

「現金にするぞ」

突然要はそうつぶやいた。カウラの表情が曇る。

「現金？ そんな金額で良いのか？」

カウラの言葉に要は心底あきれ果てたという表情でカードをちらつかせてみせる。

「セキュリティの掛かっている奴じゃ駄目だ。もらう人間はみんな後ろ暗いところのある人間だぞ。それ以前に租界から出られ無いようなヤバイ人間もたくさんいるんだ。そいつにカードを渡してどうなる？ ただの樹脂製の板をもらって喜ぶのは赤ん坊だけだ。現金、しかも米ドルじゃないと受け付けないな」

「米ドル？ それじゃあ大変じゃ無いの。最近換金規制でそう簡単には手に入らないわよ」

うんざりした表情のアイシャの肩を要が叩いた。

「だから手分けして換金するんだ。幸いアタシのカードはそれなりに信用がある。銀行一つ頭百万ドルとして……大手を十件も回れば十分だろ」

『百万ドル』という言葉を手軽に言う要に誠はただ薄ら笑いで答えるしかない。

「コーヒー飲んだらさつさと準備しろよ。今日の夕方までに現金を作って夜には連中に会うからな」

要は一気にコーヒーを飲み干して立ち上がる。誠達はただ呆れてその様子を眺めていた。

「もう連絡はしたのか？」

「まあな。返事を待ってても無駄だ。こう言う連中は興味があるときはすぐに食いつくが無ければ何年待っても反応はねえもんだ。今日中に情報屋を五人は手配できれば御の字だ」

「その五人にいくら使うのかしら……」

手を広げて金の計算をしていたアイシヤを要が睨み付ける。アイシヤはただにこやかな笑みを浮かべると誤魔化すような調子でコーヒーを飲み干す。

「さつさと準備しろよ！」

要はそのまま食堂を出て行った。誠達は彼女を見送ると当惑しながら顔を見合わせた。

「そんなに簡単に手配できるのか？ 情報屋が」

カウラの心配そうな表情。

「全く本当にすさまじい金持ちね。軍人やる必要なんて無いじゃないの」

アイシャもただ呆然と机の上に散らかっているカードを手にとつてはまじまじと眺めている。

誠は何も出来ずに状況を見守っていた。どうやら大変面倒な状況に落ち込みつつある。いつものことながら誠にはため息をつくことしかできなかった。

その後誠達は都心のビジネス街を車で走り回った。持って行ったのはポストンバック一つ。銀行で札束を受け取る度にそれを無造作に放り込む要。

「まるで銀行強盗にでもなった気分だな」

にやにや笑う要だが誠はそのバックの中身が分かっているだけに笑うことなど出来なかった。基本的に地球外に対する地球圏諸国の経済的締め付けはかなり厳しいものがあつた。特にアメリカドルとなればその信用もあつて換金にはそれなりの手続きが必要になる。しかも大体がこんな金額を現金でやりとりすることなど25世紀も半ばというのに考えている人間がどれだけいるか謎なところだ。当然窓口でなく話はすべて銀行の奥に通されての話となる。

「本当に麻薬や武器の取引ではないんですね？」

要が自分の身分を明かして胡州の領邦代官にまで身元確認を終えてからも地球系資本の銀行の支店長はそう言いながらいぶかしげに要を睨み付けていた。

本来の要の性格なら殴りかかっても文句は言えない態度だが、要も相手を読むくらいの芸当はできる。

「私のお金です。後ろめたい使い道をするわけがないではないですか」

おしとやかにそう言う割にはまだ二月半ばだというのにタンクトッ

プの上に黒い革ジャンと言う姿は異常に見えた。

結局は夕方まで掛かってポストンバックいっぱい現金が用意された。大口の決算処理が電子化されて数百年。これほどの現金を持って歩く人間が真つ当な使い方をすると誰も思わないだろう。誠はカウラの赤いスポーツカーの後ろで小さく隣ながら隣の席でバッグの現金の束を確認している要を見ながらただ苦笑だけを浮かべていた。その中にどれだけの金額が入っているかは三行目で数えるのを止めた。それほどの金額。下手をすればアサルト・モジュールの一機や二機は買える金額だ。

「ずいぶんと情報とやらを手に入れるにはお金が掛かるのね……」

助手席で皮肉混じりにアイシヤがつぶやく。

「陸軍の非正規部隊も相当な金を使ったからな。最新鋭のアサルト・モジュールや戦艦を装備した部隊とまあ同じくらいの経費は掛かるもんだ」

札束を握りしめながら要がつぶやく。

「本当にこのまま行くのか？ 東都を出ることになるぞ」

カウラがつぶやく。車は高速道路を東都湾に沿って一路東に走っていた。

「こんな金を湾岸の租界近くで持って歩くのか？ 殺してくれって言ってるようなもんだぞ。ちゃんと相手には伝えてある。総葉インターまで突っ走れ」

すでに日は落ちて街灯の明かりに照らされている要の表情が急に冷たく感じられた。誠はそれを確認すると高速道路の防音板の流れていく様を見つめていた。

「総葉？ 租界からは遠いわね……お客さんは船ね」

アイシャの何気ない一言に要は静かに頷いた。

「何でもそうだが金で世の中の大概のことはどうにかなるもんだ。

総葉には食料関係のコンテナターミナルがあるが……ノーマークのあそこが実は租界と東和の出入り口って訳だ」

札束を握りしめる要の言葉に意味もなく頷きながら誠はただぼんやりと流れていく景色を見つめていた。

「つまらねえな……カウラ。ラジオでもつけるよ」

命令口調の要の言葉にこめかみをひくつかせながらカウラがラジオをつけた。ちょうど夕方五時のニュースが流れていた。

『……遼北軍高官によりますと今回の侵攻による被害は……』

「ついにぶつかったわね」

冷静な口調のアナウンサーのまねをするように冷静な口調でアイシヤがつぶやく。

『アサルト・モジュール5機を同盟軍事機構の攻撃により失ったことに関して同盟機構への抗議の文書を提出すると言う方向で現在調整中だと発表しました。また同じく四機のアサルト・モジュールを失った西モスレム軍高官は今回の前線司令部上層部の行動をイスラム法規委員会の方針に反した独断専行であると指摘、北部総司令以下数十名の高級将校の身柄を拘束して軍事裁判にかけるとの方針を発表。同盟機構の大河内広報官は当面の遼北・西モスレムの直接の軍事衝突の危機は避けられる可能性が高くなったとの見解を発表し

……』

「おい、シンの旦那のスコア増えたみたいだな」

相変わらず札束を握りしめながら要がつぶやいた。遼北と西モスレムの軍事衝突の間に割って入ったシンの同盟軍事機構の部隊による両軍に対する実力行使行動の発表は車内に一種の安堵感をわき起こ

していた。

「まあシン大尉なら実戦経験も豊富なもの。それにカウラちゃんも要ちゃんはかなり鍛えられたんでしょ？」

アイシャの何気ない一言でカウラの前任の第二小隊の隊長が話題の人アブドゥール・シャー・シン大尉であることを誠も思い出した。

「事務屋はこなせるがこちらが本業だからな、あの旦那は。それにしても……西モスレムも遼北も張り子の虎だな。たかだか数機のアサルト・モジュールを失ったくらいで戦意喪失か？」

「アサルト・モジュールの一機の値段を考えてみる。それにシン大尉がまともに撃墜しただけなら前線の司令官を更迭するなんて言う強攻策まで取ることは無いんじゃないかな……」

ハンドルを軽く叩きながらカウラは車を追い越し車線に運ぶ。そしてそのまま一気に加速して目の前の大型トレーラーを追い抜いて見せた。

「法術ね。あの人はパイロキネシスとでしょ？」

そう言うとアイシャはダツシユボードから携帯端末を取り出してそのままキーボードを叩き始めた。ラジオがニュースから音楽番組に変わったところでカウラはラジオを切った。

「シンの旦那はマリアの姐御から領域把握能力の指導を受けていたからな……テリトリーに入った敵機に法術発動して敵兵を全員消し炭にでもしたのか？」

冗談めかして要がつぶやく。アイシャはたた曖昧に頷きながら画面を頻繁に切り替えて検索を続けていた。

「どうやら要の冗談が本当の話みたいよ」

手を止めたアイシャが手元の画像を無線で飛ばしてフロントガラスに投影した。真っ黒な映像が目の前に広がる。そして凝視するとそれが焼け焦げたアサルト・モジュールのコックピットであることが見て取れた。

「ひでえ有様だねえ……これを見たら戦意も無くなるな」

呆れたように要がつぶやく。誠もただ呆然と手首だけが操縦桿だった黒い棒にへばりついているパイロットだった黒い塊を見てただ呆然とするしかなかった。

焼け焦げていく敵兵の意識。誠はそれを想像していた。法術は意識の領域を拡大したものと担当士官のヨハン・シュペルター中尉から聞かされていた。おそらくはシンもそれを感じていたことだろう。

突然全身の水分が水蒸気爆発を起こす瞬間。想像するだけでもぞつとする。

「つまらねえこと考えるんじゃないぞ」

まるで誠の心の中を読んだかのように要がつぶやく。誠は見透かされたことを恥じるように頭を掻くとそのまま外の風景に目を転じた。

流れていく風景にはいくつもの高層マンションが点在している。そこに暮らす人にもまた法術師がいてその力の発動に恐れを抱きながら生きている。この半年の法術犯罪の発生とそれに伴う差別問題の深刻化は世事に疎い誠の耳にすら良く届いてくる。その典型例が先月の法術操作型法術師による違法法術発動事件だった。

法術適性検査は現在では任意と言うことになっているが、一部の企業はリストラの手段としてこれを強制的に受検させ、適正者を解雇するという事象が何度となく報告されている。そんなリストラ組の一人がその鬱憤を晴らそうと次々と法術師の能力を操作して違法に法術を発動させ、放火や器物破損、最後には殺人事件まで引き起こした悲劇的な事件。

その犯人が最後にこんな社会を作るきっかけとなった法術の公的な初の観測事象を起こした誠に向けた恨みがましい視線を忘れること

は出来ない。おそらく誠がアステロイドベルトでの胡州軍保守派のクーデター未遂事件、通称『近藤事件』で法術を発動させなければその犯人は犯人と呼ばれることもなく普通の暮らしを送っていたことだろう。

これから起きるだろう社会的弱者となつた法術師の起こす自暴自棄の違法法術発動事件。それに出勤することが予想されてくるだけに誠の心は沈む。

「誠ちゃん。自分を責めるのは止めた方がいいわよ。遅かれ早かれ法術の存在は広く知られることになつたでしょうから。むしろ今まで知られずにいたのが不思議なくらいよ」

気休めのように聞こえるアイシヤの言葉に誠は答えることもなくそのまま窓から流れる風景を見つめていた。

夕闇は次第に濃い色となつて都心からベッドタウンへと変貌していく風景を闇の色に染める。点在する明かりが何度見ても暗く見えてしまうことに自嘲気味な笑いを浮かべる誠。

「ともかくシンの旦那みたいにちゃんと法術を役立ててる人間もいるんだ。そんなに悲観することもねえだろ？」

「役立ててるですか……ただ人を殺しているだけじゃないですか」
自分の言葉のひねくれ加減に驚いて誠は口をつぐんだ。軍人ならば敵を殺すことも任務の中に入っていることは十分承知している。それでも誠はどうしてもそれを認めたくないと思う自分がいることを否定できないでいる。

「その自覚があるうちは大丈夫だ。罪の意識を持たなくなれば人殺し以下の存在になる」

ハンドルを握るカウラの言葉。車の中の雰囲気は一気に静かに、そして暗いものになり始めていた。

「なんだ……人を殺すのが怖いか？　なら良い方法がある」

札束を握りしめてにやりと笑う要。その殺伐とした表情に思わず誠は目を引きつけられた。鉛色の瞳、そこにはいつもの要の表情は存在しない。

「ならとつと先に自分がくたばることだ。生きている限り人は人を殺し続ける。この街に住む善良と自覚している人間達にしてもアイツ等の暮らしのために遼南やベルルカンで何人の人間が餓死していると思う？　何人の人間が人も思えぬ扱いの上でくたばってると思うんだ？　生きている人間はすべからく人殺しだ」

自分の哲学を一通り語ると要はようやく満足したようにそのまま札束をバッグに戻して黙り込んだ。

「言うわね……お金持ちの台詞じゃないわよ。まさにそうして殺している直接の責任者は要ちゃん達貴族や金持ち連中でしょ？」

「積極的に殺すか消極的に殺すかなんてアタシは区別してねえよ。ただ、生きている限り人は人殺しの汚名を自然に帯びているという事実を語っただけだ」

アイシャの反撃にも特に関わり合いになりたくないというように要は黙って下を向いたまま答えた。誠は再び窓の外を見た。流れていく高層マンションの高さが比較的低いものになっていく。地価が下がったせいだろう。周りの雰囲気も次第に庶民的なものに変わり、豊川の郊外の住宅街のそれに酷似してくる。

「西園寺さんはそう思って生きていますか？」

思わず出た言葉。 要の鼻で笑うような息が車内に響く。

「どう生きようがアタシの勝手だ。 たまたまそれが今みたいな立場にいるからこんな考えが頭にへばりつくようになった。 生き方が器用かもっと鈍感で鈍い頭の持ち主ならお気楽に生きられるんじゃないかね……たとえばアタシの前の席に座っている馬鹿みたいに」

「人を馬鹿呼ばわり？ それとも器用だと褒めているの？」

皮肉る要をふと振り返っただけでアイシャは黙り込んだ。 人の生き死にの場面に出会ってきた数はおそらくカウラや誠の比ではないアイシャと要。 それぞれがその現場での生きる意味について確固たる信念を持っていることはこう言う場面で誠は知らされることになる。 そしてそんな二人の決して交わらない世界観をお互い尊重しているようなところがあるのが誠には奇妙に思われていた。

「次のインターで下りるのか？」

ハンドルを握るカウラが話題を変えようとするように少し明るい調子でつぶやいた。

「市街地じゃこれから会う連中は動きづらい立場にあるからな。 埠頭の手前にちよつとした店がある。 そこに集合をかけたわけだ」

「ちゃんと来ればいいけど」

アイシャの皮肉にも要はただ儂い笑いで応えた。 すっかり暗くなっ

た道を次々と流れる車。それを見ながら誠は自分の知らない世界を生きる情報通達の姿を想像した。

屈強な傭兵というのは今誠達が捜している吉田の姿を見れば映画の中の出来事だと言うことは想像がつく。町中で目立つような強力な義体を使用するのは戦場に着いてからの話。人並みの資格好で街に溶け込むことが裏社会の面々にも必要な技量の一つであることは誠も次第に分かってきていた。

そんな事実を知るとまるでこれから会う情報提供者達の実像がつかめてこない。考えても無駄だと思いつた誠はそのまま窓の外に視線を向けて流れる景色を眺めることにした。

カウラはハンドルを切った。そのまま高速道路から車は一般道へと進む。一台として続く車は無い。そして下りた道路には街灯も無く、周りには明かりが一つとして灯らないビル群が現われた。

「薄気味悪い街ね」

思わずつぶやくアイシャの言葉に誠は自然と頷いていた。まるで生気のない街。一時期の地球諸国の在遼州諸国に対する国債の償還停止処分でこの近くに巨大な工場を抱えていた製鉄会社が倒産した話を誠は思い出した。

「酷い街。だからこそアタシ等みたいな連中には住みやすい」

要はそう言うつと窓の外のゴーストタウンを見て笑った。時折見せる疲れたようなその笑いに誠はどこか要が遠くの存在になってしまふように感じられて不安になる。

そのまま車は真つ暗な道を進んだ。時々すれ違う車はどれも地球製の高級車ばかり。明らかに富とは無縁のこの街の景色とは相容れない存在に見えるが誰もそのことを指摘することは無かった。

「そのまま真つ直ぐだ。そして突き当たりを右」

要は淡々とそう言うつとそのまま窓の景色に視線を飛ばしてしまった。カウラはそんな身勝手に見える要を特にとがめることもなく車を走らせる。

「本当に不気味な街ね……ここって本当に東和？」

皮肉めかしたアイシャの言葉。しかし誰一人その言葉に答えるものは無い。車はそのままヘッドライトの明かりが照らす範囲に突き当たりが見えたところで右にカーブする。

突如その正面にビル群が現われた。これまでの幽霊ビルとは違う確かに人の気配のする明かりの灯ったビル。

「まるで魔法ね。ここの住人は何者かしら？」

再びのアイシャの独り言。誠は目の前の人の気配にようやく安心して呼吸を整えた。車の数が急激に増え、カウラは車の速度を落とす両脇には明らかに派手なネオン街が広がっている。人通りもそれなりにある。歓楽街といった感じだが、歩く人の姿はどう見ても東都の歓楽街のそれとは違った。

派手な化粧とドレスの女。スーツの男はどう見ても堅気とは思えない鋭い眼光で店の前で煙草をふかしている。

「らしい街だろ？」

要はにんまりと笑って生気を帯びた瞳で誠を見つめる。誠は数ヶ月前に初めて訪れた東都の湾岸に浮かぶ租界を思い出していた。

ここは確かに租界によく似ていた。街を歩く人間はすべてアウトローを気取り、ネオンの下の女達は退廃的だけだるい表情で周りを見回す。あえて租界とこの街の違いを述べるとすれば、租界にいた同盟機構から派遣された兵士達の代わりに黒い背広の男達が街のブロックの角ごとに立っていることくらいだった。

「かなりやばそうな人がいるわね……要ちゃんのお友達？」

「友達になれるかどうかはこれ次第だな」

アイシャの皮肉に要はバッグを叩いた。カウラが乾いた笑みを浮かべるとそのままゆっくりとヨーロッパ製の高級車の停まる酒場の前で車を止めた。

「ここか？」

カウラの言葉に要は静かに頷いた。

「面倒な事にならなければいいけど……」

皮肉混じりの笑みを浮かべながら助手席のアイシャがドアを開いて降りる。そのまま助手席の座席を押し上げて要が車から這い出た。誠もまたその後が続いて淫猥な雰囲気漂う街に静かに降り立つことになった。

ビルの階下につながる階段の周りには黒い背広の男が数人雑談をしている。そしてその手が時々左の胸に触ることがあるのを誠は見逃さなかった。

「黙っている……嫌われたくないだろ？」

それと無い笑みを浮かべながら要がつぶやく。カウラも明らかに顔を顰めてそのまま男達の脇を通り抜けて階段を下り始めた。

「東和は民間人の銃の所持は禁止されているはずだがな」

「なに、どこにでも例外はあるものさ」

カウラの皮肉にも要は動ずることなくそのまま階段を下りきって街のごちゃごちゃした猥雑な空間とは無縁な洒落た雰囲気の踊り場からバーの重い扉を開いて店に入る。

ピアノの演奏が心地よく響く空間。薄暗い明かりの中に客の姿はまばらだった。街を闊歩していた淫猥な雰囲気男女とは少し毛色の違うどちらかと言えば上流階級にも見えそうな落ち着いた雰囲気のカップルの客が数人静かに談笑している。

カウンターでは初老の物腰の柔らかそうなバーテンが穏やかな表情でシェイカーを振っている。

「別世界……と言うところかしら」

アイシャがバーと呼ぶには広い店の中を見渡しながらつぶやいた。要は迷うことなく奥のボックス席を目指す。

「早速大物にお会いできるぞ」

笑みをこぼす要の視線の先には一人のサングラスの男が要を見つけて邪気のない笑みを浮かべているのが見えた。

「クエンの兄貴……時間にはまだ早いですが……」

クエンと呼ばれた男の正面に要は素早く腰を下ろす。カウラはなぜかクエンの隣に、そして誠とアイシャは要を挟むようにして座ることになった。

「なあに、気が向いただけだからな。まあ俺の気まぐれにうちの若いのを付きあわせなきゃならないのは……かなり心苦しいがな」

静かに目の前の水割りを啜るクエン。その手元で煙を上げる煙草にカウラは顔を顰めてクエンを睨み付ける。

「おっと……煙草嫌いの方ですか。人生の楽しみが少ないのは残念と言いたいところだが……まあ人それぞれというものかな」

クエンは口元に笑みを作ると静かに煙草をもみ消した。

「早速だが兄貴。ちょっとした人捜しを頼みたいんだが……」

そう言って要がバックを開けようとするのをクエンは手で制して静かに笑った。

「人捜しなら他に行ってくれ。今日俺が来たのはちょっと昔振られた女に会いたくなっただけだからな」

クエンのサングラスの下の目が確かに誠を捕える。緊張で誠は目をそらしてやってきたウェイターに目を向けていた。

「旦那……ずいぶんらしくない言葉を吐くじゃないか」

「らしくないか……確かに感情で動く人間を信用するなど以前講釈をたれたことがあったな」

要の言葉にクエンは素直に笑った。その素直さが逆に誠には気に掛かった。先ほどから数秒に一度、サングラスの下の目は誠に向けられていることが分かっていた。それは嫉妬と言うよりも純粹に興味から発した視線であることは鈍い誠でも分かることだった。そして裏社会の人間が自分に興味を持つことは常にその能力を知っていることだと分かっていたのでただ黙って注文をするアイシャの言葉に頷いてそのままクエンを見つめていた。

「利だけで動ける人間は尊敬に値するよ。俺はどうやらそう言う人間にはなりきれないらしい。それでもおかげでこうして今をときめく遼州同盟の直系組織と接触を持てたんだ。多少はそう言う自分の人間らしさに感謝したいこともあるさ」

「私達は同盟司法局の局員としてでなく……」

クエンに明らかに敵意を抱いているカウラの言葉を遮ると要は静かにバッグから札束を取り出そうとする。だがクエンは皮肉めいた笑みを浮かべると首を横に振った。

「さつきも言ったはずだ。俺は……俺達は人捜しに協力するつもりは毛頭無い」

そうつぶやいたクエンの表情はこれまでの穏やかな面影はすでに消え去っていた。合法、非合法を問わず絶えず利潤のみを追求するファイアの幹部の姿がそこにあった。去っていくウエイターを見送っていたアイシヤも真剣な表情でクエンを睨み付ける。

「じゃあ旦那はアタシと一緒にダンスでも踊るつもりで来たんですか？」

「それはいい話だな。いい女とは撃ち合いをするよりはダンスでも踊る方をどんな男でも選ぶものさ。まあその兄さんが許してくればの話だけだな」

再びバーで佇む優男の表情に戻ったクエンが口元に最上級の笑みを浮かべながら誠を見つめてきた。誠は慣れない雰囲気にとだ戸惑って要に目をやった。

「この馬鹿の許し？ 旦那も冗談が過ぎるぜ。アタシはアタシだ。踊りたくなったら踊る。いつだってそうしてきたことは旦那も知ってるだろ？」

どこか挑発的な要の言葉にクエンは膝を打った。すぐに爆発的な笑いがフロアーにこだまする。誠から正面に見えるカウンター席のカップルがどうしたかと確認するように振り向いて怪訝そうな顔をしていた。

「それでこそ租界の名花と呼ばれたお前さんだよ。兄ちゃん……いや、神前誠曹長。君の上司はなかなか気まぐれだからな……苦勞は察するがその甲斐がある上司だと俺が保証するよ」

そう言うとクエンは立ち上がる。

「旦那、もう帰るんですか？」

突然立ち上がったクエンに要は驚いたように声をかけた。その声はどこか悲しげで、誠には二人の間の自分の立ち入ることの出来ない関係を思い描きながらただ黙ってクエンを見上げていた。

「ああ、俺も忙しい身でね。これから朝まで難しい仕事をこなすことになりそう。その前にお前さんと仲間達の顔を見れたのは僥倖と言つところかな」

にやりと笑ってウエイターが持つてきたコートの袖に手を通しながらクエンは余裕のある笑みでつぶやいた。

「あなたのような忙しい人に気まぐれで旧友に挨拶をする余裕があるとは……東都警察もたるんでいるんですかね？」

カウラの皮肉。黒いコートに白く長いマフラーをかけたクエンはそのカウラの様子を相変わらぬ余裕を持った態度で聞き流しながらそのまま背を向けて歩き出した。

「ああ、そうだ」

数歩歩いたところでクエンが立ち止まる。誠達は軽く振り返るクエンのサングラスを凝視する。

「菱川財閥の幹部連が君達を煙たがっているそうだ。大事にならないうちに処理しておくのを勧めするよ」

捨て台詞のようにそう言つたそのまま大きなクエンの後ろ姿は観葉

植物の影に消えていった。

「渋いわね……要ちゃんにはもったいないわ」

「おう、ならオメエにやるよ」

「相手にされないわよ。それにしてもあの人……遼南マフィアと言
う触れ込みみただけど、軍人ね」

アイシャの鋭い指摘に要はウエイターから水割りを受け取ると静か
にグラスを傾ける。

「共和国軍の残党って話だ。なんでも海兵隊崩れだとか言ってたな」
何となく納得したように頷くアイシャ。

「正規部隊じゃないな。海兵隊だと武装偵察隊かなにかの出身じゃ
ないのか？」

カウラの言葉に誠も頷く。弱兵と言われた遼南共和国軍だが一部に
は精強な部隊も存在した。ランの所属した陸軍国府防衛隊や南都軍
閥の息の掛かる海兵隊南部戦闘集団。そして人民軍勢力下深くに最
低限の武装と装備で侵入し、情報収集活動や破壊工作、煽動欺瞞任
務を遂行する海兵隊武装偵察隊、通称『遼南レコン』はその活動の
国際法規すら無視する性格上、人民軍の憎むべき敵として所属の経
歴があったと言うだけで処刑の対象になるほどの存在として知られ
た。

「まあ裏の世界じゃかつての仕事や今の所属は知らぬが花ってわけ

で誰も詮索したりしないものさ。それでも確かにレコン出身ならあの旦那の武勇伝がフィクションの世界からリアルの世界に感じられる話だな。それにあの人には子飼いの独自勢力もいるとかいないとか……」

「おう、久しぶり！」

淡々と話をしてきた要の頭の上に長い黒髪が垂れ下がる。驚いて要はそのまま上を見上げた。

要を見下ろしているのは切れ長の細い目をした長身の女性。そしてその隣には小柄なローブをまとった少女が立っていた。

「オンドラ！ テメエの髪がグラスに入ったじゃねえか！」

「なんだよ……久しぶりに会ったと思えばいきなりいちゃモン付けか？ つれないねえ……人望の無い早苗の為にわざわざ手を貸してやるつとやってきてみれば……ああ、本名は西園寺要お嬢様か？」

明らかに挑戦的な表情を浮かべてオンドラと呼ばれた女性は遠慮することもなくクエンの座っていた座席に陣取る。

「ネネも座りな！ 公爵令嬢の奢りだから好きなの飲もうじゃねえか！」

「テメエを呼んだ覚えはねえぞ……」

ネネと呼ばれた少女が黙ってオンドラが叩くソファーに腰掛けるのを見ながら要は怒りに震えながらオンドラを睨み付ける。

「私が呼んだの……私一人じゃ安全を確保できないから。迷惑だった？」

か細い声で俯きながらつぶやくネネと言う少女の言葉に要は怒りの表情を引っ込めて素直に首を振った。

「良かった……私はトマトジュース」

ネネは静かにそれだけ言うとそのまま俯いて黙ってしまった。誠もアイシャもカウラも、この二人のコンビがどうして要の情報網に引っかけたのか疑問に思いながらウェイターが近づいてくるまでの時間を過ごしていた。

「要ちゃん……なに？ この二人」

「なんだよ……ははーん。その髪の色、ゲルパルトの人造人間か？ 隣のねーちゃんもゲルパルトの人造人間で、その兄ちゃんはパシリってところか？」

興味深そうに誠達を見て回るオンドラの視線。アイシャもカウラも明らかに不機嫌そうに切れ長と言うよりも切り込みのようにも見えるオンドラの細い視線を睨み付けていた。

「人を出自で判断するのは良くないことですよ。重要なのは今の立場」

静かな、そしてそれでいて少女のものとは思えない迫力のある言葉の響きに誠達は凍り付いた。

「あなた……法術師ね。しかも、私の勘だけど不死人」

静かに繰り出されたアイシャの言葉にネネと呼ばれた少女は静かに頷く。ウエイターが運んできたジュースを静かに飲む姿は確かにその幼い見た目とは裏腹な老成したようなところが見て取れた。

「預言者ネネ。東都の裏社会では知れた情報屋だ。別にネットに詳しいわけでも特別なコネクションがあるわけでも無いのに気が向けば正確無比な情報をくれる貴重な存在として畏怖の念を集めていたが、法術が普通に知られるようになってみれば仕掛けは簡単だったわけだ」

要の言葉を否定も肯定もせず、にネネはグラスの上に伸びたストローから口を離すと静かに居住まいを正して要に向き直った。

「この格好で生きて行くには正確で信用のおける情報屋を演じるのが最適なもの。おかげで最近は銃弾に当たることも無いし」

「そりゃそうだ。預言者ネネに傷をつけようもんなら東都じゃ卑怯者として商売が出来ないようになるからな。まるで西部劇のピアニストってところか？」

物静かなネネとは対照的にオンドラは豪快にドライジンのグラスを空にした。

「オンドラ。オメエはおまけなんだよ。自重しろよ」

怒りを込めた要の言葉に首をすくめるオンドラ。一方ネネは相変わらず黙って要を見つめていた。

「吉田俊平少佐の情報を集めているんでしょ？ 報酬は？」

冷静なネネの言葉にようやくオンドラに対する怒りを静めた要はボストンバッグから札束を一つ取り出した。

「百万ドルの札束……初めて見たよ。さすがお嬢様。気前がいいねえ……」

「オメエにやるんじゃない。ネネ。手付けはこれでいいか？」

要の言葉にネネは隣のオンドラを見た。明らかにオンドラの表情は

要のポストンバッグの中身を推測することに集中しているものだった。

「今回の件だけであと百万ドル。それに今後の顔つなぎとしてもう百万ドル……」

「ちょっと！ お嬢ちゃんおかしいんじゃないの？ ただ顔を出しただけで3百万ドル？ ぼったくりじゃないの！」

叫ぶアイシヤ。だが要は静かに頷くとポストンバッグからさらに三つの札束をテーブルの上に積み上げた。

「ものを知らねえ奴は困るねえ……」

明らかに哀れみの目でアイシャを見つめる要。アイシャはその視線の色にただどきまぎしながらもじっと札束を眺めていた。

「さっそく確かめますか！」

景気よくそう言つとオンドラは要から札束をひったくる。指を一舐めするとの確に札束を確認し始めるオンドラ。それを横目に見ながらネネは静かにジューズをすすする。

「三百万ドルの価値の情報屋か……それならその能力を少しは見せてもらつてもいいんじゃないかな？」

明らかに慎重で冷静だったのはカウラだった。そんなカウラの態度に落ち着いてストローから口を離してにこやかに隣を見るネネ。その表情は相変わらず老成していて誠の目にもネネがただ者ではないことだけはよく分かった。

「胡州陸軍の諜報機関は予算的な余裕が他国に比べて少ないんです。その部隊員だった西園寺要さんが三百万ドルを払う。それだけで私の能力は実証されているように思うのですが……」

「そう言うこと！ 東都でやましい仕事をしている連中でネネを知らないなんて田舎者も良いところだ。たとえ東都の首相を暗殺した馬鹿野郎がいたとしてもネネの情報網を使えばそいつの金が続く限りは逃げ延びることが出来る。その程度の実力者にただの公務員が

どっこい言うのはちゃんちゃらおかしいや！」

オンドラの調子の良い言葉。頷く要。誠は自分の知らない世界の常識に戸惑いながら同じように話が理解できないでいるアイシャに目を向けた。

「そんな実力者なら組織の一つや二つ抱えていてもおかしくないんじゃないの？ 口ばかり達者な用心棒を雇って仕事を始めようなんて言う酔狂な真似は……」

「アイシャ。こいつは確かに口が九割だがガンマンとしての腕は確かだ」

意地でも文句を付けたいアイシャを珍しく冷静に要が制した。それを見て鼻高々なオンドラ。誠も遠慮がちに彼女の豊かな胸の辺りを見れば、その左下の辺りに確かに銃がつり下がっているとと言う膨らみが見つかる。

「私は組織には縛られたくないんです。部下を持てば彼等の命の責任を持たなければなりませんから。それと司法局との契約も受け付けません」

静かだがどこまでも毅然としたネネの言葉。おそらくは司法局との契約の話でも切り出すつもりだったと言う表情のカウラも黙って目の前のソーダに手を伸ばさざるをえなくなる。

「中立で金だけで動く。しがらみがないからそれだけ動ける範囲も広くなる。故に情報も正確になる」

要の補足で誠も何となく目の前の少女のことを少しだけ信用するこ

とにじた。

「まあ良いわ。どうせ要ちゃんのお金だし」

「そうそう。こう言うお嬢様からはたんと巻き上げた方がいいぞ！

」

景気よくグラスを空にして笑うオンドラ。一人テンションの高い彼女の手からネネは素早く札束を取りあげた。

「なんだよネネ！」

「ちょっと待って」

ネネはそう言うのと札束の帯をほどく。そのまま三枚の一万ドル札を取るとそのままオンドラに手渡す。

「え？ これくれるの？」

「これは私の取り分。残りは経費とあなたの給料」

淡々とそれだけ言うとネネはまた静かにジュースのストローに口を伸ばした。

「ずいぶんと遠慮がちなのね……」

皮肉の入ったアイシャの言葉にネネはただ無言でジューズをすすることなどで答える。

「なあに、あの吉田俊平の関連の情報を集めるんだ。いくら金があつてもねえ……」

ちらちらとオンドラは要の顔を見た。その表情は明らかに経費は別立てにしると要求しているそれだった。

「オンドラ。それ以上は取らない方がいいわよ。定期的なお仕事をくれるお得意先は大事にしないと」

またもはつきりとしたネネの言葉にオンドラは気分を換えようと手を挙げた。表情一つ換えずにウエイターが歩み寄ってくる。

「済まないがジンを！」

「その金はお前が出せよ」

去っていくウエイターを見送りながらつぶやく要にまた卑下したような笑みを浮かべるオンドラ。だがその目がネネの鉛色の瞳を捕えるとすぐに俯きがちに懐から財布を取り出して札をテーブルに置いた。

「吉田俊平の居所だけならこの金額は大きすぎるんじゃないかな。」

当然その素性も……」

カウラの言葉にネネは気に入ったというように初めて見る笑顔を力ウラに向けた。

「吉田俊平の名前は何度も聞いていたから興味があったの。だから今回の仕事も楽しみにしているわ」

それだけ言うとネネはそのまま立ち上がった。ジンの入ったグラスを手にしたウエイターが驚いた表情でネネが目の前を通るのを見守っている。驚いたのはオンドラも一緒にウエイターの手の上の盆から素早くジンの入ったグラスを奪い取るとすぐさま喉の奥にアルコールを流し込んだ。

「じゃあ、結果は後で！」

手を振りながら去っていくオンドラ。ただ誠達は呆然と彼等を見守った。

「ずいぶんな出費ね。期限も切らずにおくなんて……お人好しも良いたところじゃないの？」

アイシャの言葉だが、要は満足げに手にした水割りを啜っていた。

「相手は預言者ネネだ。こちらが情報を本当に必要になる時までにはレポートができあがっているもんだよ。さもなきゃあんな餓鬼が裏社会で生き延びられるはずはねえ」

そう言い捨てると要は立ち上がった。

「他のあては無いのか？」

意外そうな表情のカウラににやけた表情を向けたまま要は札束の詰まったポストンバッグを背負って店内を見回す。

「なあに、クエンの旦那と預言者ネネ。それ以上のニュースソースはアタシにも覚えが無くてね。行くぞ」

そのまま勝手に歩き出す要。アイシヤと誠は慌ててその後ろに付き従う。カウラは大きいため息をつくと静かにジャケットのポケットから車のキーを取り出してくるくる回しながら彼等についていくことに決めた。

林と呼ぶには周りの喧噪がすさまじい中に一つの銀色の干渉空間が展開された。

「久しぶりだな……」

中から現われた革ジャンにジーンズの中年男が木々の合間から周りを見回す。

そこは大学の構内だった。拡声器の絶叫。時折シュプレヒコールがあちこちで上がる。革ジャンの男、北川公平はそのまま走り回るヘルメットをかぶった学生達の合間を縫うようにそのまま学内の小道を歩き続けた。

『学費値上げ反対闘争完遂！』

『帝国主義的同盟強化政策打倒！』

同じような書体の文字で彩られた立て看板とアジビラ。それを見るとかつての自分を思い出し北川は笑みを浮かべながらそのままアジビラで薄汚れたように見える学生会館の扉を開いた。

階段で談笑していたヘルメットにゲバ棒の女学生達が珍しそうに北川を迎えた。門番気取りの長身の学生が北川の行く手を阻む。

「あ！ 北川先輩じゃないですか！」

奥から護衛のシンパを引き連れて歩いてきたタオルとサングラスで

顔を覆った幹部らしき男が声を上げる。

「よっ」

北川が軽く手を挙げるのを見て長身の学生は少しばかりおどおどしたような調子で脇に下がる。

「工大は相変わらずだな」

「うちは最後まで落ちませんよ。犬達もそう簡単に話がつくとは思っていないでしょ」

マスクを外した男。どう見ても学生には見えない年の頃。北川はこの男が学生運動に執着するあまりもう四回もこの東都工業大学に入学し直したというほど奇癖と思える事実を思い出して苦笑いを浮かべた。

「コーヒーくらいは出せますよ……外の機動隊もまだ兵糧攻めをするところまでは行っていませんから」

男の言葉に北川は曖昧な笑みを浮かべるとそのまま男とそのシンパについて学生会館の階段をのぼりはじめた。

様々な思いが北川の中を去来する。すべての出発点であり、そしてすでにそこに帰ることは出来ない場所である母校。八年前に首相官邸にペンキを投げて逮捕され除籍になって以来の母校に足を運ぶ気になった自分の気まぐれをこの段階になって少し後悔するが先頭を歩く男はそんなことはお構いなしにずんずんと学生会館の奥の学生会執行委員会の執務室へと北川を誘った。

青いペンキで彩られた安っぽいドアを入るとそこにはまだ幼い表情を浮かべている下級生達がパソコンを覗き込んで下卑た笑いを浮かべていた。

「貴様等！」

男の一括で下級生達はそのまま慌ててパソコンの電源を落とすとそのまま手近にあったヘルメットをかぶって外へと飛び出していった。

「若いんだ。いろいろあるさ」

北川の言葉に男は大きいため息をつくとそのままテーブルにシンパ達を従えて腰掛けた。

「それにしても先輩……どういう風の吹き回しですか？」

当たり前前の質問に北川は苦笑いを浮かべた。逮捕から出所まで完全黙秘を貫いた闘士として知られる北川だが、出所から今までここを訪れたのは二回ほど。どちらも闘争への助力を曖昧な言葉で回避して逃げるようにいなくなった人物の訪問がそれほど歓迎されることではないことは分かっていた。

インスタントコーヒーをぬるいお湯で溶いたものが目の前に差し出される。仕方がないと心を決めて北川はそれで口の周りを湿らせる。

「しばらく遼州を離れることになるからな。出発点を見てみたくなつたんだ」

北川の言葉は周りの学生生活動家達にはそれほど意外なものではなかったようであらう。ただ曖昧に頷きながらそれぞれにささやきあっている。

「法術師の権利獲得闘争。大変でしょうが……他の星系で同志を募るんですか？」

男の無理に興味を持っているというような態度に少しばかり腹を立てながら北川は軽く頷く。

「遼州系住民が暮らすのはこの遼州ばかりじゃない。地球の東アジア地方はもとより他の地球の植民星系にもあまたの法術師がいるんだ。ところによってはすでに隔離政策をとっている星系も存在する」

「キンバルタ太陽系ですね……あそこは元々テラフォーミングが失敗して過酷な環境を良いことに国家権力が好き放題ですからね」

興奮した様子の下級生の勢いに少しばかり押されながら北川は再びコーヒーらしきものを口に運んだ。苦みと渋みばかりが口の中に広がったものなのだろう。そう思いながらそんなことを些事として自分の闘争を絶対化できる彼等の若さに羨望のようなものを感じながら静かにカップをテーブルに置いた。

「しかし……遼州系住民差別はすでにこの遼州の東和でも公然と行われているんですよ。それを……先輩が出て行く必要はあるんですか？」

執行委員の腕章を付けた青いヘルメットの女学生の言葉に北川はにこやかな笑みで答えた。

「何も俺の今いる組織の法術師は俺一人じゃない。いや、もしかするとさらに上手の人間が山ほど……まあ期待はしてもらっても良いだろうな。まもなく宇宙は変わる。変えてみせる」

確信を持って放たれた北川の言葉に学生達は一様にどよめいた。すでに学生運動は斜陽だと言うことは北川もそしてここにいる活動家達自身も分かっていることだった。第二次遼州大戦後の財閥企業が遼州の復興で独占的な利潤を得たことへのアンチテーゼとして始まった東和学生運動は復興が一段落すると急速に力を失っていった。

一部の大企業の関係者に集中していた利潤は世間一般を潤し、過激なデモや時には政府要人に対するテロで庶民の鬱憤を晴らしてみせる安全弁としての役割を担っていた学生活動家達の行動は次第に支

持を失って社会から孤立していった。闘争路線を巡る確執、各大学の運営母体による切り崩し、そして警察による徹底的な壊滅作戦。これらが東都の主要大学のほとんどに存在した学生運動の母体を次々と壊滅させ、現在ではこの東都工業大学など一部の国立単科大学や地方の私立大学にその残滓を残すのみとなった活動拠点。

それらに今更北川がノスタルジーを感じる義理は無かった。目の前の若者達はいつでも『元活動家』として社会に散っていくことが出来る。しかし、『ギルド』と言う特殊な秘密結社の一員となった北川にはその選択肢は存在しない。

「良い面を見て東和の名残も尽きたな。じゃあ行くわ」

そう言うと北川は半分ほどコーヒーを残したまま立ち上がった。

「ああ、そうですか」

見送るような酔狂な連中にはいない。そのことが北川にはうれしかった。彼等が理想で動いている限り、自分と行動を共にすることは無いだらう。そのことは十分分かっていていた。

法術師の解放と言う大義。だがそれが理想郷を建設すると言うような学生達の夢とは遠く離れたものだと言うことは北川自身がよく知っていた。弱肉強食の地獄絵図を宇宙全体に拡散すること。それが『ギルド』の理想達成の末路なのは十分北川も分かっている。

そのまま自分でドアを開いて学生会館の廊下に出る。通り過ぎる学生達はそれぞれに殺気立っているように見せてはいるが、北川の巡ってきた戦場や闘争の現場の殺意に満ちた視線は彼等には存在しなかった。

「平和だねえ……」

周りに聞こえないように小声でつぶやく。理想で動く人間の出来ることがいかに小さいかを身をもって知ってきた自分とまだ知らない若者達。どちらが偉いかと言えば後者に決まっている。自分はただの抜け殻に過ぎない。ただ生きると言うことはそう言うことだ。

北川はいつの間にかジャンパーのポケットから煙草を取り出ししていた。そのまま階段を駆け下りて、学生会館の入り口に門番のように立つ学生の隣に立った。

「火……くれるかな？」

最初ヘルメットの下から北川を睨み付けている顔がごついただけの幼げな学生は北川の言葉が理解できないでいた。

「火だよ」

繰り返された言葉とその迫力に負けた学生は思わずポケットからライターを取り出していた。暖かみを感じるような初春の春の日差しの中。北川はゆっくりと煙草をふかした。

「上には顔は利くのかい？」

またも突然につぶやかれた北川の言葉に意味が分からないというように学生は首をひねる。それを見てにんまりと笑いながら北川はジャンバーのポケットから小さな記憶媒体を取り出した。

「これは……すぐには上には渡さない方がいい。そうだな……二週間くらいしたらコンピュータに詳しい理論物理学を専攻している学生に渡してくれ。きっと面白いことが起きるだろうから」

北川の遠回しな言葉に学生はただ受け取った小さなチップを眺め回すだけだった。

「確かに渡したよ……早すぎると天地がひっくり返るがその程度の時間が経つとちょうど良いくらいに事件は起きる。世の中面白いものだろう？」

意味ありげな、そして無意味にも聞こえる北川の言葉に大柄の学生はただ首をひねるだけだった。それを満足げに眺めた北川はそのま

ま煙草を灰皿でもみ消すとそのまま大学の中庭へと消えていった。

「西園寺！」

カウラは食堂から出て行くところとする要の腕を捕えた。ばつが悪そうに頭を掻く要を誠とアイシャはちらりと横目で見た。

誠の前にはサーフェイサーで下準備を済ませた組みかけの女子校生のフィギュアがあつた。久しぶりのフィギュア製作。もしもこれが謹慎中の暇つぶしでなければそれなりに楽しむことが出来たと思う。一方でアイシャは誠に下塗りをしてもらつたアニメの五体合体ロボの仮組をしていた。

「焦つたつてしょうがないじゃないの……それともなに？ 吉田少佐の知り合いのプロデューサーでも捕まえて絞り上げるつもり？ 一般人にご迷惑をかけてもしょうがないじゃないの。少佐はちゃんと仕事はしている。契約上、例えば何日欠勤しようが文句は言えないのよ」

アイシャの小言に要はむくれた顔のままそのまま近くの椅子に体を置いた。明らかに不服。それは十分分かつている。しかし今は待つしかないのを一番分かつているのも要だと言うことは皆が分かっていることだつた。

心理を読むことに優れた法術を持ち、独自の情報ルートで様々な情報を入手して売り渡す凄腕の情報屋の『預言者ネネ』。そんな彼女でも二日程度で有効な情報が得られるとはその道のプロである要なら分かつているはずだつた。だがそんなことを言っていられない状況ができあがりつつあつた。

カウラは要が落ち着いたのを見て取ると食堂の古めかしいテレビのスイッチを付けた。相変わらず流れているのは遼北と西モスレムの軍事緊張のニュースだった。

実力行使の及ぼうとした両国が同盟軍事機構のエース、アブドゥール・シャー・シン大尉のパイロキネシス能力の前に優秀なパイロットを消し炭にされたことでとりあえずの正面衝突は避けられているものの、両者による外向的な徴発合戦は続いていた。

西モスレムは化石燃料系の遼北とベルルカン大陸の親遼北諸国への限定的輸出制限を宣言し、対抗処置として遼北は国内のイスラム宗教指導者を拘束した。緊張が始まってから遼州同盟会議は両国による非難の応酬で実質的な機能は麻痺しつつあった。

「これ……どこまで行くかな」

テレビを見ていた要がぼそりとつぶやく。ようやく身勝手な行動を諦めたような要を見てカウラがテーブルの上に腕を組みながら話を始めた。

「根が深いからな。国境のカイエル川の中州……広さにしたら東都がすっぽり入る程度の広さだと言うが、それでも領土は領土だ。それに遼北の回教徒への圧迫には昔から西モスレムは不快感を隠していなかったからな。今回の遼北の越境行動で堪忍袋の緒が切れたんだろうが……」

「だとしても私達には面倒な話ばかりね。もしこのままどちらかが同盟を離脱するとか言い出したら失業するかもよ」

ロボットらしい形を目の前に作って一息入れているアイシャがぼそりと呟く。確かに誠も同盟の主要国であるこの二国の一方が離脱という形になれば遼州同盟が空中分解することは容易に想像が出来た。だから何が出来るわけでもない。確かにこんな状況だからこそ要が別に関心があるわけでもない吉田の搜索に夢中になるのも分かる気がしてきた。

殺戮機械が思い出に浸るとき 44

「保安隊解体……」

誠の言葉にアイシャは苦笑いを浮かべた。

「私はゲルパルト国防軍に戻ることになりそうね……あそこはネオナチを追い出したおかげでいつでも人手不足でヒーヒー言ってるから……カウラちゃんは東和軍？」

「だろうな。おそらく陸軍だろう。士官養成課程は陸軍で受けているからな」

まるで既成事実のように語り始める二人。要はそれがいかにも気に入らないというように膨れた顔のままテレビの画面を眺めていた。

「同盟崩壊が決まった訳じゃないだろうが……」

「もしもの話よ。いつだって最悪は訪れるものよ。こういう風に意固地になって民族主義に走り出した国がどうにも出来ないのはゲルパルトの例を見ればわかるでしょ？ 排外主義に突っ走ってどうしようもなくなつてドカン。よくある歴史の「コマよ」

淡々とそれだけ言うとアイシャは仮組みしたプラモデルをうつとりとした目で眺めた。今の誠達に何かが出来るわけもない。出撃命令の出していない武装組織はただの民間人。いや、それよりも情報に精通しているだけにそれ以下の存在だと言うことがひしひしと誠にも感じられてきた。

「吉田の野郎がいれば……」

「いてどうするの？　と言つかあの人がこの状況を知らないとも思っているの？　私の勘だけど……この状況と吉田少佐の失踪には何か深い関係があるような気がするんだけど……」

「アイシャ。そのくらいのことはここにいる誰もが分かっていることだ」

平然と自分の名案をカウラに切つて捨てられてアイシャが肩を落として俯いた。その光景が面白かったので思わず誠はフィギュアの右腕を持ったまま吹き出す。すぐに顔を上げたアイシャが誠を睨み付けてくる。渋々誠は何もなかったことにして右腕をアレンジするとしたらどうするかと言つことを想像するようにプラスチックの部品を目の前にかざしてみた。

「まあこれから先は隊長の……いや、同盟司法局の本局や同盟会議の首脳達の判断になるだろうからな。なんとか動けるようにしてくればいいのだけんど……」

愚痴るカウラ。彼女の気持ちは全員の気持ちだった。確かに自分達は現在つまらないことで謹慎中の身の上だった。そんな彼等でさえ現状はいても立ってもいられない状況。出勤していった隊員達がハルンガーでこのニュースをどんな気持ちで聞いているかを想像すると逆に同情する気持ちすら芽生えてくる。

「まあ……世の中なるようにしかならねえよ！　もし最悪を突き進めば遼北と西モスレムの全面核戦争。十億程度の間人が死んで終わる。同盟は瓦解し、地球の列強が隙間をついて各国にすり寄りベルカ大陸は地球資本に浸食されて失敗国家がさらに失敗した社会

になる。それだけの話だ」

そう吐き捨てる。要は立ち上がった。

「どこへ行く！」

カウラの強い語気に渋々振り返る要。

「煙草だよ」

それだけ言つと要はそそくさと食堂を出て行った。

「嵯峨さん！」

ノックもせずに黒いセミロングの髪の美女が保安隊隊長室を開いて押し入ってきた。それを見て机の上の骨董の花入れの極め書きを書いていた保安隊隊長嵯峨惟基特務大佐は困ったような表情で顔を上げた。

「秀美さん……ノックぐらいしてよ……僕は気が弱いんだから」

嵯峨は筆を置いて悠長に花入れに目をやる。その様子は明らかに押し入ってきた保安隊と対をなす同盟司法局の実働部隊で主に捜査活動を担当する部隊、通称『特務公安隊』の隊長安城秀美少佐を苛立たせるものだった。

「悠長に副業の骨董品の鑑定？ それなら同盟解体後ならいくらでもできるんじゃないかしら？」

つきあいはお互い司法局に配属後と言うことで三年程度だが、安城も嵯峨のこう言う明らかに空気を読まない行動には慣れてきたので余裕のある態度を装って皮肉を言ってみた。

「そうとも言えないねえ……回線を遮断しているから良いけど俺の端末にはひっきりなしに胡州陸軍から連絡が入ってる。同盟がつぶれて保安隊解散の暁には首輪を付けてでも本局に引っ張られることになりそうだ……それを思うとどうも……」

「いい話じゃないの。胡州陸軍大学校首席卒業ですものねえ、嵯峨

さんは。陸軍省のふかふかの椅子がきつとお似合いよ」

安城の皮肉に嵯峨は今にも泣き出しそうな顔をする。それが嵯峨特有の駆け引きだと知ってからは安城もただ冷たい視線で立ち上がって花入れを背後の鑑定依頼の骨董品の棚に戻す嵯峨を眺めていた。

「嫌みを言いに来たにしてはずいぶん急いでいたみたいだけど……用があるんじゃないの？」

嵯峨の悠長な態度を皮肉ることに夢中になっていた自分をその相手の言葉で思い出して安城は赤面した。それを悟って嵯峨がそれまでの迷惑そうな表情からしてやったりという笑みに表情を切り替える。それを見た安城はそのまま嵯峨の執務机の端末に自分の襟首にあるジャックからコードを延ばして差し込んだ。

「悪かったよ……そんなに急がなくても……」

「ここの吉田少佐の身柄を確保する命令が下りてきたのはどういうわけ？」

端末の画面が変わるのを確認しながらそれとなく安城は呟く。嵯峨はその話題は予想していたと言うような表情で頭を掻いてどうこの場を切り抜けるか計算しているように視線を天井に泳がせた。

「吉田少佐の契約が特殊なのは了承済み、そして嵯峨さんも吉田少佐の行方を掴んでいないのもお見通し。その話題を長々連ねて時間を潰すのはご免よ」

先手を打った安城の言葉に嵯峨はいたずらを見透かされた子供のようにそのまま俯いてしまった。しかし、嵯峨の視線は安城が弄って

いるモニターから逸れることがない。

「命令の出所は内々に調べてみたけど……東和宇宙軍の上層部の意向みたい。それでちょうどその意志決定がなされた時刻にネットに流出したのがこの図面」

端末のモニターには複雑な設計図が写されていた。素人が、そしてネットユーザーのほとんどが見てもそれが何かを理解することは出来ないと言うような複雑な構造物の図面が映し出される。法務畑が専門で技術には疎いと自称している嵯峨もその図面自体の意味は理解しているようには安城にも見えなかった。

だがその図面のデータのファイル名には嵯峨の表情も一瞬の驚きを感じているように見えた。

「第一次インパルス・カノン試作計画……」

「どつ?」

鋭い視線を送る安城だが、嵯峨はそのまま伸びをして椅子にもたれかかる。ただ呆然と正面の空間を見つめながら口を開いた。

「どつと言われても……インパルス砲。縮退空間を砲身全面に展開してそのまま高エネルギーで無理矢理打ち出すって言う理論は昔からあるわけだしねえ。先の大戦中も中立だった東和軍が自衛目的で研究を進めて他のは俺も東和の大使館付き二等武官だったから重々承知はしているつもりだよ……その試作砲台の設計図が流出……あれじゃないの? このきな臭い時期に東和の強さを見せつけたいという内部の自称愛国者の自作自演とか?」

嵯峨の話に安城の表情はさらに険しくなる。嵯峨はそれを見るとき、よんぼりと視線を落とす。

「内部犯行説は魅力的ではあるけど……一応、私も東和軍の保安部出身なの」

「それは知ってるんだけどさあ……人間魔が差すことは誰だってあるもんだよ。それに最近じゃ『ギルド』の遼州民族主義者が跋扈しているからねえ……そうだ! 『ギルド』のシンパが情報を抜き取ってリークしたって線は?」

思いつきと明らかにわかる白々しい嵯峨の態度に安城は大きなため息をついた。

「嵯峨さん……まじめに答えてよ。このデータの流出元は東都工大の研究室の通信端末よ。あそこは民族主義者よりは共産主義者の出入りが盛んな場所でしょ？」

「ああ、今時学生運動をやっている奇特な大学の研究室からの流出ねえ……となると東和の軍部の暴走を警告するって言う意味合いのものか……でもアイツ等に東和軍のネットワークに侵入してすぐに足がつかないだけの技術力があると思う？」

「だから吉田少佐に嫌疑がかけられたんでしょ？ 東和宇宙軍のネットワークに侵入して足跡も残さずに情報を抜き取り、それを軍部を批判する組織に譲り渡す……まあ吉田少佐の経歴から考えたらあり得ない話なんだけど、現在行方不明で上司もその足取りを把握していない。疑われても仕方がない状況にはあるわよ」

上司が足取りを把握していないと言っ一言はさすがの嵯峨にも堪える一言だった。俯いて指で机の上の埃を一つ一つつまんで吹き飛ばしていきける嵯峨。

「確かにそう言われたらその通りんだけどさあ……吉田の野郎が資金源なんてたかが知れてる学生生活動家に苦勞して手に入れた情報を譲り渡すと思う？ アイツは守銭奴だよ。具体的設計図としては役には立たない代物なんだろうけど東和がインパルス砲開発を諦めていない事実の暴露はそれなりの利用価値のある情報だ。値段を上げする方法を熟知している吉田のことだ。もし奴の仕業なら学生活動家の懐じゃ思いもよらないような値段でそのファイルを売りつける先を捜すんじゃないかな」

嵯峨の言葉などまるつきり読んでいるというように安城は肩を落とすそのまま部屋の中央の応接セットのソファに腰を下ろした。

嵯峨はそれを見ると少し気が楽になったというように上着の胸のポケットから煙草を取り出すと静かに火を付けた。

「吉田の馬鹿がこのタイミングで行方不明だということ以外は奴が疑われる理由は無いわけだ……。しかもそのことはすぐに捜査の責任者である秀美さんが悟ることは織り込み済み。そしておそらく同僚のよしみで俺に捜査情報を話すことも……。東和宇宙軍上層部は知ってて今回の吉田の身柄の確保を指示してきた……。そう考えられな
いかな？」

煙草の煙を吐きながら吐いた嵯峨の言葉に少し驚いた表情で安城は嵯峨のとぼけた顔を見つめた。

「東和軍が……遼北と西モスレムが一触即発の時期に同盟の機関に揺さぶりをかける……同盟解体後をにらんでの布石？ それとも……」

首をひねる安城の前でモニターに着信が告げられた。

「せっかく通信遮断してたのに……」

嵯峨が恨みがましい目で安城を見るが、安城はただ無表情にその通信に嵯峨が出るように彼の肩に手を置いた。渋々嵯峨は通信端末の受信ボタンを押す。

「ラスコー！」

ただでさえだるそうな嵯峨の表情が疲れて押しつぶされたような表情に変わる。モニターにはでっぷりと太ったアラブ風の男の顔面が画面いっぱい広がっている。安城はそれが西モスレム首長国連邦の現代表であるムハマド・ラディフ王のそれであることを思い出すと興味深げに嵯峨のげんなりとした顔に目をやった。

「君とワシの仲だ！ 先月から通信を続けて今つながったのも神の思し召しだ！ 頼みが……」

「嫌な神だねえ……まさに神のいたずらってところですか？ それに俺はラスコーなんて名前は捨てたんでね」

安城も驚くほどに不機嫌そうに嵯峨は言葉を吐き捨てた。嵯峨の責

族嫌いは筋金入りなのは知っていた。本人は捨てたつもりでも遼南王家の当主の地位がどこまででも追ってくる。僅か十二歳で皇帝に即位して翌年には廃帝とされ、さらに36歳の時にクーデターで吉田に無理矢理皇帝に返り咲かされた嵯峨の流転の人生を思えばそれも当然と安城は思っていた。

だが画面の中のアラビア王族はそんな嵯峨の感情に斟酌している余裕などとは見て取れなかった。目が血走っているのは徹夜を何日も続けてきたことの証だった。大きな顔の後ろの背景を見れば、おそらくは首長会議中に藁にもすがる思い出通信を入れてきたことは容易に想像がつく。

「誇り高き王の位は自分の意志で捨てられるものでは無いぞ！ 生まれて死すまで、王は王だ」

「その国が消滅するかもしれないところの人に言われても……説得力が無いんですけど。まあ時間が無いからこちらからそちらの要件を言い当てましょうか？ 遼南皇帝として遼北に圧力をかけて講和のテーブルに着けと言えと……無茶な話だ」

「何が無茶なものか！ 大陸の半分を占める遼南の意志が……」

慌てて捲し立てようとするアラブ人の言葉に静かな表情のまま嵯峨は机を叩いて見せた。黙り込む浅黒い顔に嵯峨は嘲笑を浮かべながら静かに胸のポケットから煙草を取り出すと火を付けた。

「俺の意志は俺の意志ですよ。遼南の民意とはまるで無関係だ。それに現在の遼南の実権は宰相アンリ・ブルゴーニユの手にある。話をつけるならそちらじゃ無いですか？」

「アイツは話にならん！ 領土……」

「それなら話はおしまいですよ。俺は一同盟組織の部隊長。それ以上でもそれ以下でも無い。じゃあ切ります……」

「ま！……待った！」

王侯貴族の誇りとやらはどこへやら。今、画面の中に映っている巨漢の表情にはまるで資金繰りに行き詰まって不渡りを待つ町工場の社長と変わらない焦燥の表情が浮かんでいるのが安城から見てもよく分かった。嵯峨はその無様な顔色にようやく満足したように頷くと、静かに煙草をもみ消して腕を組んでじっとモニターを睨み付けた。

「民衆が殉教者を気取り始めて手が付けられないから助けてくれってのが本音でしょ？ それならそう初めから言えばいいのに……」

嵯峨の鋭い指摘に血色の良い頬が自然と俯く。この緊迫した情勢の中でのその様子が安城から見ても滑稽で思わず吹き出しそうになる。そんな安城にちらりと目をやった嵯峨は手近にあった拳銃のカートリッジの空き箱の端にボールペンで素早く走り書きをして安城に見せた。

『この様子は録画中。そのまま遼北外務省に送信よろしく』

得意げににんまりと笑う嵯峨にため息をつく。安城は画面から見えないように首筋のジャックにコードを差し込む。

「初めは法学者の指示で国境線侵犯の映像を流しただけだったんだ……情報開示が遅れているというのは常に同盟会議で我が国が指摘されてきた部分だ。それを忠実に実行して来たわけだが……」

「ただ出すだけなら良いんですがねえ……政府系の新聞ででかかど『無神論者の挑戦』なんて見出しを出してまで発表する必要があったんですかね？ あの新聞の資本を出してるのはあんただったはずだ。おそらくここまでの挑発的な記事を出すとなったらあなたにお伺いを立てないわけにはいかないんじゃないですか？」

明らかに見下すような視線を嵯峨はモニターに向けていた。それは一国際機関の出先の責任者が国家元首に向ける視線とは思えなかった。だが追い詰められた状況は覆すことが出来ない。王はただ黙り

込んだまま次の嵯峨の言葉を待つ。

「そのまま世論は好戦的な調子を保ちつつあなたはそれに乗って国境線に軍団を集結させた。それはいい。通常兵器で軍人が殺し合うならそれは国際法上もなんの問題も無い行為だ。同盟軍事機構には悪いが俺としちゃあ好きただけ殺し合いをしてくれりゃあいい。それでガス抜きになるならあなたも今頃はそんな顔をして嫌みな俺に通信を入れる義理もなかったんでしょ？　だがあなたはそれじゃあ満足はしなかった」

嵯峨の言葉が次第に詰問するような色を帯び始めたことによつやく王も気づいて顔を赤らめて凄みをきかせようと目つきを鋭くする。

「仕方がないではないか！　遼北は核を保有してある。先制攻撃をされれば我が国は……」

「じゃああなた等が先制攻撃すれば話は済むと？　二十メートルの厚いコンクリートブロックと鉛で覆われたシエルトーの中のミサイル。しかも場所の特定はあなたも出来ていないとなると……西モスレムが先制攻撃をかけても数十分後には西モスレムにも核の雨が降るのはわかってた話でしょ？　人間は罪なもんだ……使えば破滅すると分かっている切り札でもあると使いたくなるものだからねえ……」

「だがワシはまだ使っておらんぞ！」

「そりゃそうだ。使ったら俺はあなたの膨張した面を見ないで済んだ。今でもいいですよ。使ってくださいな」

嵯峨の軽口に王の顔色は青から赤へ、赤から青へとめまぐるしく変

わる。だが今、嵯峨の持つ隣国遼南皇帝の位以外に王に頼る相手はいなかった。ただ自らをいかに誤魔化すかを考えているようにわざとらしい咳払いが続く。

「それにしても……優秀な西モスレムの諜報機関はどう動いていますか？ ミサイル基地も直接攻撃が出来るなら通常兵器でも破壊が可能なはずですよ」

「ほう、よくご存じで。ワシは知っておるぞ。保安隊にはお主と第一小隊の二人のおなご。それに整備士に一人不死人がある。他にも忌々しい同盟軍事機構のシャー大尉もパイロキネシスト。他にも保安隊関係者には法術師が次々とおる」

さすがに虐め疲れたのか嵯峨がそれとなく誘いをかけてみる。王の顔は再び生氣を取り戻し、にこやかに開いた分厚い唇から言葉が紡がれる。だがそれが今までの話とはまるで関係がないことが分かる。と安城は再びどう同情に値する悲劇の王をからかおうか考えている。嵯峨をあきれ果てたような視線で見下ろすしかなかった。

しかし得意げな王の表情が嵯峨の気に入るところではないのはすぐに分かった。

「その優秀な諜報機関……どう使ってますか？」

「どう使う？」

しばらく王の表情が固まる。そして嵯峨の言葉の意味が分からないというように首をひねった。

「別に遼北のミサイル基地の位置を把握しているかどうかなんて言うのは二の次三の次……一時期遼南で暴れた『殉教団』のシンパのリストとかは届いてますか？」

そこまで聞けば王が青ざめるのは当然だった。軍内部に勢力を持つイスラム保守の勢力の中でも特に過激な『殉教団』のシンパ。彼等が戦術核絡みの部署にいればいつでも核戦争が始まることは目に見える。

「ははーん。その様子だとご存じない。それじゃあ俺の知ってる範囲でシンパの連中をリストアップしておきましたから後で送信しますよ……身柄の拘束。よろしくお願いしますよ」

王を安心させようとした嵯峨の言葉だがその意味するところは西モスレムの諜報機関の無能を証明することでしかなかった。持ち上げて落ちて引きずり下ろす。嵯峨のいつもの話術に呆れながら安城は嵯峨がメモ書きで示した秘匿ファイルを送信した。

「お……恩にきると言いたい……危機が去ったわけでは……」

「おいおい、いつまで人に頼るんだよ。無能な王様。あんたが煽って始めた事態だ。自分で收拾して当然だろうが！それとも何か？これ以上自分の無能さを俺に知らせるほどのマゾなのか？」

凄みを効かせた嵯峨の一言に王は言葉もなく静かに目を閉じた。だが嵯峨はさらに言葉を続ける。

「それと……同盟軍事機構の部隊長としての義務を果たしたシン大尉。アイツは俺の身内だ。今、背教者扱いで自宅が包囲されてる……もしその群衆が敷地に一步でも踏み入ってみる。その脂だらけの首をもらいに参上するからな……それだけじゃ不十分だな。周りにいる王族連中の身分の保障も出来なくなる……意味は分かるな？俺の能力はよくご存じだろうから……」

嵯峨のとどめに王の脂で膨張した顔はそのまま画面からずり落ちた。

「あ……安心したまえ！すぐに暴徒は鎮圧する！それだから頼む！なんとか仲介を……」

「仲介？だから何度も言ってるじゃないですか。俺は同盟の支部機関の隊長。遼南の全権はアンリのものだ。俺がどうこう出来る話じゃない」

冷淡な一言。王はただ連絡を入れる前よりも事態が悪くなったことだけを悟った。

「それなら……そちらに連絡を入れる」

「おう、好きにしてくれ。俺の関知することじゃねえよ」

投げやりな嵯峨の一言に顔を真っ赤にして怒りを静めながら王は通信を切った。

「ずいぶんとまあ剣もほろろね……」

あきれ果てたという顔で安城はゆったりと隊長の椅子に体を伸ばす
嵯峨を見下ろす。

「最悪の事態を考えない指導者と言う奴には俺は厳しいからね。2
1世紀。それまで当たり前とされてきた核の傘理論が崩壊したとき
の指導者の面もたぶんこんな感じだったんだろうな。考えてみれば
その理論自体が脳天気な楽天主義に依存していたんだ。指導者が破
滅を望まなくても民衆の怒りが頂点に達すれば彼等は自滅を積極的
に求めるようになる。第二次世界大戦の枢軸国家の末期を見て勉強
しなかった愚か者と同じ面が見れるとは……良い勉強になったでし
よ？」

嵯峨のいたずらっ子のような表情はこの事態をいかに他人事のように
に彼が見ているかの表れのように感じて安城は不機嫌になった。

「そんな一時の感情で動いている民衆に同情するつもりにはならな
いの？」

安城の棘のある調子の言葉だが、椅子から身を起こした嵯峨にはた
だ空虚な笑顔が浮かぶだけの言葉で自説を語り始めた。

「同情？　なんで俺が……。先ほどの話の続きで言えばヒトラーと
言う指導者を祭り上げて自滅に至った民衆を同情しろってことにな
るが……そのヒトラーは自著で『民衆は豚である』と言い切った男
だよ。そいつを祭り上げるんだ……豚に同情するのはベジタリアン

だけで十分だよ。それに俺はヒトラーの言葉にいつも付け加えたくなる言葉があるんだ」

相変わらずの殺気を放つ嵯峨の表情に安城はうんざりと開いた顔で頷いた。

「豚は飼い主の破滅を望んだりはないものだ。そう言う意味では目先の正義感で自滅を受け入れる民衆は豚以下だ。かと言って俺は人を信じない訳じゃないよ。一人一人の人間。顔を持った人間として目の前に立っているときはそれぞれに個性と魅力を持って俺の前に現われる。彼等に同情するのは尤もな話だ。でもね。彼等が民衆という集団意識の中に埋没したとき。それは同情できる人間の姿じゃない。自らの判断を放棄し、熱狂に身を任せて唯々諾々とどこで聞いたか知らないご高説を延々と説いて回る馬鹿野郎。そんな奴に同情するほど俺は酔狂じゃ無いよ」

嵯峨はそこまで言うつと安城が自分の言葉を拒絶していることに気がついて頭を掻きながら椅子にもたれかかった。

「確かに集団心理に飲まれた人間に同情するなというのは理解できるけど……」

「ああ、その話は俺の個人的な見解だから……それより秀美さんは吉田の野郎の件で来たんでしょ？」

ころころと話題をすり替えておいてその責任を自分に振る嵯峨のやり口にただため息だけで安城は答えた。

「実はね。これは俺も今日になって気づいたんだけど……」

嵯峨はそう言うと安城が首のジャックからコードを引き抜いた机の上の端末に手を伸ばした。予定表が現われ、一週間後に準備が始まる保安隊の演習の日程表が選択される。

「演習？ 同盟が存続するかどうか分からないのに？」

安城の皮肉を込めた言葉に嵯峨は一瞥してにやりと笑った後、日程表の中の運用艦『高雄』での離発着訓練の実行場所の部分を選択してそのまま拡大した。小さな画面の一隅と言うこともあり、安城は身を乗り出してそれをのぞき見る。その時に襟元から肌が見えるのを嵯峨がにやにや笑いながらのぞき見るのを見て安城は鋭い視線を嵯峨に送った。

「東和第十六演習宙域……聞かない場所ね」

「ああ、この三十年間演習の行われた記録は無い場所だ。ただし十年ほど前から東和宇宙軍の輸送艦艇が週に一遍、その中央にある遠州支援センターにいろいろ物資を届けている。しかも荷物は超一級のセキュリティが掛かっている……そこに今更俺達が呼ばれたのか……興味のある話だと思わない？」

嵯峨の茶目つ気のある笑顔。それが油断なら無いものだと分かっているが、確かに話の中身は安城にとっては興味深いものだった。

「タイミングからするとインパルス砲の試験砲台か何かを作っているかもしれないけど……同盟結成時にインパルス砲の開発計画を放棄すると時の菱川首相が明言したじゃないの」

「そう、明言したのは菱川重三郎。菱川グループ総裁。そして菱川グループはインパルス砲のメイン機構の設計を行っていた菱川宇宙科学重工業を傘下に抱えているわけだ」

嵯峨の言葉にしばらく安城は沈黙した。

衛星やコロニー群など軽く消し飛ばす無敵の砲台。その開発の放棄はコロニー国家胡州帝国や外惑星ゲルパルト連邦、惑星遼州の衛星国家である大麗民国の同盟加盟の最低条件とされていた。これらと連携して地球諸国と渡り合うことを念頭に置いていた当時の東和共和国首脳部とすれば多少の軍事的妥協は政治的成功のための捨て石と考えれば受け入れられないものでは無かったのだろう。

しかし、同盟が直面した遼州の南方大陸ベルルカンの失敗国家群の救済という地球諸国から突きつけられた課題に直面している現在。経済的に優越している東和にとって同盟と言う枠組みが重荷になってきていることは誰の目にも明らかだった。

決して余裕があるわけではない東和の国家予算から相当額の支援金が湯水のようにベルルカンの国々に注がれながらこれらの貧しい国々は相変わらず貧しく、内戦と飢餓と独裁政治の中でのたうち回る現状に変化は見られなかった。

先の大戦の講和が未だ不調で対外資産が凍結されている胡州帝国、老朽化した植民コロニーの修復に腐心するゲルパルト、内政の失敗で経済的に不安定な状況が続いている大麗。自分達だけが遼州の負の部分を支えることを同盟により強制されている。保守的な論調で知られる新聞が月に一度はそう言う特集を組むのを安城はうんざりした調子で見る日が続いていた。

「もし……それがインパルス砲の試験砲台だったとして……東和宇宙軍はどう使おうというわけ？」

「俺に聞かないでよ。それにそこにある建造物がインパルス砲台って決まった訳じゃないんだ。万に一つ、もしインパルス砲台だったとして……俺達にそれを告発してくれって言うつもりなら願い下げだ。これ以上同盟内部にごたごたは必要ないよ」

「でも……物が物じゃないの！」

安城の叫びに嵯峨はただ頭を掻く。

「なに？ それじゃあ俺達がそれをぶっ壊せって？ それこそ東和宇宙軍の思うつぼさ。東和は同盟から離脱したがつている。軍事施設……例えばそれがインパルス砲で、今回の遼北と西モスレムの抗争を全面対決まで持つて行こうってその砲身が両国の国境付近に向けられていたとしても破壊した時点で東和は同盟離脱を宣言するよ。同盟の機関に自国の軍事資産がぶっ壊されて黙っているほどお人好しじゃ無いだろうからね」

冷静な嵯峨の指摘には安城も黙るしかなかった。同盟の主要機関の拠点を提供し、資金的に最大の援助をし、そして人材面でも多くの貢献をしている東和が同盟から離脱すれば同盟は完全に崩壊する。

「それに関して……吉田少佐の情報は？」

安城の絞り出すように吐き出された言葉に嵯峨は両手を広げて見せるだけだった。

「奴が姿を消したのは今回の演習場の情報が入り始めてからだな……おそらくその施設を探っているんだろうな……ただインパルス砲の図面が先に流出するとは奴も読めていなかったみたいだな。これじゃあ完全にアイツは退路を断たれたよ」

そのまま嵯峨は椅子に身を投げた。安城には目の前で最悪の状況を楽しんでいるかのように見える同僚にかける言葉を探したが一つとして見つからなかった。

「しばし待て……ねえ……」

アイシャは要の手元の端末に記された文字を見てただそう呟くとそのまま手元のチャーシュー麺に箸を伸ばした。

「ともかくあのネネとか言う情報屋は仕事をしている。それが分かっただけで良いじゃないか」

チャーハンについてきたスープを飲み終えてひとごちついたカウラの言葉に誠は同意するように頷いた。だが要の表情は冴えない。

「こんなに時間が掛かる訳はねえと思うんだけど……このままじゃ演習前に情報が集まらねえじゃねえか」

それだけ言つとそのまま目の前の大盛りワンタン麺のどんぶりを手に取るとずるずると麺を啜り始める。さすがに三日も寮にこもりきの生活は若い誠達には苦行以外の何物でもなかった。相手がかなり腹を立てている東和の公安当局とあって、勝手に動き回るにも限界がある。さらに先日は東都警察に出向していたのであちこち動き回るにしても顔が割れていて余計な詮索をされるのは本意ではなかった。

「たまにはこうして外に出たけど……映画でも見る？」

「何か面白いのはやっているのか？」

カウラの言葉にアイシャはにんまりと笑う。それを見て明らかにげ

んなりする要。

「どうせお子様アニメでも見るんだろ？ 金の無駄だだ」

「酷い！ 今度のはかなりの話題作で大人も泣けるのが売りなのよ！」

「お涙ちょうだいの映画は見るに堪えない」

鋭く言い放つカウラ。誠は最近知ったのだが、カウラはかなり映画に詳しい。特に前衛的な作品を好んでみる携行があるのでアイシヤや誠にはとてもその趣味についていくことは出来なかった。さらに要に至ってはパンフレットを見ただけで背を向けることが請け合いである。

「趣味が合わないから映画は駄目……じゃあ……ゲーム？」

「それこそ金の無駄だ。私はそんなことをして時間を潰すために寮を出た訳じゃない」

これまたぱつぱつとカウラが切つて捨てる。

「どつするんだよ……このまま寮に帰るか？ それもなんだか警察連中に遠慮しているみてえで腹が立つしな……」

要は明らかに苛立っている。元々狭いところにいるのが一番嫌いな質の要である。味は評判で確かに旨いがごみごみした雰囲気の中、料理屋で無意味に時間を潰すのは要には無理な話だった。

「バツティングセンターは？」

アイシャの一言にカウラの大きなため息が漏れる。

「あそこはどこかの馬鹿がピッチャー返しならぬピッチングマシン返しをやって機械を壊した件以来出入り禁止だ」

カウラの言葉にとぼけたように笑う要。誠が店の入り口を見るとすでに席が空くのを待つ行列が誠達が店に入ったときの倍以上に伸びているのが見えた。

「やっぱり外に出てから決めましょうよ」

誠の言葉は珍しく三人の意見と一致していた。それぞれに黙って料理を片付けることに集中し始める。誠はようやくやく安心して味噌ラーメンの最後に残した麺とチャーシューを口の中で味わうことに決めた。

「神前……まだか？」

「ちよつと待つてください！」

すでに食べ終えた要の言葉に誠は慌ててラーメンのスープを啜る。

「お会計は要ちゃん。お願いね」

さっさと立ち去るアイシャ。要はただ苦虫をかみつぶした顔をしてそのままカウンターの奥のレジに伝票を持って進む。

「助かったな」

カウラはそう言って珍しい笑みを浮かべるをそのまま店を出て行った。誠はようやくラーメンのスープを飲み終えるとそのままコップの中の水を口に流し込んで慌ててジャンバーを羽織って店の外に出た。

「ずいぶんとまあ……のんきなこと。いつ核戦争が始まるかも知れないのに」

アイシャの言葉に『核』という言葉が出たのを聞いて客達が迷惑そうな表情でアイシャを見つめる。紺色の髪。普通の人間にはあり得ないその色。軍に詳しい人間なら人造人間のそれだと分かるが一般人にはバンドメンバーか何かになでも見えるのだろう。

「つまらない話しても仕方がない。それより……どこに行く？」

アイシャよりもさらに目立つエメラルドグリーンのポニーテールを揺らしながらカウラが呟いた。店からは会計を済ませた要が睨み付けながら出て来た。

「ごちそうさま」

「いつか倍返しだな」

「は？ 貴族はラーメンなんて下賤の食べるものは食さないのではなくて？」

「殺す……いつか殺す」

殺気立つ要。歌い出しそんな調子のアイシャ。ただカウラは頭を抱えていた。

「そう言えば……今日辺り豊川植物園の梅祭りの最終日じゃ無かったですか？」

誠の何気ない提案に要の顔が曇る。アイシャはそれを見てうれしそうに懐から携帯端末を取り出した。

「ちょっと待ってね……あつた。明日が日曜日で最終日よ。でも……花はあるかしら」

「今年は遅いと聞くぞ。大丈夫なんじゃないか？」

すでに行き先も無いだけに不満そうな要もついていくしかないと言

う雰囲気を感じてそのままカウラの赤いスポーツカーに足を向ける。アイシャが誠の提案が通ったこととそれに要が不満なのに満足したというように誠を振り返り満面の笑みを浮かべる。

「カウラ！早くドアを開ける！」

要が叫ぶのを聞くとカウラはオートロックを解除する。明らかに投げやりに後部座席に這っていく要。

「良い天気ね……梅見にはぴったり」

明らかに嫌みを込めたアイシャの言葉に後部座席に居を固めた要が恨みがましい視線をアイシャに向けていた。

「それじゃあ……」

誠は車内から睨み付けてくる要に恐れをなしてその隣に体を押し込んだ。

「狭いな……」

呼んでおいてこの扱い。いつものこととはいえただ苦笑いだけが浮かんでくる。

「なに……要ちゃんはとなりが私の方が良かった？」

「テメエに触れるくらいなら死んだ方がいいや」

アイシャの皮肉に大げさな言葉で返す要。その様子に苦笑いを浮かべながら運転席に体を沈めたカウラはエンジンをスタートさせた。

ガソリンエンジンの軽快な作動音。遼州系ならではの光景だが、この三ヶ月ばかり原油の値上がりは続いていた。

遼北は東和との原油のパイプラインに保安上の問題があると言うことで総点検を行っていた。それが西モスレムの挑発的行動により活動を活発化させていたイスラム過激派によるテロを警戒しての物だと言うことは誰の目にも明らかだった。

「誰か話せよ……」

ゆっくり車がラーメン屋の駐車場から出ようとする中、車内は沈黙に包まれていた。ガソリンエンジンの音を聞く度にこの数日は沈黙してしまるのが誠達の日常の一コマだった。誠が保安隊で過ごした9ヶ月ばかりの日々も彼等の意志とは無関係な国際的理屈の上で終わりを告げるかも知れない。そんなことを感じながら誠は黙って豊川の街を眺めていた。

「のんきなもんだな……次の瞬間には十億の人間がこの星の上から蒸発しているかも知れないって言うのにな……」

「人間なんてそんなものよ。先の大戦で外惑星や胡州軌道域で日に何億の人が死んでいるときにこの国の人達が何をしていたか……それを思い出せば人間の想像力の限界が見えてくるものよ」

いつにない悲観的なアイシャの言葉に彼女がその日に失われる何億の命の補給部品として作られた人造人間だという現実を誠は改めて理解した。

外周惑星諸国で4億、ゲルパルトで23億、胡州で12億。数を数えるのは簡単な話だが、先の大戦の死者はあまりに多かった。そしてその死と無関係どころかコロニーの破損で一千万人が窒息死した壁面の修復や核攻撃により三千万人の死者が出た衛星上都市の再建需要で急激な経済成長を遂げた東和の市民として自分が暮らしてきた事実。

「同情してくれれば生き返るのか？ それこそ感情論で不毛だな。ここで議論をしたところで遼北と西モスレムの対立を止めることは出来ない。そして先の大戦の時も東和の市民がいくら地球と遼州の対立を止めようと叫ぼうともあの戦争は起きた……違うか？」

目の前で急停車した小型車を軽いハンドルさばきで避けながらカウ
ラが呟く。そして誠は二人の人造人間の出自を思い出した。

ゲルパルトが劣っていた人口を補うために計画した人造人間製造プ
ロジェクト『ラスト・バタリオン』。もしゲルパルトや胡州の枢軸
陣営が優勢に戦争を進めてその必要がなくなっていたのなら、こ
うしてアイシャヤカウラと誠が出会うこともなかった。たぶん二人
はゲルパルト技術陣のゲノムサンプルとして冷凍庫の中で眠り続け、
使用不能になった段階で破棄されていたことだろう。

「事実を変えられないんですね……」

「ケツ！ 今頃気づいたのか！」

要が馬鹿にするように呟く。車はただいつも通りの大通りの昼下が
りをいつも通りに走るだけだった。

「梅を見るのに……辛気くさいには今一ね」

アイシャの言葉で誠は我に返った。確かにいくら思いを巡らせてもどうにもならないことは世の中にはある。

「そう言うことだ……アタシ等は謹慎中の身だ。出来ることはしたんだからいいじゃねえか」

「なるほど、西園寺もたまには良いことを言う」

「たまには？ 聞き捨てならねえな」

そう言いながらも要の表情は笑っていた。確かにその笑いに力は無い。諦めたような空気が漂う。ただそれ以上誠も思い悩むのは止めることにした。

早春の街はいつもと変わる様子は無い。去年までの山奥の訓練校からすればかなり活気のある街。大学時代まで下町の実家で過ごした誠には少し寂しげに感じる豊川の郊外の商店街の景色。

人はそれぞれにやや力を帯びてきた太陽を見上げて季節を堪能している。確かにそれが次に何が起こるか分からない国際情勢と無関係であったところで彼等を非難することは間違っているように誠には思えた。

「おい……あそこの車の列……」

カウラがハンドルから手を離して指さす田んぼの隣の車の列。最後部には警備員が看板を持って立っているのが見える。

『豊川植物園駐車場最後尾』

看板の赤い文字にアイシャが思わず頭を抱える。

「やっぱりみんな考えることは同じね……どこか近くに駐めて歩く？」

「この近辺は駐車禁止だ」

カウラに一言で自分の案を否定されたアイシャが情けない表情で後部座席に目を向けた。

「そんな目でアタシを見ても仕方ないだろ？ 待つしかねえよ。梅は逃げたりしねえから」

「いつもは待つのは嫌だつて逃げるくせに……珍しいのね」

確かにいつもにないのんびりしたような表情の要を見て誠も首をひねった。あらゆる意味でまな板の上の鯉の誠達。要は彼女なりに覚悟を決めているのだろう。そう思うと誠も自然に頷いていた。

「へえ、後部座席のお二人さんはお待ちするようですよ」

「なら待つしかないだろ」

いつでもそのまま最後尾の車を追い越せる位置で車を停めていたカウラは覚悟を決めたようにそのまま駐車場へ続く車列の最後尾に車

を着けた。

「30分くらいかしらねえ……」

「昼過ぎだからな……確かにそのくらいは時間がかかるんじゃないか？　そう言えばこの駐車場はでかいのか？」

「都営施設だからそれなりにでかいはずだぞ……ちょっと待て」

要の質問に暇をもてあましていたカウラはナビゲーションを弄って駐車場の規模を調べる。

「二百台……多いのか少ないのか微妙だな」

カウラの苦笑いに誠も自然と笑みが漏れてくるのを感じていた。

止まった車の中に入り込む日差しはまだ弱く、少しばかり眠気を誘う。

「眠いわね……」

思わず呟いたアイシャにカウラが苦笑いを浮かべる。

すぐに前の車が動き出した。

「意外と早く入れたりして」

「それは無いだろう。たまたまだ」

要の言葉を軽く否定するとカウラはそのまま車を動かす。

「こんな良い日より……いつまで続くか……ガイガーカウンターでも買おうかしら？」

「ああ、売り切れ続出らしいな。そういうところはちゃっかりしている庶民様だ。まあそんなことをしたところで降り注ぐ放射線を払うことなんてできねえのによ……」

また振り出しに戻る会話。

太陽の力はまだ弱く。アイシャと要に弱音を吐かせる勢いは無い。ただ、その眠気は着実に襲ってきているようで次第にアイシャの口数が減り始める。

「まあ……梅でも見て。帰りに酒でも買って帰るか？」

「お前はそればかりだな」

要の言葉にカウラはいつもの呆れたという笑みを浮かべる。誠がちらりと助手席を見れば、すでにアイシャはうたた寝を始めていた。

「眠くなるのも分かる日差しだな……暖房も適度だし……アタシも寝ようか？」

「遠慮するな。静かで気楽になる」

カウラの言葉に要はパツと目を見開いて誠を睨み付ける。

「あ……ただ見てただけですよ」

「で？ 見た感想は？」

「え？ まあ……眠そうだなと……」

「そうか……」

少し残念そうに俯く要。誠は彼女が何を求めていたのか分からずにただ仕方なく自分も眠れるように背もたれに頭を載せた。

「また動くな……やはり早く着くんじゃないか？」

車が動き出すと要は勝手に呟いていた。確かに明らかに早めに車は動いていた。駐車場の存在を示す看板も見え始めている。

「早く着くと良いですね……」

睡魔と戦いながら誠は投げやりにそう呟いていた。

「梅……意外と終わってたりして」

不意に目を開けたアイシャのつぶやきに要が顔を顰める。

「そりゃ嫌だな。せつかく並んだのに見てみたら散った後……最悪」

「そんなことは無いと思いますよ。今年は梅は遅いつて言ってますから」

誠の言葉にも要の表情は冴えない。ただ動いていく景色を眺めながら大きくため息をつく。

「でもそれは咲くときの話だろ？ このところかなり暖かいじゃねえか。すぐ散ったりしてるかもしれねえだろ？」

「心配性ね……なんなら降りて確かめてくれば？」

「ふざけるな！」

要の怒声にアイシャはそのまま寝たふりを再開した。カウラはそれを眺めながらじりじり進む前のバンの後ろをゆっくりと車を進める。

「全部は散って無くても……紅梅だけ散ってるのか？」

「それも嫌だな。紅白揃ってこそその梅じゃねえか」

「意外だな。西園寺が花にこだわるとは……」

カウラの何気ない一言に要が黙り込む。一応は彼女も風雅を重んじる胡州随一の名門西園寺家の次期当主である。そう言うことに疎い誠ですら殿上貴族のたしなみとして彼女が幼い頃から梅見などに興じる日々を過ごしてきたことは容易に想像がついた。

「結局隊長が梅見でもして鋭気を養えと言ったが……そのまんまになりそうだな」

駐車場の入り口に立つ警備員の指示に従ってハンドルを切りながらのカウラのつぶやき。誠は目の前に臨時駐車場と書かれた看板を見てようやくこの行列がなぜ早く進んだのかを理解した。

「なんだよ……今頃臨時駐車場をオープンか？ 今の季節なんだから朝から開けとけよ」

「まああれだ。普段の駐車場がいっぱいになるまで閉めておく取り決めにでもなっていたんじゃないのか？」

「これだからお役所仕事は……」

「私達も公務員じゃないの」

要の悪態に薄目を開けたアイシャが突っ込みを入れる。カウラはそのまま車を砂利の敷き詰められた空き地に進めて誘導員の指示に従ってバンの隣に車を停めた。

「じゃあ行くから……でかいの二人！ 降りろ」

「何よその言い方……」

悪態続きの要をちらりとらんだ後、アイシャは渋々助手席のドアを開けると外に出た。誠も苦笑いを浮かべながら助手席を倒して外に出る。

「やっぱり寒いな……」

「なら上を着てくればいいのに……」

ジャンパーの下はタンクトップといういつもの姿の要にアイシャが嫌みを込めた調子で呟いた。

「ぐだぐだ言っていないで行くぞ」

いつまでも揉めていそうなアイシャと要を横目で見ながらカウラはそう言つとそのまま植物園の入り口に向けて歩き始めた。

平日の日中。客の多くはリタイヤした高齢者が多く見られた。仲むつまじく歩く姿、何人もでがやがやと談笑しながら入り口に向かう姿。そこにはいつもの東和の日常があった。

「いい若いのがこんな時間に梅見か？」

「何よ……要ちゃんだつて反対しなかつたじゃないの。それに他に良い場所知ってるの？」

アイシヤに突っ込まれて要は不服そうに黙り込む。そのまま真新しい植物園の入り口のゲートが目に入る。褐色の門柱と黒い鉄柵。

「もう少し……柔らかい印象で作れないものかな」

カウラでさえそう言う物々しい門。その脇にある入場券売り場に当然のように要が歩いて行った。

「大人三枚と馬鹿一枚」

「馬鹿？」

素っ頓狂な要の言葉に彼女と同じくらいの年の職員が首をひねって誠達を眺める。

「馬鹿つて要ちゃん？」

「オメエのことだよ……まあいいや。大人四枚」

「はい……」

相変わらずよく事情を飲み込めないというように要のカードを端末でスキャンした後そのまま磁気カードを四枚要に手渡す。要はそれぞれ誠達に配るとそのまま振り向きもせずに入り口のゲートを通りすぎた。

「急いじゃって……そんなに梅が見たいの？」

アイシャの皮肉に答えることもなく要はそのまま奥へと歩き続ける。誠達も仕方なく急ぎ足でゲートを通りすぎるとそのまままだ新緑には早い植物園へと足を踏み入れた。

「寒々しいわね……」

思わずアイシャの口から漏れた言葉も尤もな話で、落葉樹にはまだ木の芽の気配が僅かにするばかり。多くの木々はまだ冬の気配を残している気温に遠慮して縮こまっているように見える。

「季節は移るものだ……いつまでもとどまると言うことは無い」

カウラはただそれだけ言うと一人飛び出している要に向けて急ぎ足で進む。誠も左右を見回して感心しているアイシャを置いてそのまま要のところへと急いだ。

「奥だよな……梅は」

「知らないで急いで歩いているのか？」

突然立ち止まって振り返ったの要の言葉にカウラはあきれ果てながら周りを見回した。桜の木々の枝ばかりが天を覆い、季節感の感じられない松の梢が風に揺れていた。

「案内板でも捜せばいいじゃないの」

遅れてたどり着いたアイシャはそう言うと、そのままひときわ目立つ立派な枝振りの松に向けて歩き出した。

「勝手なことばかりして……」

ため息を漏らすカウラの視線の先でアイシャが誠達に手招きをしているのが見えた。

「案内板でもあったのか？」

カウラの言葉にただ指を指すアイシャ。

「梅だな……そして……」

誠もカウラと共に松の木の隣に咲き誇る紅梅を眺めた。その目の前には三脚にカメラを載せて難しい顔で立ち並ぶ高齡の男女の姿とそれをうつとうしそうに横目で見ながら梅の花を愛でる同じ年格好の女性の群れを見つけた。

「でも……なんで？」

アイシャがそう言ったのはその向こう側。柵に頼杖をついてじつと梅を眺める少女の後ろ姿を見たからだ。正確に言えばそれは少女の後ろ姿ではない。戸籍上の年齢はもう三十に手が届く。

「シヤムだろ？ 休暇でも取ったんじゃないか？」

全く動じずにそのまま要は一直線に梅を見ながら物思いにふけるシヤムに向かって歩き出した。

「おい、そこの餓鬼！」

シヤムはしばらく声をかけたのが要だと分からず呆然としていたが要の特徴的なタレ目を目にするにすぐにむっと膨れた表情を浮かべて誠達に目をやった。

「餓鬼じゃないよ！」

「じゃあなんだ？ ……梅見か？ がらにも無いな」

「それを言うなら要ちゃんの方が似合わないじゃない！」

「そりゃあそうか」

シヤムにムキになられて少しばかり反省したように要はそのままシヤムの隣に立つ。節くれ立った梅の木々の枝に点々と赤い花が咲いているのが見える。

「良い枝振り……そして良い梅だ」

「要ちゃんが言うとお実感わかないわね」

「馬鹿言つな。胡州も梅はそれは大事にされているんだ。これより良い梅も散々見てきたぞ」

「嫌々めんどくさそうにでしょ？」

アイシヤに凶星を指されて要は黙り込んだ。そんなやりとりを乾いた笑みを浮かべて眺めていたシヤムは再び視線を梅へと向けた。

「ナンバルゲニア中尉……やはり吉田少佐のことが気になるんですか？」

思わず誠は本題を切り出していた。あまりにも突然だと言うように振り返ったシヤムの目が誠の顔を直視できずに泳いでいる。

「う……うん。気になるよ。でも信じたいんだ」

それだけ言うと再びシャムは目を梅に向ける。考えてみればシャムと吉田の関係は誠から見ても不思議だった。つきあっているというわけでも無い。シャムはどう見ても色気より食い気という感じにか見えないし、吉田は超然としていて男女関係などの情念とは無縁な冷たいイメージが誠にはあった。

「信じるねえ……確かにテメエ等のつきあいが長いのは聞いちゃあいるが……それほど奴は信用できるのか？」

「そう言う割には要ちゃんは心配してお金を出して俊平を捜してくれているんでしょ？」

嫌みを言うつもりが逆に窘められて要は顔を真っ赤にして黙り込む。その様子に吹き出すアイシャに要は照れ隠しに拳を握りしめて振り返した。

「別にそんなに心配しなくても大丈夫。アタシ以上に俊平は強いから」

「強い弱いの問題じゃ無いわよね……なんでも東和の公安警察が吉田少佐を追い始めたとか……」

アイシャの突然の言葉に誠はただ黙り込むしかなかった。

「公安が？ 容疑は何だ？ 今回の遼北と西モスレムの激突と……」

「カウラちゃん興奮しないでよ！ 私だって昔の知り合いのついで噂に聞いたくらいなんだから！」

振り向いて詰め寄るカウラに迷惑そうに顔を顰めるアイシャ。そんな様子もどこ吹く風で相変わらずシャムは梅を眺めていた。

「心配しねえのかよ……辛抱強いというか……ここまで行くと薄情に見えるぞ」

要の言葉に再び慈悲を帯びた笑みで振り返るシヤム。彼女と吉田の出会いから今まで。誠が知っていることはほとんど無いと言っても良い。だがそのつながりがどこまでも特別なものなのは理解することが出来た。

「そう見えても仕方ないけど……分かるんだよ。間違はなく大丈夫だって」

「そんなもんかねえ……」

理解できないというように要はそのままシヤムの隣の柵に寄りかかって梅を眺める。眺めていた紅梅に降り注ぐ光が一瞬の雲の影に隠れた。

「で……吉田は何をしてると思う？」

再び降り注ぐ早春の日差しを見ながらのそれと無い要のつぶやき。シヤムはただ変わらぬ笑みを浮かべていた。その視線は梅の梢から逸れることがない。

「大事なこと。俊平がしなければならなかった大事なことをしているんだよ。きっとアタシにも相談できないほど個人的で大事なこと……」

「昔の女との別れ話か？」

「要ちゃんは……本当にデリカシーってものが無いのかしら？」

アイシャの言葉にさすがの要も苦笑いを浮かべた。シャムを見る限り吉田の目的はそのような所帯じみた話のようには誠にも思えなかった。

「しなければならぬことを終えたら帰ってくるよ。その時笑顔で迎えたいんだ……だから泣かないの……」

光の中。シャムの眼の下に二筋の光の線が見えたのを誠は見逃すことがなかった。

保安隊隊長室のソファ―に座る管理部部長の高梨渉参事は彼の落ち着かないときの爪を噛む動作を続けながら腹違いの兄で部隊長である嵯峨惟基が高梨が同盟司法局本局から持ってきた演習内容の最終決定稿を見終わるのをじっと待っていた。

「これでまあなんとか演習の実施まではこぎ着けたわけか……」

決定稿を机の上に投げると嵯峨はのんびりと椅子の背もたれに身を投げた。長身痩躯な嵯峨に比べ小太りな高梨がじっと恨みがましい視線で兄を見上げる様は少しばかり滑稽にも見えた。高梨もそれを自覚しているようで、頭を掻きながらそのまま視線を隊長室狭しと並ぶ書画骨董のたぐいに目を向ける。

どれも一級品の折り紙付きの品々ばかり。遼南王族の嫡男として生まれ、胡州第一の名家西園寺家で育った嵯峨に取ってみればどれも見慣れた品々だったが、父が政務を投げて後宮に籠もってから生まれ、追放された先の東和で育った高梨からしてみればどれも手の届かないとてつもない品物に見えた。

「じろじろ見るなよ……全部預かりものなんだから。傷でも付けたらことだ……」

「なら仕事場に持つてくることは無いんじゃないですか？」

棘のある弟の言葉に嵯峨は参ったというような苦笑いを浮かべる。

「それよりその顔だ。本局……どうだい？」

嵯峨の質問に高梨は大きくため息をつく。兄は本局の様子など手に取るように予想しているのは間違いない。

「厭戦ムードですよ……遼北の胡州大使館に秘密裏に胡州の西園寺首相が入ったと言うことでとりあえず正面衝突は延期になったと安堵している奴もいますがねえ。結局は時間稼ぎにしかならないと言うのが大方の見方ですね」

「はあ……兄貴も落ちたものだな。先の大戦で遼北と胡州の休戦協定を結んだ辺りがピークだったのか？」

嵯峨の義理の兄、要の父である胡州宰相西園寺重基の動静に嵯峨も多少安堵したような表情を浮かべたものの、その目はまるで笑ってはいなかった。

「落ちられては困るんですよ……明日、ゲルパルトのシュトルベルグ大統領がイスラム聖職者会議の代表を伴って西モスレム入りする予定なんですから。ともかく両国を対話のテーブルに着かせることが……」

「出来るの？」

突然の嵯峨の突っ込みに高梨は黙り込んだ。両国への支援勢力からの圧力は今に始まったことではない。2月だというのにすでに遼北には中国からの特別使節が二度、西モスレムには三人のアラブ諸国の大臣クラスの人物の来訪が伝えられていた。ただ事態はここまで悪化していた。その事実が状況がどの段階まで進んでいるかと言うことを示していることは高梨にも十分理解できた。

「まあお偉いさん達の動向は俺達が何を言っても変わらないだろ？
それより本局の厭戦気分とやらを聞こうじゃないか」

そのまま身を乗り出して嵯峨がソファーに座る高梨を見つめてくる。興味深々と言いたげに珍しく見開かれた目に見つめられるとどうにも高梨は緊張してしまっている自分を発見した。遼南王朝は初代ムジャンタ・カオラ帝が突如姿を消してから続く皇帝達の多くが夭折した為、皇帝になるべく生まれたという存在は数えるほどしかない。その一人である嵯峨。時々見せる鷹揚に見えて恐怖を見るものに与える視線を見るとそんな兄の恐ろしい一面を見ているようで高梨はいつも息を飲むしかなかった。

「東和出身の連中が予想通りというか……早速再就職先探しですよ。すつかり同盟解体は目の前だというように勤務中から前の所属の所属長と電話で長話。まあ連中も分かっていますから同盟の機密事項とかは流れていないと思いますが……」

「分かったもんじゃねえなあ。東和の金が同盟をどうにか生かしていたようなもんだ。金には秘密がつきもの。そして金の流れは力につながる。賢い奴はばらしはしなくてもそれとなく分かるようにほめかしたりしているんじゃないか？」

「確かに……」

高梨は力なく笑うしかなかった。彼自身が同盟司法局へは東和国防軍の背広組からの出向者である。人のことを言える立場ではない。

「東和宇宙軍絡みも結構活動始めているんじゃないか？」

嵯峨の声のトーンが一段下がる。高梨もその理由は十分に分かっていた。

「連中は秘密主義ですからね……陸軍や空軍の奴等のように表立って動いてはいませんが。ただ動き出したら早そうな連中ですよ」

思わず高梨の口から本音が出る。国防省内部でも宇宙軍は別格扱いされていた。予算や人事権は表だつては政府の意向に沿ってはいるが、高梨が予算編成局の課長をしているときも事実上独立した権限を有していると判断して決済するようになると言う前任者からの引き継

ぎを受けたことを覚えている。

「ある人物からの指示でね……」

退官が決まっていたノンキャリアの前任者の言葉でおそらくそれが東和ただ一人の人物の意向であることだけは理解できた。

「菱川の旦那……笑いが止まらねえんじゃないかねえ」

嵯峨の顔が卑屈な笑みに浮かぶ。そしてその視線はそのまま窓の外
の壁の向こうに広がる菱川重工豊川工場に向かった。

「同盟が東和にとって思いの外経済的負担になってきたのは事実で
すから……機会があれば解体に導きたいという考えがあっても不
思議な話じゃ無いですが……本当に菱川重三郎元首相が？ あの人は
同盟司法局の設立を一番に主張した人じゃないですか……それにそ
の実働部隊長に兄さんを指名したのも事実上はあの人でしょ？」

信じられないと言うより信じたくない。そう思いながら高梨はまだ
外を見つめている兄の後ろ姿を見つめていた。嵯峨はゆっくりと視
線を部屋に戻し、一度目を閉じた後伏し目がちに言葉を紡ぎ始める。

「俺を同盟内部に引きずり込んだ理由は簡単さ。要は俺を目の届く
範囲に置きたかったんだろ？」

「まるで犯罪者じゃないですか！」

「おう、俺は一応先の大戦じゃ人道に対する罪で銃殺されたことにな
っているんだから……立派な犯罪者だろ？」

遼南での治安維持活動で『人斬り新三』の異名を取った兄の顔が歪むのに高梨は目をそらした。それでも兄の言葉は続く。

「同盟の実力部隊は俺が同盟設立を提案した時の条文の段階から本部を東和に置くことになっていた。技術力と安定した治安が魅力だね……扱うものがアサルト・モジュールなんて言う技術力の塊を常に運用状態に置くとなると東和か……大麗くらいしか適当な場所がない。警官が金で動くような治安のヤバイところに設置すれば同盟の中立的実力行使という役割が果たせなくなる可能性もある……そうなる選択肢は東和一本に絞られたわけだが……その部隊長には何人かの候補がいた」

兄の言葉がどこにたどり着くかと高梨はただ耳を澄ませるだけだった。

「まずは遼北の周麗華少将……従妹だからと言う身びいきじゃ無いが決まってもおかしくなかつただけどねえ……」

高梨も父ムスガの弟であり遼北革命に参加したムジャンタ・シャザーンの娘で先の大戦では女性にして遼北でも上位の撃墜数を誇ったエース。何度か会議の席で顔を合わせたがあつたが勘のきつそうな視線はどうにも高梨の苦手とするところだつた。

「遼北じゃあ……菱川さんが認めませんね」

「そう言うこと。それで次の候補が大麗のパク・ジュンス大佐。若手で温厚篤実……だが当然ながら人材不足の大麗が手放す訳もない……ってんで次の候補が胡州の誰かつてことだ」

「誰かつて……自分じゃないですか」

弟の軽口に嵯峨は苦笑いを浮かべる。高梨も兄に言われるまでもなくこじれにこじれた保安隊隊長人事については情報を独自に入手していた。嵯峨のくせ者ぶりは有名なだけに遼北と西モスレムが珍しく共同歩調でその人事に反対したが、結局は菱川重三郎が強引に押し切つて決まつた人事だつた。両国はこの人事に露骨に不服だつた結果、遼南内戦で面識があつたため直接嵯峨が口説いた二人、遼北の技術部部長の許明華大佐と高梨の前任の管理部部長で現在は戦地である両国国境で任務遂行中のアブドゥール・シャー・シン大尉以外の出向を拒否したほどに難航した人事だつた。

「要するに最初から俺はいつかは切られる運命だつた訳だ……まあ

このまま行くと同盟の方が先に命脈が尽きそうだがな」

「腹は立たないんですか？ 一応は王族最後の仕事として提言した同盟の設立でしょ？」

力なく笑う兄に思わず高梨の語気は荒くなる。

「腹ならもう煮えくりかえっているさ……でも怒ってどうなるよ？ 世の流れ、人の心。どうにもならないものって言うものはこの世の中いくらかもあるもんだぜ。俺はこの星が地球列強に食いつぶされない為の方策として同盟を提言したわけだが……そんなことよりも世の人々は目先のプライドや気分が大事らしいや」

それだけ言つと嵯峨は再び椅子で身を反り返らせて伸びをする。

「それより涉よ……東和で食って行くんだから俺とは距離を置いた方がいいぜ……本庁からの帰り、付けられただろ？」

「え？」

嵯峨の言葉に高梨は驚きを隠せなかった。

「どこの連中が……」

「東和の公安。うちのゲートの前にもこの寒いのに三人も張り付いて……ご苦労なことだ」

頭を掻きながら外を指さす兄。憲兵上がりの兄が同類を見逃すはずがないのは十分に分かる。そして現在第一小隊所属の吉田俊平少佐を東和公安ばかりではなく同盟司法局の捜査部門も追っていること

は高梨も知っていた。

その時嵯峨の机の通信端末に着信があった。

「秀美さんかな？　だといいいねえ……」

嵯峨はのんきにそのスイッチを入れた。

「見つかったわよ！」

「何が？」

慌てた調子の安城秀美の声に嵯峨はいつものとぼけた調子で返す。相手がいつもの嵯峨だと分かった安城はただ苦笑いを浮かべるとモニターに顔を向き直った。

「例の秘密兵器のデータ流出の件。やはりギルドが絡んでるわね……さっきようやく左翼セクトのメンバーを落とすのよ……」

「そいつはご苦労さんだねえ……でもそれじゃあ吉田とは無関係……」

嵯峨の口調は相変わらずのんびりと他人事のように続く。大きく自分を落ち着かせるためのため息をつく。安城は言葉をつないだ。

「余計ややこしくなっただけよ。しかも直接手渡してデータを受け取ったって……しかもあの相手が北川公平……先日おたくの神前君がかち合った相手よ……」

「そいつはまた大物が……でもその調子だと北川のアジトでも掴んでるんじゃないの？」

それとなくいやらしい笑顔を浮かべて画面を見つめる兄に弟ながら高梨はただ呆れるほか無かった。

「それが掴んでるから困るのよ……しかも明らかに捕まえてくれて言うくらいに丁寧に証拠を残しているんだもの」

「ああ、それじゃあ公安の皆さんは無駄手間をかけちゃうことになるねえ……」

嵯峨の言葉の調子には少しとして悪びれるようなところはない。ここまであからさまに他人事のふりをされると安城も怒るに怒れなかった。

「山脈西部宇宙港から第十四宇宙ターミナルステーション行きのシヤトルの貨物室ですって……ばれないとも思っているのかしら？」

「だからブラフでしょ？ 今頃本人は安全極まりない方法で遼州星系から出ようとしている……そう考えるのが普通じゃないの？」

いちいち尤もなだけに安城はただ苦笑いを浮かべるだけ。

「とりあえず北川を取り逃がしたら連絡するわ」

それだけ言うと通信は突然のように切れた。

「あのさあ……涉……俺、また嫌われたかな？」

「さあ……どうでしょう？」

いかにも情けない表情を浮かべる兄。高梨はただその演技に過ぎる表情に呆れながらこの小汚い部屋を後にする踏ん切りを付けていた。

「この部下にしてこの上司ありね……」

通信端末を閉じると安城は苦々しげに笑った。東都警察の待合室の午後。辺りは緊張が走っているというのに安城の部下で保安部時代からの部下である中年の優男から静かにコーヒーを受け取ると安城は静かに飲み始めた。

「しかし……吉田俊平とギルドがつながっていたとは……」

部下の一言に安城は大きくため息をついた。公安の詰め所からは苦虫をかみつぶした表情の捜査員が吐き出される。安城は彼等の視線を一つ一つ受け流しながらただ黙って自動販売機を見つめていた。

「あのねえ。元々情報が吉田少佐から出たとは今の時点では決められないわよ……いいえ、出ていたとしたらなおさら彼はギルドとはただの利害の一致でデータを渡しただけかも知れないわね」

「勘……ですか？」

急に真剣な表情になった安城を見て部下の男がコーヒーを啜りながら笑う。

「ギルドにとってもなんで自分の手柄をちっちゃいセクトにくれてやる必要もよく分からないから……おそらくギルドにとってこのデータは何の関心もない代物だった。せめて世間を驚かせて喜ぶ連中にくれてやる程度の勝ちしか……だから吉田少佐は情報のリーク先にギルドを選んだ」

静かにコーヒーを含む安城。自動販売機のレギュラーコーヒーにしては割と高級な代物だが、味覚デバイスの仕込まれていない彼女にとってはただのアクセサリ以下の代物だがなぜか気分的にはおいしく感じられるのが不思議だった。

生身の時の記憶……ネットワークと直結した情報戦用軍用義体の持ち主が忘れてしまいがちな感覚。

「吉田少佐は一体何物なのかしら？」

「あの上官の懐刀……ただの傭兵上がりとは思えません……」

そう言つてコーヒーを飲み干した部下を見た後、安城はそのままコーヒーを彼に手渡して歩き出した。

「隊長！」

慌てて声をかける部下に安城は笑顔で振り向く。そこに迷いはない。

「宇宙港へは山村の班を回して。どうせ空振りだと思つけど。私はしばらく司法局のラボに籠もるから連絡しないでちょうだいね」

「いいんですか？ これ以上同盟に恩を売ったところで遼北と西モスレムがぶつかれば……」

渋る部下に振り返つて安城は静かに頷く。

「そうね……同盟崩壊となればこれから私のすることは東和軍復帰すら難しくなるかも……」

「隊長……」

部下の表情がきりりと引き締まった。男はそのまま静かに敬礼をする。

「では……私は私の捜査を始めるわね……そもそも吉田俊平という人物が何物なのかを……」

それだけ言うと安城はそのまま慌ただしい雰囲気の下をひたすらに出口へと歩き始めた。

軍艦のキャビンと言うものが初めての北川公平はしばらく落ち着かず、席を立ったり座ったりを繰り返していた。ようやく落ち着いたのはキャビンに入ってから一時間が過ぎようとしたときだった。

大きくため息をついた後、どっかりとソファーに腰を下ろす。

「落ち着かないな……」

向かい合って半眼のままじっと固まったように見えるいつもの薄汚い黒いトレンチコートの桐野孫史郎を見ると北川は力ない笑みを浮かべた。

「反戦活動家が軍艦で移動……しかもそれも地球の船とあつたらかなり矛盾するじゃないですか」

「反戦活動家？ 活動家崩れのテロリストの間違いだろ？」

ゆっくりと開かれた桐野の目には相変わらず生気が感じられない。

北川はただこの相手にはその話題は無駄だと悟ってわざとらしい大きな動作で腕時計を確認して見せた。

「今頃は公僕の皆さんは俺の撒いたブラフに引っかかって小言を咳いているでしょうねえ……」

「ふん……」

北川の言葉に桐野は歯牙にもかけないというように手にしている目

本刀に目をやる。思わず飛び退く北川。

「何を驚いている……」

「旦那のことだ……いきなりばつさりなんてご免ですよ」

「何を言うのやら……お前さんの法術展開の不規則さを知っている俺だ。そう簡単に斬れる相手じゃないことも十分知っている。ああ、なかなか斬れない相手だから面白いとも言えるな……」

「冗談ばかり……」

北川の言葉は振えていた。相手は二十三人も東都で平然と辻斬りをしてきた相手だった。しかもその数字には彼等の所属する組織であるギルドの利害関係者は含まれていない。いくつかの彼等の意図にそぐわない非正規活動家やその所属する組織への武力制圧で桐野が斬った人間の数はさらにその数倍に達する。

「それにしてもいくら今生の別れになるかも知れないとはいえ……今は何の義理もないかつての所属セクトに情報を流すとはずいぶんとお前も人情味があるじゃないか」

桐野の口から『人情味』などと言う言葉が出たので北川は吹き出ししていた。桐野の刀を握る手に力が入るのを見ると北川は手を振りながら釈明を始める。

「いえいえ……あの情報チップをくれた奴の気に沿うようにしてやるには俺には他には手が無くてね……旦那と違って女に縁がないんで……」

「まるで俺が女たらしのような口を聞くな。それとじゃあお前はあのチップを指定された場所で受け取った段階でそれが吉田俊平からのものだと分かっていたのか？」

珍しくいやらしい笑みという感情らしいものを浮かべている桐野を見ながら北川は前屈みになってソファの前の机に頬杖をついた。

「ギルドに情報売りたい奴はこの世には何人いることやら……だけれどあえて俺を指定して情報を流す人間はいないことは無いですけど……どれも役に立たないような代物ばかり。潰して欲しい敵対セクトや公安関係者の名簿。政府系機関と公には出来ないつながりのある民間企業の役員の一覧……かつての俺なら飛びついたでしょうが、今の俺には何の関心もない」

「じゃあ今回の情報チップの中身がそれと違うとなぜ分かった？」

興味深そうにあごをなでながら北川を見下ろす桐野に北川はただ力ない笑みで応えた。

桐野の鋭い視線に一瞬ひるんだかに見えた北川だが、その後ろに反った体には余裕があった。静かにため息をつき、そしてそのまま桐野を見つめる。

「まあ……受け渡し方法がね……俺の前いた世界の連中とはかなり違うんですよ。かなり手が込んでいると言っか……回りくどいといっか……まあ慎重を期すプロの世界では当然なのかも知れませんが」

「まるで俺達がアマチュアみたいではないか」

「みたい何じゃなくてアマチュアそのものですよ。実際に諜報機関とかとやりとりがあるような連中がよこした情報。そっ言う機関に出入りする連中に知り合いはいないものでね」

にやりと笑う北川。だがまだ桐野は得心がいかないというような表情を浮かべている。

「俺と因縁がある諜報機関がらみ。そうなれば保安隊くらいしか思いつかないでしょ？もしギルド本体に用があるなら俺じゃない窓口を使うはずだ……太子はそれほど俺を信用しちやいませんよ」

「口の軽い奴は誰だっけ信用しない」

「ああ、これは手厳しい！」

自虐的な笑みを浮かべて額を叩く北川だがその目は笑っていないかっ

た。桐野も北川も所詮は手駒に過ぎない。遼南第四代皇帝ムジャンタ・ハド。通称廢帝ハドの冷酷で動くことのない心が二人を人間として扱ったことなど一度としてなかったのだらう。それ以前にハドに人間としてみられた人間がどれだけいるか……北川はそれを想像するとどうにも卑屈な自分を見つけて笑うしか無くなる。

「その吉田俊平……何をしようというのかねえ……俺を囮に使っての情報公開。しかも同盟とは相容れない思想の連中からの発言となればこいつは裏切り行為ですよ」

「あちらの指し手も嵯峨惟基だ。手駒に癖があるのは当然だろ？」

興味がないというように呟くと桐野はそのまま剣を抜いた。白い刃がキャビンの明かりに照らされて揺らめく。北川はその抜き方で桐野が相手を斬るつもりなのか剣の手入れをしようとしているのか區別がつかなくなった自分に気がついて苦笑いを浮かべる。

「それにしてもヨーロッパ旅行……楽しみですね……」

「地球人の気まぐれにつきあっていては身が持たんぞ？ ようは今のうちは俺達を東和から引き離したいという太子との利害が一致した偶然だ」

懐紙をコートのポケットから取り出すと桐野は静かに刀身を拭い始めた。何度となく斬ってきた人間の肉の脂で汚れていく懐紙。それを見て北川の心は特に揺らぐこともない。

「俺もすっかり人殺しが板についてきた……初心というのは忘れるもんなんだな……」

口に出したとしたら間違ひなく桐野に馬鹿にされるであろう昔の自分を思い出しながら北川は静かにしばらくは見納めになる東和の景色をキャビンの窓から眺めることにした。

「そちらの部下の方々は……私の艦が気に入らないようだ……残念ですね」

遼州派遣フランス宇宙軍艦隊司令カルビン提督は引きつった笑いを浮かべながらモニターの中で浮かぬ表情の北川達を眺めていた。そしてそのまま視線を不可思議な雰囲気をもとった美しい女性の方へと向けた。

一見アジア系に見えるが、遼州人も多くは同じように見えるのでカルビンには彼女が何者かは分からない。細い切れ長の目と長い輝いて見える黒髪。年の頃は25くらいに見えるが女性は化けるのを知っているので特に気にすることもなくただ黙ってそのまま彼女の前のソファアに腰を下ろした。

軍事交流の一環で訪れた東和宇宙軍の新港。近くにはカルビンの興味を引きつけて止まない保安隊の運用艦『高雄』の姿もあるという。ただ雑務にかまけて結局ここで停泊してられるのも後数時間。後悔をしているのは事実だが、任務を常に優先する彼の人が柄が彼を分遣艦隊司令の地位まで引きずりあげてきたのも事実だった。

女性は静かにコーヒーを啜っている。カルビンはコーヒーの味にはうるさい。豆はエチオピアの放射能汚染地域以外から取り寄せ、焙煎は暇を見繕っては自分で行き、そして毎日必要な分だけ自分で挽く。コーヒーを味わうことを中心に自分の人生は回っている。そう思うと少しばかり不思議な気持ちだがそれが事実だったのだから仕方がない。もう退官も近い年になるとそんな悟りに近い境地に達するようになってくるものだ。

「アイツ等が部下……笑わせてくれますねえ……アタシとアイツ等尤も……そのつながりはまともな軍人さんには分からないものかもしれない……」

妖艶な笑み。そんな言葉がぴつたりと来るような笑みを浮かべる女性。彼女の流ちょうなフランス語に今日何度目かの感嘆の表情を浮かべた後、カルビンは静かに彼女が差し出したカードを手に取る。

「ハド陛下からの書簡……確かにお預かりしました。欧州は今のところは平穏だが……遼州系移民も少なくない。今回の遼北と西モスレムの紛争で彼等に妙な動きが無いとも言えませんから……使い手を貸していただけるとは本当に願ってもいないことです」

静かに丹念にカルビンは答える。彼としても目の前の女性、ギルドの総帥廃帝ハドの使者が先ほどのキャビンの乗客並みに危険な存在なのは十分理解が出来た。

法術師。その存在を欧州でもいち早く知ったカルビンだが、その威力はすでに上層部は十分に理解していることは彼の『近藤事件』で観測された様々なデータに全く関心を示さないことで証明されていた。予期した危機。だが上層部は対策が満足に出来ていない状況でその存在が公になったことに焦りを感じているようだった。

さもなければキャビンの二人がカルビンの艦隊の艦に乗る必要もない。二人とも遼州同盟司法局の追う違法法術発動事件の重要参考人である。もし彼等の存在が同盟加盟国の所属機関に漏れれば国際問題では済まない話になる。

「ああ、アイツ等なら問題ありませんよ……なにしろ太子直々に因

果を含めてありますから」

女性の冷たい笑みにカルビンは背筋に寒いものが走る。カラ。彼女はそう名乗った。名字を尋ねたが『いろいろと事情が……』と軽くはぐらかされた。カルビンも海軍の士官らしく若い頃は浮き名を流したものだ、この手の女性には気をつけるとその頃の勘が自分に告げるので特に深く追及もせず、今に至る。だが彼女の時に悪意を感じる微妙な表情の機微を見る度にただそんな自分の若い頃の判断が正しかったのかと思ひ悩む瞬間があるのを感じていた。

「法術師には法術師を当てるしかない……それは分かっているのですが……」

納得がいかないような口ぶりのカルビンをあざ笑うような笑みで見下すカラ。

「お互い上の意志は尊重しましょう。それが組織で生きるコツですよ」

カラの口元の微かな笑み。そこにサディスティックな彼女の嗜好を想像してカルビンはさらに表情を硬くした。

「ですが……」

相手の方が上手と分かっただけでもカルビンにはただここで自分の命令に不満を持っていることをカラに伝えておくべきだと思っていた。

桐野孫四郎。彼の経歴はカルビンも噂には聞いている。先の大戦でほとんど無謀とも言える遼北反攻を企てた胡州帝国陸軍最後の大反攻作戦『北星計画』。対地球戦争反対派で外務省から謹慎を命じられていた現胡州宰相西園寺義基の遼北を通じての全面講和計画を潰すためだけに陸軍の強硬派が急遽でつち上げた穴だらけの反攻作戦。その結末はあまりにも哀れだった。

作戦準備が内通していた遼南帝国軍から漏れ、胡州陸軍とゲルパルトの派遣部隊は罠に頭から突っ込んでいく形になった。遼北は首都防衛のために温存していた精強部隊の革命防衛隊を惜しげもなく投入し、胡州軍を中心とした枢軸側は緒戦から敗戦に次ぐ敗戦。そしてそれをあざ笑うかのように遼南帝国近衛師団長ガルシア・ゴンザレス将軍が遼南の首都央都でクーデターを起こしてアメリカ軍を引き入れ、胡州軍は南北から挟み撃ちに会うという惨劇に見舞われることになった。

その首脳部。愚かでカルビンも出来れば関わり合いになりたくないうさんくさい連中だが、終戦後、桐野は彼等を一人、また一人と斬殺していった。

『怨』

その場に残された血染めの文字。確かにそんな恨み言でも言いたくなる気持ちは分かる。だが桐野はそれ以来血塗られた経歴を残していくことになるのは当然だったのかも知れない。

戦後、対外資産を凍結されて経済的に混乱する胡州で彼の暴力はあらゆる場面で必要とされるようになった。闇市で、裏市場で、時には中央官庁の官吏の手引きを受けた形跡まで残して桐野の蛮行はとどまることを知らなかった。

そんな名の知れた人斬り。恨みは山のように買っていることだろう。何度となく死亡説が流れたこともある。だがいつの間にか彼は廃帝ハドと言う庇護者を得てこうして東都で人斬り稼業を続けてきていた。そして今度はそのまま地球に渡るといふ。

「言いたいことは分かるがねえ……桐野のことだろ？ だから因果は含めてあるって言ったじゃないか……分からない御仁だねえ……」

次第にカラの口調がくだけてくる。相手を呑んだというような妖艶な笑み。見た目の物静かさとは無縁な激動的な人生もあの桐野や北川などと同じくカラも過ごしてきたことだろう。

その時、机の上の端末に着信があった。

「早く出たらどうなのさ」

見下すようなカラの一言に急かされるようにカルビンは慌てて着信ボタンを押した。引きつった表情を浮かべる情報士官の表情がカルビンの心を乱す。

『ご歓談中申し訳ありません。……提督』

「いや、いい。要件を言い給え」

カルビンは正直ほつとしていた。これ以上カラのペースに惑わされるのは彼のプライドに関わる。いつもの峻厳な表情に戻った艦隊司令を見て安心したような笑みを浮かべた後、気を引き締め直すと情報将校は重い口を開いた。

『遼北と西モスレムの民間の通信回線が何者かにクラッキングを受けているものようです……原因は目下調査中です。調査が済み次第再度報告させていただきます』

「ほう……これは面白いことになりそうだねえ。……いや、あなたたちにはつまらない結果かも知れなけど」

再びカルビンは不敵に微笑むカラの口元に目を奪われていた。

「どうせ両国とも言論の自由の保障されていない国……」

そこまでカルビンが言ったとたんカラの手がテーブルに叩きつけられた。だまるカルビン。一瞬浮かんだ無表情の後に身の毛がよだつような妖艶な笑みが再びカラの顔に浮かぶ。

「地球の方々はいつもこれだ……自由？ まあいいさ。アタシ等も自由が欲しくて国家とは距離を置いている身だ……つまらないことは言わないでおこう。それよりこれで対決ムードを破滅にまで導くつもりだった自暴的な民意が一度孤立して個々の人間に戻るわけだ……再びネットが繋がったとき……どう転んでいるかねえ……」

カラの言わんとしていることは分からないではない。情報の海に流れる敵意の最近に汚染された脳で悪態を掻き込み続けていた人々が手を止めて周りを見回したとき。家族、近隣の人々。彼等もまた自分達がまき散らす敵意の言葉のもたらす結果を甘受する人々だと知ったとき。

「首脳部は……今の時期を逃さないでしょうね。講和のテーブルにつく準備があるという発表が数時間後に出ても不思議じゃない」

苦渋に満ちた表情を浮かべてカルビンは呟く。満足げなカラ。だがそこでカルビンには疑問が浮かんできた。

「同盟の継続……それは太子の意志なんですか？」

「太子の意志？ 同盟がどうなるうが知ったことかね！ アタシ等

には政治的な思想は無い。ただ自由にやりたいようにやるだけさ……尤も桐野みたいにやりたいようにやられたら困る連中もいるからそここのところは案配を見ながらと言つところかねえ……」

カラはちらりと艦長室の外に目をやる。カルビンは背筋に寒いものが走るのを感じながら悠然とコーヒーに手を伸ばしたカラを眺めていた。

「政治的な意図がない武力集団……」

「そうさ。だからあんた達ヨーロッパはアタシ等に手を差し出したんだろ？ 同じような組織を抱えている人間と言えば後は嵯峨惟基くらいだ……だがあの御仁には同盟結成を呼びかけたという事実が付属する……地球からの独立などを叫びかねない思想を持っているかも知れない連中と手を組むのはどうにもプライドが許さなかった……あんたの上司の考えはそんなところかねえ……」

満足げにそう言つとカラは静かにコーヒーを啜つた。沈黙が続く。カルビンは耐えきれずに口を開こうとしたがすでにカラは鋭い視線をカルビンに浴びせながら言葉を紡ぎ始めていた。

「あんた等が思うよりもつと地球と遼州の関係は深いんだよ……公然の事実となる以前から法術師は地下でつながり、それぞれ助け合つて生きてきた。その力の存在が知らればあんた等は何をするか分からないからねえ……今回の遼北と西モスレムの対立の行き着く先だった核戦争に使われるプルトニウムの濃縮技術もすべて地球の産物だ……酷い殺し方をするならあんた等地球の方が遼州人より一枚上だよ」

「だが……そう言つた技術の進歩があつたからこそ両者は出会つた。

違いますか？」

食い下がるカルビンを満足そうな笑顔を浮かべながらカラは立ち上がる。

「アタシは出会いがいつも幸福だとは思ったことが無いものでね…
…じゃあお互いの利益の為に」

それだけ言い残すとスーツ姿のどこか似合わないように見えるカラはそのまま出口へと向かう。カルビンはただ座ったまま彼女を見送るだけだった。

世間の喧噪とは無縁な場所。宇宙をそう考えている人間が多いことがルドルフ・カーンには気にくわなかった。

彼がゲルパルトの意志を継ぐと称して同志を集め始めてすでに二十年の時間が流れているが、こうして同志達と宇宙研究施設を歩いても遼北と西モスレムの抗争の話題ばかりが注目されている。だが彼としては好都合とは言えた。

「所詮……有色人種達のことだ……自滅するさ。しなければ裁きを下せばいい」

両国のネットワークダウンの情報に表情を曇らせるとつづけられたような金属製の扉の前に立つ。隣に立っていたかつての遼州星系最大の勢力を誇ったゲルパルト共和国、民族団結党武装親衛隊の制服を着た金髪の青年が正確な足取りでロックを解除し、不気味なうなりを上げながらドアが開く。

『来ると思ったよ……』

中から聞こえたのは人間の声ではなかった。

合成音。人工的なその音に意味がこもっていることにカーンは内心苦々しく思いながらそのまま十畳ほどの部屋の中に三人の部下を連れて入った。

『銃を持った護衛か……あなたに協力を約束して以来、俺の体は固定されたままだというのに』

部屋の中央。そこには棺のようなものが置かれていた。中央に墓標のようにあるのはモニターで、そこには発せられた言語のようなものと同じドイツ語の文面が表示されているのが見える。

「なあに。用心というものだよ。君は……本当に私の意志に沿って動いているのかどうか。いつもそれが不安だね」

カーンはそのままモニターを無視して透明な樹脂で出来た棺桶の中を覗き込む。満たされた冷却液の中で人間の白骨死体のようなものに多くのコードがつながれている様の中にはあった。知る人が見ればそれが軍用義体の慣れの果てであることは所々に見えるむき出しの金属骨格の色合いで理解できた。

「確かに……あなたには敵が多い。多すぎるくらいだ。尤も、半分以上はあなたの身から出た錆なんだけどね」

「減らず口を……」

思わずカーンはその骸骨に向けて笑いかけていた。もしその義体が笑うことが出来たらさぞ残忍な笑みを浮かべるだろう。

『こんなところに来た理由は遼北と西モスレムのネットワークのクラッキングの件だね。あれは……予想された範囲だよ。これまでがうまくいきすぎた。両軍のサーバに領空を侵犯する相手国のアサルト・モジュールの疑似情報を流してこの状況を作り上げることが出来た……その時点で『管理者』はこちらの動きに気づいていたはずだ。反撃とすれば俺の予想より遅かったというのが今の俺の分析だけ』

モニターの中を流れるアルファベットの下に突然日本文で同じ意味の言葉が並ぶ。部下が思わずカーンに目を向けるが、カーンはまるで関心が無いというようにそのまま骸骨を眺めていた。

「君の『管理者』への恐怖はどうでもいいんだ。私が欲しているのはただ一つ」

『この砲台が動くかどうかだろ？ でもいいのかい……せつかくの切り札だ。使うタイミングはまだこれからもあるかも知れないというのに』

骸骨の忠告。確かに目の前の物体の分析は正しいかも知れないとカーンは思うこともある。実際この東和宇宙軍のインパルス移動砲台の接收までにかけた費用は莫大なものだった。だが『管理者』……オリジナルの吉田俊平の消息がつかめない以上、この施設を使わずに捨てるほどカーンは寛大ではなかった。

『あなたの選択肢は確かに少ない……敵が多すぎるのは考え物だね。あのアドルフ・ヒトラーも敵を作りすぎて自滅した。確かに大衆を動かすには敵を作って彼等を攻撃する様を見せてやるのが一番手っ取り早い。強気な指導者はどんな世界でも人気者だ……まあ自滅するのが彼等のほとんどの運命なのだがね』

皮肉のつもりだろうか。カーンの目は次第に殺気を帯びて目の前の骸骨を睨み付ける。

『怖い顔をしたところで状況は変わらないよ……要するに土壇場で菱川の総帥が日和見を決め込んでいることがあなたを焦らせているんだろ？ それはあなたの読み違いだ。菱川は最初からこの段階で日和見を決め込むことは決めてあなたに接触してきたんだ。遼州同盟は確かに東和には負担が大きい……でもそれ以上の見返りも期待できる。彼は同盟の運命がどう転ぼうが勝者の側に立つつもりだ……実際にすでにこの施設の存在にまつわる東和宇宙軍の情報はすべて抹消済みだ。この砲台がどんな災いを招こうがすべてはゲルパルトの過激派のテロ……東和は無関係で押し通せるように準備は済ませているようだ……はめられたんだよあんたは』

自分が想像していた最悪の状況を丁寧に説明してみせる機械人形。カーンの苛立ちは最高潮に達する。

「すると何か……貴様はその様子をそこで黙ってみていたのか？
ずいぶんなできの悪い参謀じゃないか！」

思わず握りしめた拳。もしこの透明のケースに叩きつけたとしても

ただ痛みを感じるのはカーンだけ。むなしい怒りにこの骸骨に表情があつたらさぞ満足げな笑みを浮かべることだろうと想像している自分に腹が立つてくる。

『怒らなくてもいいじゃないか……高齢者の怒りは生産的とは言えないな。別に指を啜えてみていた訳じゃない。その抹消作業の状況はある菱川に遺恨を持つ人物のところに送付しておいた……その作業状況のファイルを最も効果的に使用してくれる才能を持つ人物のところだ……まああなたにとっては最悪の相手かも知れないが』

「嵯峨か？」

確かにあの男なら菱川重三郎という狸を狩り出す腕はある。だが目の前の機械人形に指摘されるまでもなくカーンには悪意しか持たない男だった。

「確かに嵯峨が菱川をいたぶる様は見てみたいが……我々とのつながりが露見したらどうする？」

『それが狙いだよ……あなたの組織は東和にも根を張っている。それをあの男に見せるのは実に愉快じゃないか。自分の庭と思っていたものが実は地雷原だったというわけだ。このところあの男の動きが激しすぎたからな……多少動きづらくしてやるのもあなたの為と思つてね』

「私のため？」

カーンは思わず自分の声がうわずっているのが分かった。機械を相手になんでこのように追い詰められた気持ちにならなければならぬのか。自己嫌悪が背筋を走る。

『そうだよ。この砲台が衝突を躊躇う二つの国家を遼州の地上から消し去ったとして……あなたは遼州で次の手がすぐ打てると思っ
ているんですか？』

「作戦は常に電撃的に行われなければならない！」

『その考えがこんな状況にあなたを追い詰めたんですよ。今、砲台はあなたの手にある。それは迅速に使われなければならない。それは確かに事実だ。だがその後の混乱した遼州を予想してすでに手を回しているのは誰か？ 菱川だ。約170時間後、この宙域で保安隊の演習が予定されている……』

最後の言葉はカーンも初めて聞く情報だった。

「そんな……奴等の行動は同志が把握しているはずだ！ 連中はそれほど情報管理に対して慎重じゃ無い！」

『だとしたら『管理者』の意図が働いたようだね……保安隊の演習に関する情報を別の情報にすり替えてあなたの間抜けな同志達を欺く……彼なら簡単な話だ。で、この砲台を彼等に引き渡すかね？
それとも……』

機械人形の指図を受けるまでも無かった。カーンの覚悟は決まっていた。

「くそつたれ！」

「オンドラさん。下品ですよ」

大きなバツクを抱えたネネの姿はまるで要塞のような警察署の前では実に奇妙で儂げに見えた。尖った縁の青いサングラスで隣で城塞を睨み付けているオンドラの姿も相まって通行人は思わず二人に目を向けていた。

東和西部最大の都市、涼西。その遼南からの移民が多く住むスラムの警察署の前での女二人連れという姿はあまり用心の良いものでは無かった。通行人達はすぐにその視線を心配するような様子に変えるのを見てオンドラは咳払いをするとそのまま一人先だつて道を港に向けて歩き始めた。

「これで破壊された軍用義体は12体。どれも所有者不明。脳は完全に破壊されて証言も取れない……さらにご丁寧の数日後には保管庫から盗まれた上に保存された資料もすべて抹消されているっていふんだ……吉田俊平って奴は相当慎重なんだねえ……」

早足で歩くオンドラに少女のような体格のネネがバツクを抱えて必死についていく様は非常に滑稽に見えた。

「予想はしていたんですが……ネットを調べても無駄なわけですよ。すべての記録は改竄されて残っているのは取り調べに立ち会った人物の記憶だけ」

「予想してた？ さすが『預言者』！ じゃあ次はどこで壊れたサイボーグを見つけた人物の聞き込みに行くんですか？ もう東和は終わりにして遼南ですか？ 大麗ですか？ いっそのことベルルカンまで足を伸ばしますか？」

半分切れ気味にオンドラは叫ぶ。元々が違法入国者である彼女が警察署での居心地の悪さにストレスを感じているのはネネも十分承知していた。西園寺要からの百万ドルはすでに半分がオンドラが東和国内で動けるための申請書類を偽造したり正規ルートでない移動手段を確保するために使われていた。そんな経費の計算もオンドラを苛立たせているのだろう。

ネネはちょこまか歩きながらオンドラの背中を眺めていた。

「サイボーグが破壊される……どの義体もただじゃない。専門家じゃない初期捜査の捜査員が見ても分かるほどの高度な戦闘用のカスタムがされたものばかりって話だ……それが消えたのになんの連絡もない……」

「それだけの無駄遣いが出るのは政府機関と考えるのが順当な見方ですね……海外の諜報機関の諜報員の義体も混じっていたでしょう……でも数が多すぎる。東和はそれほど治安が悪いわけでも軍の力が強いわけでもない。強力な軍用義体が必要とされるような非正規作戦が展開されたのは東都戦争くらいですから……」

ネネの『東都戦争』という言葉にオンドラが立ち止まった。

「あの時にあの馬鹿と出会わなきゃこんなところでぐだぐだ言つことも無かつたのによ！」

そのまま目の前の空き缶を蹴飛ばすオンドラ。その空き缶はそのまま放物線を描いて正面の大通りに転がっていく。大型トレーラーがそれを踏みつぶし、あっという間に潰された缶を見てオンドラはにやりと笑った。

「でもおかげでお仕事がもらえたんですもの」

「は？ お仕事？ ただ無駄遣い……」

「費用が発生したのはほとんどオンドラさん絡みばかりですよ？」

ネネの言葉にオンドラは黙り込む。その様子を見るとネネは静かに抱えていた大きな黒いバッグを道路に置いて大きなため息をついた。

「ちょっと待っていてくださいね……」

そう言うとネネはバッグを開けて中身をあさり始めた。

「何を始めたのやら……」

呆れるオンドラを無視してネネはそのまま中からビニール袋に入った小さなチップを取り出した。オンドラは驚いた表情でそれを見つめる。

「ネネ……それって証拠物件じゃないの？ どうしたのよ……盗ってきたわけ？ まずいよそれは……」

「調査もしないで放つてあるんですもの。使わないと損ですわ。それに……たぶんこれは私の予想を裏付けてくれる大事な品物ですから」

そう言うとネネは静かに道を眺めた。オンドラはその先を見つめる。ただ続くあまり手入れの行き届いていないあれた道。

「何か見えるのかよ……」

「北です」

ネネの言うとおりその方角は北だった。オンドラは訳が分からず。ただ北を見つめるネネを見下ろす。

「北に何があるんだよ……北と言えば最近遼北の避難船が何度も来港しているって話じゃないのさ。危ないよそりゃあ」

「だから行かなければならないんですよ。答えはそこにあります」
ネネの力のこもった言葉にオンドラは大きいため息をついた。

「分かりましたよ……アタシはあなたの護衛、ナイトだ。地の果てまでだつてついていきますよ」

「私のじゃなくて私の持つているお金でしょ？ でもまあお願いします。もしかしたら危ないことになるかも知れませんか……」

一言一言確かめるように呟くネネ。その言葉に何か質問をするだけ無駄だと分かったオンドラはネネの足下のバッグに手を伸ばした。

「返してください！」

慌てるネネにオンドラは笑いかける。

「いいじゃないのさ、荷物を持ってやるうって言うんだ。こんな気まぐれ滅多にないんだぜ！ さあ我行かん！ 北の極北の大地へ！」

軽快な足取りで歩き出すオンドラ。ネネは苦笑いを浮かべると手にしたチップをコートのポケットに押し込んでそのまま早足で歩き続けるオンドラの後をちょこまかについていくことにした。

ムハマド・ラディフ王の顔はただひたすらに歪んでいた。

目の前には隻眼の金髪の男がその様子をうかがっている。それがどこかの記者ならいい。だがそれがゲルパルト大統領カール・シュトルベルクが相手となると話は違った。

「この条件が最低のラインじゃ……これ以上は譲れん」

目の前に出されたのは遼州同盟としての西モスレムの遼北国境ラインまでに厚さ十キロの緩衝地帯をもうけるという案だった。間の兼州川の中州を巡る今回の軍事衝突。緩衝地帯をもうけるという案は理解できないわけではない。だが彼が煽った世論はそのような妥協を許す状況には無かった。

緩衝地帯ではなく、武装制限地域として駐留軍を駐在し続けること。せめてその程度の妥協をしてもらわなければ王の位すら危うい。ラディフの意識にはその一点ばかりがちらついていた。

「武装制限……ずいぶんと中途半端な」

薄ら笑いを浮かべてるシュトルベルクを見て彼の妹かあの憎らしいムジャンタ・ラスコーの妻だったことを思い出す。

『類は友を呼ぶとはこのことじゃわい』

そんな思いがさらに王の顔をゆがめた。シュトルベルグの隣に座ったアラブ連盟から派遣された宗教指導者はただシュトルベルグの説

明に頷くばかりでラディフの苦悩など理解しているようには見えな
い。

「武装を制限することで衝突の被害を最小にとどめるといっても悪
くないが……後ろに核の脅しがあれば意味はないですなあ……」

あごひげをなでながら呟く。まるで異教徒の肩を持つような言葉遣
いにさらにラディフの心は荒れた。

「譲れぬものと譲れないものがある……国家というものにはそう言
うものがあるのは貴殿もご存じと思うが？」

絞り出したラディフの言葉にシュトルベルグが浮かべたのは冷笑だ
った。その様は明らかにあのラスコーとつり二つだった。

「実を取るのが国家運営の基礎。私はそう思っていますが……名に
寄りすぎた国は長持ちしない。ゲルパルトの先の独裁政権。胡州の
貴族精度。どちらもその運命は敵として軍を率いて戦ったあなたな
らご存じのはずだ」

皮肉だ。ラディフはシュトルベルグの意図がすぐに読めた。ラスコ
ーは胡州軍の憲兵上がり、シュトルベルグもゲルパルト国防軍の遼
南派遣軍の指揮官だったはずだ。二人ともラディフの軍と戦い、そ
して敗れ去った敗軍の将。そして今はこうしてラディフを苦しめて
悦に入っている。

それが思い過ぎしかも知れなくても王として常に強権を握ってきた
ラディフには鼻持ちならない状況だった。

「それはキリスト教国の話で……」

「なるほど……それではイスラム教国では通用しない話だと？」
シュトルベルグはそのまま隣に座ったイスラム法の権威を眺める。
注目され、そして笑みでラディフを包む。

「これは妥協ではなく災厄を避ける義務と考えますが……核の業火に人々が焼かれること。それこそが避けられなければならない最大の問題だと」

その言葉はラディフの予想と寸分違わぬものだった。所詮目の前の老人も他国の人なのだ。そう思いついたときにはラディフの隣の弟アイディードや叔父フセインの表情もシュトルベルグの意図を汲んで自分に妥協を迫るような視線を向けていることに気づいた。

「首長会に……かけて見る必要がありそうだな」

まさに苦渋の一言だった。『妥協よりも名誉ある死を！』と叫ぶ保守派学生の気持ちが今こそラディフに会う言葉はなかった。

事態を悪化させた彼への突き上げが反主流派の首長から出るのは間違いなかった。この場にいる彼の親類縁者もまたその派閥に押されてラディフ非難を始めることだろう。

「ところで……遼北の説得はどうなのかね」

気分を換えようとラディフは目の前で笑みを浮かべる大統領に声をかけてみた。

「あちらは素直に非武装の線で呑んだそうですよ……市民の自暴自棄な暴言がネットの切断で止まっている今なら大胆な妥協が出来る……そう踏んだんだと思いますが」

シュトルベルグの言葉をラディフはとても鵜呑みには出来なかった。あちらに向かった使者はラスコーの義理の兄である西園寺義基だ。こいつも喰えない奴なのは十分知っていた。

「一党独裁体制はうらやましいものだな……我々は簡単には妥協できない」

「絶対王政の方が自由がきくように見えますがいかがでしょうか？」

ああ言えばこう言う。またもラディフは出鼻をくじかれた。どうにも腹の中が煮えくりかえる感情が顔に出ているのが分かってくると気分が悪くなる。隣のアイディードは腹違いでどうにも気に入らない弟だがそれでもこれほどまでにラディフを腹立たせたことなど無い。

「ワシの王政はそれほど絶対的なものではないと思うのじゃが……のう」

左右を見て同意を求めてみる。あからさまに浮ついた笑みが並ぶ。

『どいつも……馬鹿にしゃがって』

叫びたい衝動に駆られるのを必死で耐えるラディフ。

「破滅は避けられそうなんですから……そんなに顔をこわばらせる必要は無いんじゃないですか？」

シュトルベルグのとどめの一言だった。ラディフは怒りに駆られて立ち上がっていた。

不敵に激情に駆られた王をあざ笑うシュトルベルグ。驚いたようにあぐりと口を開け、ターバンに手を当てる宗教指導者。

「少しばかり外の空気を吸ってきたいと思うのじゃが……」

「どうぞ。ただ急いでいただきたいものですな……状況は一刻を争う」

皮肉を言い始めたらおそろくとどまることを知らないだろうシユトルベルグの口から放たれた言葉に思わずラディフは怒りの表情をあらわにしながらそのままテーブルに背を向けて会議場を後にするしかなかった。

「ひとまず失業はなさそうだなあ……」

寮の食堂のテレビを見ながらポテトチップスをかじっていた要の言葉にアイシヤは首をひねった。

「そう簡単にいくかしらねえ」

「ずいぶん慎重だな」

にやけた要の顔を見てアイシヤは大きくため息をつく。

「なんだよその態度……」

「良いわねえ、要ちゃんは。保安隊が解体になっても収入は領国から上がるでしょうし……ああ、他にも官位があったはずよね。そこからの年金もそれなりに入るんでしょ？」

「なんだよ嫌みか？ それにオメエだって艦長資格があるじゃねえか。東和宇宙軍にでも頼めばいいんじゃないか？ゲルパルトは……予算がないからなあそこは。元の鞆に収まるのも大変そうだ」

にらみ合う二人。そこに明らかに場違いなにやけ面の誠がたどり着いたから二人の視線はドアの方に向かう。

「どうしたんですか？ 二人とも。来週の演習の荷造りは……」

「そんなもんとづくに終わってるよ。オメエはあれだろ？ 航海中

「に作るプラモの品定めでもしてたんだろ？」

「要に凶星を当てられてたじろぐ誠。アイシヤはそんな要を無視して立ち上がるとそのまま誠のそばまで歩いて行く。」

「ねえ、今度こそ私のフィギュア作ってよ！」

「あれは……元型を作るのに集中しないといけないですから。二人部屋じゃあ無理ですよ」

「なんだ。今度は二人部屋か？」

意外な誠の言葉に要は驚いたように呟く。

「ええ、島田先輩と一緒に部屋です。まあ……部屋割りは鈴木中佐が決めたそうです……」

「お姉さんの出産前最後のお仕事ね……それにしても変な話ね。島田君も一応士官だし、誠ちゃんはパイロット。それなりに優遇されてもいい話だけど……」

「まああれだ。神前は肝っ玉が小さいから度胸の据わった島田に兵隊のなんたるかを教われってことなんじゃねえの？ 知らないけど」

そう言うとそのままだ。要はテレビに目を向ける。遼北の国家府中央会議室で引きつった笑みを浮かべる遼北首脳部の隣で本心からと思えるような満足げな笑みを浮かべる西園寺基義。それが胡州宰相であり要の父だと言うことはこの場の誰もが知っていることだった。

「良い仕事したじゃないの……たまにはパパを褒めてあげたら？」

「誰が褒めるか！ あの糞親父！ 失敗したら首締めに行っちゃったのによ！」

そう吐き捨てるように言うと要は立ち上がる。

「タバコ吸ってくるからな」

「別になにも聞いてないわよ」

アイシャの一言を聞くとぶいと背を向けて要は食堂を出て行った。

「相変わらずだな……」

入れ替わりに苦笑いを浮かべたカウラが入ってきた。

「まあね……あの娘も大変なんですよ」

アイシャの言葉に誠は首をひねった。

「でも西園寺さん……胡州大公家の次期当主でしょ？ そんな仕事をしなくてもお金ならどうにでもなるんじゃないですか？」

そのままアイシャの隣に座った誠にアイシャは呆れたような表情を浮かべながら肩を叩く。

「あのねえ……誠ちゃん。貴族稼業も大変なのよ。私も最初は誠ちゃんと同じことを考えていろいろ虐めて上げたんだけど……」

「虐めねえ……」

アイシャの言葉にカウラは苦笑しながらそのまま正面の席に座った。誠は相変わらずよく分からない表情で呆然とアイシャを見つめていた。

「基本的に胡州貴族は無職じゃ勤まらない訳よ。まあ……公爵、伯爵クラスになれば就職先が無ければ貴族院議員の席が空いているからどうにでもなるけどねえ」

「じゃあ議員になれば良いじゃないですか」

思わず出た誠の言葉にアイシャがさらに深いため息をつく。

「西園寺首相は反貴族主義の急先鋒よ。貴族院議員の権利はとつくに放棄済み。それで無職が三年続くと……」

「廃嫡の上、不熟に付き永蟄居。つまり死ぬまで座敷牢の中で過ごすことになるそうだ……胡州貴族典範の付則に載ってる。ネットでも調べられるはずだ」

カウラの言葉に思わず誠は息を飲んだ。生まれ持った栄華と義務などと胡州貴族達が口にするのはそのような法的な裏付けがあったとは。それ以上にあの落ち着きのない要が座敷牢の中でじつとしていくことに耐えられるとは思えなかった。

「そう言えば……あれでしょ？ 隊長が継ぐ前の嵯峨家の断絶理由も当主が永蟄居中に使用人を惨殺したとかしなかったか……」

「そんなことは知らないな。つまらない知識だ」

アイシャの言葉を切って捨てるとカウラはそのまま視線を食堂の入り口に移した。

そこにはセーラー服姿の少女が立っていた。

「あれ？ 小夏ちゃんじゃないの。学校は？」

「今日は学年末テストで半日で終わりです。それより皆さん……師匠を知りませんか？」

入り口で立ったままいつも『師匠』と慕うシヤムのことを口にする
小夏の口元が振えているのを誠達は見逃さなかった。

「シヤムちゃん？ 何かあったの？」

何気ないアイシャの言葉に神妙な顔の小夏はそのまま彼女の正面の椅子まで行くと腰をかけた。

「最近連絡がないんです。それで今日、電話を入れてみたら……隊にも出てないらしくて……」

思わずカウラと誠は顔を見合わせた。

「ああ、あの娘は有給たくさん残ってるから」

「違うんです！それだけじゃなくてグリーンも一緒にいなくなって」

小夏の言葉に場が瞬時に凍り付いた。グリーン。フルネームはグレゴリウス16世という名前のコンロンオオヒグマの子供である。子供と言っても成長すれば10メートルにもなるコンロンオオヒグマである。優に五メートルはあるあの巨大な熊が行方不明となると問題は質が変わってくる。

「警察には……っつてうちに連絡がないってことはランちゃんは手を出さないつもりね……」

「でもあの巨大な熊が行方不明なんだぞ。クバルカ中佐……何を考えているのか……」

こう言う問題では最初からなにもしない隊長の嵯峨を無視して副部

隊長格のクバルカ・ラン中佐にアイシャとカウラの心は向かう。

「でもあれだけの巨大な熊ですよ……歩いていたら見つかるでしょ……」

苦笑いを浮かべながら呟く誠の顔をアイシャはまじまじと見た後大きなため息をついた。

「誠ちゃん……自分の胸に手を当てて考えてごらんなさいな。あなたもあの娘も魔法術師。干渉空間を展開して自由に移動できる訳よ……」

「あ！」

誠も言われてみて初めて思い出した。その視線の先では呆れた顔でカウラが誠を見つめている。その視線に誠はただ申し訳なくて俯いてしまった。

「でもどこに……遼南まで跳ばれてたらずいわね」

「遼南ですか！」

アイシャの一言に小夏が叫びを上げる。シャムの出身地遼南。この東都からは数千キロ西の山奥がシャムの育った森のある山岳地域である。コンロンオオヒグマを初めとする猛獣が暮らす広大な大自然を一匹の熊と小さな女の子を捜して走り回るなどとうてい無理な話だった。

「それは無いな」

確信のある語調でカウラが断言する。そのあまりにはつきりとした口調にアイシャは感心しながらその切れ長の視線を投げた。

「この前入国手続きの件でナンバルゲニアには話をしたんだ。空間転移で跳んで他国に入国することは不法入国になると教えてやったらちゃんと頷いていた」

「なに？ それだけの理由？」

呆れるアイシャだがシャムの単純な思考を考えると誠もカウラに同調しなければならなかった。

「でも師匠だから……それで心当たりは？」

小夏の言葉にアイシャは携帯端末を取り出す。

「あれだけの熊を連れていたらニュースになるか……ただニュースになるようじゃ困るんだがな」

苦笑いのカウラ。その落ち着いた様子に誠は思わず顔を向けた。

「グリーンは臆病だからな。だがそれだけに心配だ。兵隊でもそうだが落ち着きのない臆病な奴ほど手に負えないものは無いからな。本当に何をするか分からない……」

「駄目ね。まるで手がかりは無し！」

カウラの言葉が終わるのを待っていたかのようにアイシャが天を見上げる。

「誰にも見られていない場所ですか……あの人は狩りをしますよね。その場所とか……」

そんな誠の思いつきにアイシャとカウラは顔を見合わせたがすぐに諦めたと言つように首を振る。

「師匠は狩り場を誰にも教えませんか……まあイノシシの被害が出ているところは決まっていますから場所の限定は出来るでしょうが……」

小夏が呟くと誠もその広大な農地と雑木林を想像して呆然とした。豊川市の西には広大な山々が連なっている。その山々のどこかに潜む熊と少女を見つけるのも十分に骨が折れる話だった。

だがそんな決断のつかない誠に苛立ったように素早くアイシャが立ち上がる。

「ぐだぐだ話していても始まらないわね……小夏ちゃんは島田君に連絡を入れて。急ぎでない仕事をしている技術部員と楓ちゃんに捜索を頼むわ。それと誠ちゃん……」

「はい？」

誠の間抜けな返事にアイシャは大きくため息をついた。

「今、寮にいる面子を集めてちょうだい。方策を練るから」

アイシャに言われると誠はそのまま立ち上がった。食堂を飛び出すとそのまま玄関に向かう。玄関にはその日の寮に住む隊員の行動予定表があった。

「西川さん、大西さん、シュミット先輩……」

おそらく演習準備に余念のない明華に絞られて泥のように眠っているであろう古参の下士官を起こすのは気が引けるがカウラの言うように非常事態だった。ちようどそこに外から帰ってきた菰田の姿が見えた。

「おう、神前。また……」

嫌らしい菰田の目だがそんなことを気にしてられる状況では無かった。

「先輩！ 大変です！ ナンバルゲニア中尉がグリーンを連れてどこかに消えちゃったんです！」

すぐに菰田の顔色が変わる。管理部の幹部としてグリーの飼育に反対していた菰田。その予想していた最悪の事態。

「おい、ベルガー少佐は食堂か？ 分かった。すぐに放送を流して寮に残っている連中を集める。お前はシュペルター中尉の部屋に行け」

「え？ でも放送を……」

誠の口答えに菰田は呆れたような表情を浮かべた。

「あの人があるもんで起きるか！ 鍵は掛かってないはずだからそのまま飛び込んでひっぱたいて起こせ！ 俺が許可する」

それだけ言うと菰田はそのまま寮の廊下を駆け出していった。

取り残された誠は仕方なく階段をのぼりはじめた。

三階の一番奥の部屋。古参の下士官ばかりが詰める三階は誠はあまり立ち入ることのないフロアーだった。二階まではいつも通りにのぼれるが、そこから先はどうにも気が進まない。しかし菰田に頼まれている以上、誠に躊躇うことは許されなかった。

出入りの激しい一二階と違って落ち着いた雰囲気の廊下を誠は静かに歩いた。

『緊急事態発生！ 各員食堂に集合！』

菰田の投げやりな叫びがフロアーに響くが三階のドアはどれも開く気配がない。多くは部隊では換えの効かない重要なポジションのこの階の住人が演習前に非番というのはあまり考えられないことだった。ただ法術関連のみの担当と言うことでほとんど誠達と出勤のローテーションが同じなヨハンは誠が謹慎中と言うこともあって今日も非番で一日寝ている予定だった。

「全く……よく寝ているんだらうな……」

「誰が寝ているだって？」

背中から浴びた低い声に誠は驚いて振り返った。

「おいおい、そんなに驚くなよ……トイレに行ってたところなんだが……緊急事態って？」

膨らんだ腹をさすりながら小さな眼鏡を直すヨハン。見ようによっては季節外れのサンタクロースのようにも見えるそのおおらかな表情に誠は息を整えるとそのまま言葉を吐き出した。

「ナンバルゲニア中尉が行方不明なんです。しかもあのグリーンを連れて……」

慌てて喋る誠の顔を不思議そうな表情で見つめるヨハン。彼もグリンの危険性は分かっている。それでもどこかしら余裕を感じるのはヨハンのふくよかな顔の作りのせいかそれとも彼の持ち前の性格なのか誠には今ひとつ判断をすることが出来ない。

ただヨハンはしばらく天井を見上げた後、そのまま奥の自分の部屋へと歩き始めた。

「中尉！ 緊急事態……」

「分かっているよ。慌てなさんな。とりあえず俺には当てがあるよ。うな気がしてね……」

そのまま奥の部屋の扉を開けて部屋に入っていくヨハンにくっついて誠はそのまま本棚が所狭しと並ぶヨハンの資質に入った。

「ちょっと待ってくれ」

机の引き出しを開けたヨハンはその中身を一つ一つ塵一つ無い机の上に並べていく。缶切り、爪切り、何に使うのか分からない計測機械。一つ一つゆっくりとヨハンが机の上に置いていく。

「中尉……」

「だからちょっと待って……あぁ、あった」

そう言うとヨハンは手帳のようなものを手に誠に向かって笑顔で振り返った。

「なんですか……写真？」

ヨハンの手に握られていたのは古風なアルバムだった。革製の茶色い装丁の厚めのアルバムをヨハンは丁寧に机の上に置くと誠に向けて開く。

「法術と言うのはどうしても心理的な影響を受けやすい力だからね……精神の源泉とでも言うべき故郷の風景。それにちょっと関心があつてね」

そこには山の光景が写っている。木々は明らかに誠の見たことのないような濃い緑色の針葉樹林。

「遼南の高山地帯の風景ですか？」

シヤムの出身地だという山々を思いながらの誠の言葉にヨハンは静かに頷いた。

「あのちびさんの出身地はどこもこう言う針葉樹林の森なんだ。しかも数百メートル標高が上がれば木々も次第に小さくなり、千メートルも登ればもう森林限界だ」

ヨハンがめくる写真に写る植物を見て次第に誠はヨハンの言おうとしていることの意味が分かった。

「ここら辺りの森はほとんどが落葉樹の森ですよ……そこにはナンバルゲニア中尉はいない……となると植生図を調べて一番近くの

針葉樹の森を捜せば……」

「まあ一番手っ取り早い方法はそれかな。まああのちっこいのはあまり休みを取らないから北国まで足を伸ばす必要も無いだろうし……まあ調べてみる価値はあるな」

ゆっくりとしたヨハンの言葉が終わるのを待たずにそのまま誠は部屋を飛び出した。階段を駆け下り、食堂前にたむろする寮の住人達を押し分けながら厳しい視線で周りを見回すアイシャの前に躍り出た。

「何してたのよ……これから手分けして……」

「それより場所を絞り込む方法が分かったんです！」

誠の言葉にアイシャが首をひねる。食堂の奥に据え付けられようとしている端末を調整していたカウラと菰田も珍しそうに確信ありげな誠を見つめていた。

「あの人の故郷に近い場所ですよ！」

「なに？ 西の戸川半島にでもいるの？」

「違います！ 針葉樹の森です。あの人の故郷は針葉樹の森が深い場所ですから。この付近で杉とかを大規模に植えている場所にあの人は居ます！」

一気にたたみ掛けた誠の言葉にアイシャはいぶかしげな視線を向けるだけだった。

「いや、試してみる価値はあるな」

端末の調整を菰田に押しつけてカウラは立ち上がるとポケットから車の鍵を取り出す。

「カウラちゃんまで……まあこの人数なら豊川中の森を探せるでしょうから。まあ私とカウラちゃんと誠ちゃんは……」

アイシャはそのまま視線を端末を起動させたばかりの菰田に向けた。

「ちょっと待ってくださいね……針葉樹ですか……飯岡村の辺りが地図の記号では針葉樹が多いですよ」

「それだわ……じゃあ後は菰田君が仕切ってちょうだい」

それだけ言うとアイシャはそのまま先頭に立って歩き出す。誠とカウラは少しばかり呆れながらその後続いた。

「カウラちゃんの車で行くわよ……それにしても要ちゃんは車をあげちゃって……本当にお嬢様は先々を読めないんだから」

冷やかな視線を要に向けるアイシャに要は鋭い視線を向ける。

「五月蠅えなあ……アタシはバイクが好きなの。あんな手間が掛かる四輪なんて乗れるか！ それにいろいろつきあいもあるんだから……」

「ごちゃごちゃ理屈を呟く要を無視してカウラはそのまま玄関で靴を履き替える。慌てて要も下駄箱の隣にあるロングブーツに手を伸ばした。

「それにしても……誠ちゃん。なんでそんな針葉樹なんて」

「あれです。シュペルター中尉が教えてくれたんですよ。彼は部隊員のメンタルまで気を使ってくれていますから」

誠の言葉に靴を履き替えていたカウラと要が顔を見合わせた。

「アイツが役に立つこともあるんだな……」

「伊達に太っていないな」

「酷いじゃないですか！ あの人だって隊員でしょ！」

「別に神前が怒ることじゃねえだろ？ 行くぞ」

要は自分だけブーツを素早く履くとそのまま立ち上がる。

「それにしても意外ね……シヤムちゃん。あれだけ信じてるって言うたのに」

「それぞれ不安や思うところがあるんだろっな」

静かに立ち上がりささやきあうアイシヤとカウラ。誠はそれを見ながらそのまま外に飛び出していった要の後を追った。道路はすでに頂点を通り過ぎた春の太陽の下、ぽかぽかとした空気に満たされていた。誠はその中を隣の駐車場に向けて歩く。

すでに赤いカウラのスポーツカーの隣には革ジャンを着た要がいらだたしげに頬を引きつらせながら誠達を睨み付けていた。

「おい！ あの馬鹿が人様に見つかる前に連れ戻すぞ！」

要の叫び声に誠は首をひねった。

「でもこの車にはグレゴリウスは乗りませんよ？」

誠の言葉に要は大きくため息をつく。

「あいつも空間転移で移動したんだ。帰るのもそれで行けば良いじゃないか！ ほら！ ちんたらするんじゃないやねえ！」

入り口付近で苦笑いを浮かべているカウラとアイシヤを呼びつける要。カウラは仕方なくドアの鍵を解除した。

「ほら、乗れ」

誠を無造作に車に押し込む要。強力な軍用義体の腕力の前には大柄な誠も何も出来ずに狭いスポーツカーの後部座席に体を折り曲げるようにして押し込まれる。

「ご愁傷様ね、誠ちゃん。でも急いだ方が良いのは確かだね」

助手席に乗り込んだアイシヤの表情が厳しくなる。カウラは運転席に乗り込むとすぐにエンジンを始動、車を急発進させて砂利の敷き詰められた駐車場から車を出した。

「おいおい、飛ばすなよ……」

勢いに任せて後輪を振り回すようにハンドルを切るカウラに思わず重い義体を誠にぶつけてよろけながら要が呟く。

「カウラちゃんは仲間思いだからねえ」

狭い路地をかつ飛ばす様に若干はらはらした表情を浮かべながらなだめるように話すアイシャの言葉にそれまで無表情だったカウラの口元が緩んだ。

「我々戦うために作られた人間の数少ない美德が仲間を思う気持ちだ……これは私も少しは自信がある」

「いい言葉だねえ……仲間を思いやるか。アタシはアイツが連れてくるデカ物がどんな騒動を起こしてアタシ等に迷惑かけるかしか考えてなかったけどねえ」

「要ちゃんも……素直じゃないんだから」

思わず振り向いて誠にウィンクするアイシャ。

カウラはそのまま車を大通りに飛び出させる。強引な割り込み。誠もこんな荒い運転をするカウラは初めてだった。そのまま制限速度を軽く超えて郊外に向けてスポーツカーはひた走る。

「この前の件で警邏の巡回時間を聞いという正解だねえ……これな

ら一発免停間違いないだぜ」

苦虫をかみつぶした表情の要だが言葉の色は痛快極まりないと言つ時のそれだった。誠はただ呆然としながらあつという間に街の半分を通過したことを知らせる市立商業の校舎を見つめていた。

「あの馬鹿のことだ……きっと見晴らしのきく高いところにいるぜ……馬鹿と煙はなんとやら……上から見えるってことは当然したからも見えるわけだ」

「今の時期なら農作業とかは無いかも知れないけど……あまり放置しているとまずいのは確かね」

要の言葉にアイシャはジャンバーのポケットから携帯端末を取り出す。要が目をつぶっているのは脳を直接ネットとリンクさせているから。誠は何も出来ずに通り過ぎていく景色を眺めるだけ。

『本部から各移動！ 本部から各移動！』

「いつから本部になったんだ！ キモオタ！」

軽快に台詞を決めてみたらしい菰田の通信に要が叫びを上げる。思わずアイシャと誠は顔を見合わせて苦笑いを浮かべた。

「何か搦んだのか？」

運転しながらのカウラの言葉にアイシャの端末の中で冷や汗を浮かべている菰田がようやく立ち直って口元を引き締めて台詞を吐き出し始めた。

『ええ……まあ飯岡村の都道123号線の西字天神下を通過したドライブーから駐在所に何か大きな動物が尾根を歩いていたらって言う通報がありました……』

「尾根を散歩だ？ あの馬鹿！ 何考えてんだ？ 菰田、駐在が出るのにどれだけかかる？」

要の渋い表情に今度は菰田が満面の笑みを浮かべた。

『備品管理の村田がちょうどあそこの出身で、今日は実家にいるもんですから……』

「何でも良い！ 適当なことを言って駐在を部落から出すな！ 良いか？ 一歩も出すなよ！ 出したら……」

血相を変える要にすぐに菰田の自信はしぼんで跡形もなくなる。

『分かりました！ なんとか足止めします……だから宜しく頼みますよ！』

やけになったような叫び声と共に菰田は通信を切った。

「さっきまで警察の本部気取りだったのに……」

クスクス笑うアイシャを見ながらにんまりとしてそのまま腕を組んで座席にもたれかかる要。ただ誠はその周りの景色の早く変わる様に緊張を続けていた。

「さっき警邏隊の状況は把握していると言いましたけど……白バイが流していたらどうするんです？」

おそるおそる呟く誠に要は満面の笑みを浮かべる。

「ああ、白バイはこの先にはいねえよ。南陽峠で族が集会を開いているという連絡が入っているはずだからねえ……忙しいんだろ」

「要ちゃん。警察無線に割り込んで嘘の情報を流したわね……」

呆れるアイシャだがカウラは満足げにアクセルを踏み込む。すでに市街地は過ぎて左右の景色は目の前の東都の西に広がる山脈の足下の観光客目当ての果樹園に変わっている。

「あの馬鹿……捕まえたらただじゃおかねえ！」

「心配したり怒ったり……本当に要ちゃんは忙しいわねえ」

のんびり構えているアイシャだが誠が見る限りその表情は硬い。

誠も聞かされてはいるがシャムは遼南内戦でのエースとして熾烈な

戦場を生き抜いたタフな心臓の持ち主である。実業団の試合の際にも常に明るく元気で強豪菱川重工豊川相手にも打ち込まれる誠にも明るく声をかけてくれる気さくな性格である。

そんなシャムがこれだけ周りに迷惑をかけることをやるほど追い詰められている。ある意味意外に思えた。

『信じているから』

周りが相棒の吉田の指名手配の話を振ってもその言葉と笑顔で返してきた元気なシャムの逃避行。誰もがあまりに突然で意外に思っているのは誠も感じていた。

「でも……なんでこんなことをしたんですかね……」

「知るか！」

誠の言葉が出たとたんに要は叫んでそのまま狸寝入り始める。

「吉田少佐の件とは無関係とは思えないけど……あの娘が突然居なくなるなんて……それ以外に何かあったとしか思えないわね」

アイシャの言葉にカウラも静かに頷いた。

ギアが下げられ、エンジン音が激しく変わる。道は緩やかに登りはじめた。一応国道だというのに道も左右の歩道が消えてすっかり山道という感じに変わっている。

「でも……吉田少佐とシャムちゃん……どんな関係なのかしら？」

突然のアイシャの問題提起に静かに要が目を開く。

「男女関係って訳じゃ無いよな……吉田はそれなりに名の知れた傭兵だ。甘い戦友としての友情なんてもんでも無いだろうしな……」

要の言葉に誠も静かに頷きながら目の前に見える白く雪を湛えた山脈を臨んだ。

「次の交差点を右だ」

流れていく景色を薄目を開けて眺めていたのか。要がぼそりと呟いた。

「便利ね……人間ナビ」

「殺すぞ」

冷やかすアイシヤに殺気を向ける要。誠はただ代わり映えのしない冬枯れの森の景色を見ながらそれを瞬時に判断する要に感心していた。

「山道になるな……路面は大丈夫か？」

「先週はこの辺も雪だったらしいからな。まあ速度は落としておいた方が良さな」

要のアドバイスにカウラはギアをさらに落としてそのまま対向車の居ない交差点を大きく右にハンドルを切る。後輪を空転させながら爆走するスポーツカー。誠はカウラのテクニクを信じて木々の根元に雪の残る山道の光景を眺めていた。

「でも……こんなに寒いところに来るなんて……」

「あの餓鬼の故郷はもっと寒いんだ。平気なんだろ」

それとないアイシヤの心配もまるでどうでも良いことのように要は切って捨てると窓の外にそのタレ目を向ける。森の奥深くまで見通せるのは落葉樹の葉のない木々で覆われた森だからこそ。その森の奥深くは根雪となった雪が視界の果てまで続いていた。

「こんな景色……コロニー育ちだからわくわくするわ」

「そうか？ 写真や映像で腐るほど見て飽き飽きしてたところだ」

「そうね、要ちゃんならそうかも。その重い義体じゃあ雪の中で動き回るのは難しそうだし……それにスキーとかもしないんでしょ？」

「

「オメエもしねえじゃないか」

「出来ないのとやらないのはまるで意味が違うわよ」

どうでも良いことと言い争いをする二人を見ながら誠は少しばかり安心していった。シャムの動揺はそれとして他の面々までいつもの調子は失ってはいない。これならシャムを笑顔で迎えられる。そう思うとなんだか誠はうれしくなっていた。

「神前……何か良いことでもあったのか？」

バックミラーに誠の笑顔が写っていたようでカウラが笑顔で呟く。

「うちはみんなで一つのチームなんだなって」

「みんなで一つ？ よしてくれよ。こんな腐女子と一緒にされたら迷惑だ」

「私は腐女子じゃありません！」

「いいんだよ！ そんな細かいカテゴリー分けは！」

アイシャと要のやりとりはあくまでいつも通りだった。上り坂が終わり、急に道が下り始める。

「まもなくだな」

自分に言い聞かせるようなカウラの静かな声に気づいて周りを見た。誠の目にこれまでの明るい森とは違う暗い森、針葉樹の濃い緑色が飛び込んできた。

「菰田の奴……うまくやってくれてるかねえ……」

「何してるの？」

それとなく振り返るアイシャの目に革ジャンの下のホルスターから愛用の拳銃XD40を取り出す要の姿があった。

「あれだ、相手は猛獣だからな……40S&Wじゃ力不足かねえ……カウラ！ 後ろのトランクにショットガン積んであったろ！」

「お前は何がしたいんだ……あれは下ろした。クバルカ実働隊長からの指示だ」

苦笑いとともに答えるカウラに要が渋い表情をする。その姿があまりに滑稽に見えた誠が吹き出しそうになるが、要の一睨みでそのままおらずと視線を外に向けた。

車の速度は制限速度に落ちていた。それもそのはず、急激なクラックが次々と行く手に現われ、制限速度でも十分後輪は横滑りをするほどの状況だった。

「カウラちゃん……要ちゃんじゃないんだからもっと穏やかに行きましょーよ」

「私は穏やかに運転しているつもりだ。ちゃんとメーターを見る。制限速度は守っているだろ？」

「確かにそうなんだけどねえ……もう、私の周りはどうしてこう言う面々ばかりなのかしら……誠ちゃんの苦労も分かるわ」

「オメエが一番苦労させているように見えるがねえ……」

自分をなだめすかすように愚痴るアイシャに一言入れると要の表情が蔽しくなった。

「おい、レンタカーが一台……この先一キロだ。連絡があつた西字天神下に停まってやがる……あの馬鹿！ 見つかりやがった！」

おそらく自動車のGPSシステムに介入しているからだろう。瞬時にそう言った要にさすがのアイシャの表情も硬くなった。

「レンタカー……ハイカーさんかなにかだとやっかいだわね」

そのままアイシャは親指の爪を噛みながら続くカーブの先を睨み付けている。誠は部隊配属直後の事件が頭をよぎった。

「あのー……法術反応をたどってどこかの組織が動いているとか……」

心配そうな顔の誠を瞬間あきれ果てたと言う顔で要が見つめる。そして彼女は大きくため息をついた後軽く誠の左肩に手を置いた。

「あのなあ……どこの世界にレンタカーで巨大な熊の護衛付きの法術師を拉致しようって馬鹿がいるんだ？ それもこの業界じゃあ使い手で知られた遼南帝国青銅騎士团团長のナンバルゲニア・シヤムロード中尉だぞ？」

「でも暴力団とかの素人連中に実行を依頼しているとか……」

あまりにも屈辱的だったのでムキになって叫ぶ誠に今度は同じように呆れた顔のアイシャが助手席から顔を覗かせる。

「そんな時間があったと思う？ 私達だってさっきまで知らなかった話じゃないの」

自分の珍しくした意思表示を完膚無きまでに叩きつぶされてぐんにやりと俯く誠。カウラはバッククミラー越しにその様子を見ながらさすがに同情を感じているのか苦笑を浮かべている。

「次のカーブを曲がれば分かることだ……それと西園寺。レンタカーの会社のデータベースにハッキングして掴んだ情報を全部話せ」
素早くハンドルを切りながらカウラが呟いた。その言葉の直後に針葉樹の深い森が一瞬で途切れて大きな丸裸にされた丘が目飛び込んでくる。

「車種は小型のファミリーカー。四駆じゃ無いからそれほど本格的な装備の奴じゃ無いと思うけどなあ……」

今度は開き直ったように銃をホルスターから抜いてスライドを引く。

「要ちゃん……穩便に行きましょうね」

さすがのアイシャもこれはまずいとばかりに苦笑いを浮かべるが無情にも山の下に置かれた水色のハッチバックの車影は次第に近づいてくる。

「人気がないな……それにしても肝心のグリーンは？」

「見えるわよ……山の頂点」

アイシャが指さす先に小指の先ほどの茶色い塊がじっとしているのが誠にも見えた。

「本当に馬鹿だな……丸見えだぞ」

「菰田が交通規制の偽情報を流している……この車でも確認できるからな」

「冒険するわね……菰田君も。うちのカラーに染まってきてるってことかしら」

他人事のように呟くアイシャを一瞥した後、カウラは静かに枯れ草だらけの路肩に車を停めた。目の前には人気のない空色の小型車。どうにもハイキングなどの客が好みそうなのはやりの新車だった。

「馬鹿！ 早く降りろ！」

「椅子を蹴らないでよ！」

暴れる要に悲鳴を上げながら助手席からアイシャが転がり出る。素早く要は銃を構えて飛び出すとそのまま背の高い枯れ草の間の獣道の中に消えていった。

「追わないと！ 要ちゃんは撃つわよ」

「軍用義体と追いかけてっこか？ 無茶を言う」

苦笑いを浮かべてカウラはゆったりと構えつつエンジンを止めてからドアを開けた。高原の冷たい空気が車内に流れ込んできて誠は厚着をしてこなかったことを後悔した。

「それにしても冷えるわね……」

アイシャも運を天に任せたというようにゆっくりとそのまま要の消えていった獣道に入り込む。

「荷物は無いか……おそらく女性だな……しかも一人」

レンタカーの運転席を覗き込んでいるカウラ。確かに見る限り荷物のようなものは無く、運転席側のホルダーにだけジュースの空き缶が刺さっているのが誠に確認できた。

「カウラちゃん！ 早く！」

叫ぶアイシャの声に思わず誠に向き直り苦笑いを浮かべるとそのままカウラは空色のレンタカーから離れて獣道へと踏み込んでいく。誠もまた仕方なくその後続いた。

草むらに入って誠はそこが切り開かれた山林であることに気づいた。この東都の北西に広がる森は落葉樹の森。針葉樹が広がっているのは要するに林業の為に植えられたものなのだろう。

「急いで！」

すでに斜面を百メートルほど先に登っているアイシャが振り返って叫ぶ。先に行くカウラは誠に苦笑いを浮かべるとそのまま確かな足取りで滑りそうな霜でぬかるむ獣道を進む。

「西園寺がいくら馬鹿でもそう簡単には撃たないだろうな」

自分に言い聞かせるように呟くカウラを見てただ誠もそのことを祈りながら正面の丘を見上げた。相変わらずぽつんと茶色い塊が視線の中央でうごめいている。

「これは確かになんだか確認したくもなりますよねえ……：：：：：双眼鏡でもあれば熊だと分かって警察に通報されますよ」

「すでにされたから私達はここにいるんだろ？ まあいい、とにかく穩便に済ませることが一番だ」

カウラが登る速度を速める。誠はそれに息を切らせながら続いた。

一瞬、丘の上に続く獣道の全貌があらわになる地点にたどり着いた。すでに斜面をほとんど登り切って丘にたどり着こうとしているところに黒い小さな塊が見える。

「西園寺さん……あんなところまで……」

「まあそれが生身とサイボーグの差だ。それくらいの違いがないと採算が取れないだろ？」

一瞬だけ呆れたような表情で振り返ったカウラだが、すぐに表情を引き締めて斜面を登りはじめる。先ほどまで獣道の奥にちらちら見えていたアイシャの姿ももう消えている。

「早く行かないと……」

焦った誠の右足が霜で緩んだ斜面をつかみ損ねた。もんどり打って顔面から泥のような獣道の土にまみれる誠。

「何やってるんだ？」

「はあ……転んじやいました」

「見れば分かる」

それだけ言うとそのまま誠を置いて歩き出すカウラ。誠は額に付いた泥をたたき落としながら今度は慎重な足取りで斜面を登りはじめた。

「早く！」

遠くで叫ぶアイシャの声がこだまする。先ほど要を見た地点くらいにはアイシャはすでに到着しているらしい。

「「じりゃあ……急がないと」

自分自身に言い聞かせるようにして誠はぬかるむ山道をただひたすらに上へと登っていった。

右足、左足。次々と滑る冬の軟弱な泥道。ただ夢中で誠は登り続けた。ただその間願うことは要の無慮な発砲音が響かないことだけだった。次第に意識が薄くなり、足を蹴る動作だけにすべての神経が集中するようになったときに不意に傾斜が緩くなり始めた。

「終わった……」

誠はようやく泥ばかりで覆われていた視界を何とか上に持ち上げた。そこには一本だけ残っている大きな杉の木の陰で息を潜めて先の様子をつかがうアイシャとカウラの姿があった。

「ああ、すいません……ようやくたどり着きました……」

「しっ！」

唇に人差し指を当てて沈黙するように促すアイシャ。その隣のカウラの視線の先を誠は静かに目で追った。

草むらの影で銃を構えて身を潜める要の後ろ姿が見える。そしてその向こうの枯れ草の穂の隙間からは茶色いコンロンオオヒグマの頭がちらちらと見て取れた。

「間に合っ たんですね……」

「間に合っ たかどうかはこれから分かることだ」

カウラの感情を押し殺したような声にそれまでの誠の到着した喜びのようなものは瞬時に吹き飛んだ。熊の周りを草の隙間から覗いていた要がそのまま銃を構えて飛び出していく。

「カウラちゃん止めないと！」

「まったく世話が焼ける」

苦虫をかみつぶした表情のカウラが覚悟を決めて杉の木陰から飛び出して要の姿を追う。要はすぐに距離を詰めたようでは先ほどのまでの場所に人の気配は無い。

「キヤア！」

明らかにシャムとは違う女性の叫び声が熊の頭の見える辺りで響く。誠もその尋常ならざる驚きの声に残った力を振り絞って枯れ草の中を駆け抜けた。草のついたてを抜けて断崖絶壁にたどり着いた誠の目の前にただ銃を構えて動かないで居る要の背中が目に入った。

「なんでデメエがここに居るんだ？」

誠達がたどり着いてもしばらくじっとしていた要がようやく口を開いた。その視線の先、手にしたバスケットからサンドイッチを取り出して頬張っているシャムの隣には技術部所属の女性士官、レベッカ・シン普森中尉が腰を抜かして倒れていた。

「その……あの……」

「だからなんでデメエが居るんだよ！」

いつまで経つても驚きの中から抜け出せずにおたおたしているレベツカに要のかんしゃく玉が炸裂した。カウラが要の銃を掲げた手に静かに手を添えてその銃を下ろさせる間もレベツカはただずり落ちた眼鏡を直すのとなんとか先ほどまで座っていた石の上に座り直すのが精一杯で要の質問に答える余裕は無かった。

「レベツカさん……シラムちゃんから頼まれたんでしょ？ 何か食べるものを持ってきてくれて」

にこやかな表情を作りつつアイシャがゆっくりとレベツカに歩み寄る。ようやく現われた自分の理解者を見つけたというようにレベツカは引きつった笑みを浮かべつつおずおずと頷いた。

「あ！ でも連絡はさっき入れましたよ……班長も本当に困った顔してましたけど……」

自分の不始末に謝るレベツカだが、その島田を指す『班長』という言葉を聞くとアイシャと要は顔を見合わせてにんまりと笑った。

「おう、確かに島田には連絡は行ってるみてえだなあ……通信記録もある。島田も……すぐに本部とやらに連絡はしているな」

脳内の端末を確認して要が呟く。アイシャはにこやかな笑みをレベツカに向ける。レベツカは先ほどの慌てた表情からようやく落ち着いてきたようであるで他人事のようにこの顛末を眺めているシャムの隣で大きなため息をついた。

アイシャはジャンバーから携帯端末を取り出すと笑顔のまま菰田に連絡を入れた。

『あ！』

茶を啜っていた菰田の顔が誠が覗き込んだアイシャの端末の中で次第に青ざめていく。

「菰田ちゃん……いいえ、本部長とでも呼んだ方が良かったかしら……」

『シンプソン中尉のことでしたら……忘れてました！ 済みません！』

「ごたごた言うだけ無駄だと諦めた菰田は素早く頭を下げてみせる。ただ相手はアイシャである。にこやかな笑みを浮かべながらもその表情は怒りで青ざめているように誠には見えた。」

「良いわ……後で折檻だから」

一言言い残してアイシャが通信を切る。その様子に満足げに頷く要一方、カウラは最後のサンドイッチを飲み下したシャムのところへと足を向けていた。

「ずいぶんと悠長な態度だな」

「別に悠長なんかじゃ無いよ」

それまでののんびりとした表情がすぐにシャムから消えた。そのまま彼女は断崖絶壁の向こうに目をやる。しばらく続く針葉樹の森。それも限りがありそのまま落葉樹の冬枯れに飲み込まれていくのが見える。

「思い出でも探しに来たか？」

「要ちゃんは……まあそんなところかな」

冷やかす要に苦笑いを浮かべるシャム。その姿はどう見ても小学校高学年という感じだが、浮かんでいる憂いの表情には年輪のようなものが感じられるように誠には見えた。

「吉田少佐の失踪……それなりにショックだったんだな」

カウラの言葉にしばらく彼女を見つめた後、静かにシャムは頷いた。

「単純にショックという訳じゃ無いんだけど……なんだかせっかく手に入れた何かをなくしちゃったような感じというか……ああ！なんだか説明できなくてわかんなくなっちゃっよ！」

自分の語彙の少なさに叫んで気を落ち着けようとするシャム。そんな主を静かに心配そうにグレゴリウスは見下ろしていた。

「シヨックならシヨックでいいじゃないか。心配なら私達に何か言えばいい……」

緑色の髪を崖を吹き上げてくる風になびかせながらそつとカウラはその手をシャムの頬に寄せた。シャムは静かに俯く。ただ強い風だけが舞っていた。

「シヨックというか……俊平が居なくなってからなんだか思い出しそうなことがあって……それでそれを思い出すとなんだか悪いことが起きそうで……」

「鉄火場の思い出か……確かにあれは悪夢だな」

うんざりした表情の要がタバコを啜えながら呟いた。静かにそのままジッポで火を付けようとするが強い風に煽られてなかなか火が付く様子がない。それでもいつもなら苛立って叫ぶ要も落ち着いた様子で静かに試行錯誤を繰り返している。

「そんな最近の話じゃ無いんだ……俊平と会う前……それ以前に明華や隊長と会う前……うっん。もつと前だよ、オトウやグンダリと会う前……うわ！ 頭がウ二になる！」

頭を抱えて俯くシャム。カウラは何も出来ずにただシャムの隣で立ち尽くしている。

「ナンバルゲニアの名前を継ぐ前か……遼南第一王朝壊滅以前ねえ……それこそ吉田や叔父貴に聞くしかないな」

ようやくタバコに火を付けることが出来た要のつばやきに誠はただしばらく黙り込んで思いを巡らせていた。

ムジャンタ・カオラに始まった遼南王朝は廢帝ハドの乱行などの混乱はあったもののその血脈は三百年あまりにわたって延々と続くことになった。有力諸侯や藩鎮達が外戚としてのさばり、傀儡に過ぎない皇帝ばかりが続いたとはいえ、王朝が揺らぐことは彼等にも損害をもたらすことになり、また東和や胡州、遼北、西モスレムなどの近隣諸国も大国の崩壊に伴う難民の流出を恐れて形ばかりの王朝は長々と続くことになった。

そんな王朝に現われた寡婦帝ムジャンタ・ラスバ。兼州侯カグラ―又バが送り込んだ操り人形の二人の子持ちの女帝は諸侯達の迷惑を超えて傾いた遼南を再建し始めていった。太祖カオラの作った遼南人の海外コネクションを再生し、細心かつ大胆な外交施策は遼州のお荷物と呼ばれた遼南を確かに再生させていった。

さらに彼女が帝位に就く前に古代遼州文明の研究者であったことが遼南の再建へと導く力となった。鉄器さえも封印した遼州文明がかつては遣伝子工学や素材加工技術、反物質エンジン搭載の戦闘兵器や宇宙戦艦を建造していたことは誠も教科書で習った程度には知っていた。その技術の研究者であるラスバは多くの先遼南文明の再生に取り組み、独自の技術をそこから得て海外に売りつけて王朝の財源として次第に朝廷の力はそれまでぶら下がってきた諸侯達を圧倒し始めていった。

ただしそのような独断的な政策が有力諸侯や軍部、他国に歓迎されるはずもなかった。母に暗愚と烙印を押されて東宮を廢されたムジャンタ・ムスガは次期皇帝と決められた息子のラスコーを追い落と

すべく、野心家である近衛軍司令官ガルシア・ゴンザレス大佐と結託。彼等の動向に注視していた胡州宰相西園寺重基は彼等の協力を取り付けて東モスレムのイスラム教徒暴動鎮圧部隊の視察をしていたラスバ爆殺した。静養中の北兼御所にあったラスコーだが、近衛軍が央都を制圧したために静養中の北兼御所を動くことが出来ず、央都のムスガと北兼のラスコーという二人の皇帝が並立する事態へと発展した。

有能に過ぎる皇帝を失った遼南の没落はあつけないものだった。東海の花山院、南都のブルゴーニユなどの有力諸侯は胡州の工作を受けてあつさり央都側に寝返った。頼りの北天軍閥は遼州北部の利権を狙った遼北の侵攻によりあつさりと崩壊。ラスバ崩御から四年後、北兼御所を捨ててカグラーヌバー族が守る兼南基地に籠城した遼南朝廷軍は央都軍の圧倒的な物量の前に全滅。ただラスコー一人は家臣の必死の抵抗で難を逃れて東和へと亡命を余儀なくされこれを持って遼南第一王朝は滅亡することになる。

そんな遼南王朝滅亡の際に、シャムは記憶を失って森をさまよっていた彼女を拾った義父ナンバルゲニア・アサドは帝国騎士団に所属していた経歴があつたため、彼女の村は央都軍の襲撃を受け、彼女以外は老若男女問わず皆殺しにされたと言う話を誠も耳にしていた。

そんな悲しすぎる過去。それでもシヤムは笑顔を絶やすことなくいつも隊でグレゴリウスと一緒に元気に走り回っていた。忘れるのが人間の才能の一つならその才を遺憾なく生かしている人物。誠はシヤムのことをそう思っていた。

しかし、目の前のシヤムはそんな悲劇よりも何か大きな忘れ物を捜している。誠にはそんな風に思えた。たぶんそのことに気づくきっかけになっただのが吉田の失踪なのだろう。

「今分からないのなら……こんなことしか私には言えないが、気にしない方が良い」

言葉を選びながらのカウラのつぶやきにシヤムは静かに頷く。その視線の先には東都の北に広がる山脈地帯が見えている。シヤムが望むような針葉樹の森はその山脈の僅かに上部に広がるのみ。それ以外は落葉樹の森が寒々しく広がっているのが見えるだけだった。

「ああ、シヤム。帰りは……」

「うん、跳べるよ。レベツカも心配しなくて良いから」

面倒見の良い言葉に少し涙目のレベツカが頷く。グレゴリウスは相変わらず心配そうに主人の落ちたままの肩を眺めていた。

「でもね……もう少しで思い出せそうなんだ。なんであの森にあたしが一人で居たか……それ以前にあたしが何者なのか……」

「過去か。知っていい話なら知るのも悪くないな」

「何よ、まるで知らない方が良いつてことを要ちゃん知ってるみたいじゃないの」

アイシャの冷やかすような言葉にタバコを啜えた要は下卑た笑みを浮かべた後、静かに煙を口から吐き出す。吐き出された煙はそのまま強い風に流され視界から消え去る。

「いい話じゃ無いと思うよ……でも一度は思い出したいんだ……なんて言えば良いのかな……喉に小骨がつかえたみたいな感じ……それともちよつと違うな」

「無理に思い出す必要は無いだろ。四日後には演習に出るために新港に行かなければならないんだ。まずは予定が優先だ」

カウラの冷淡な言葉にレベツカが少しばかりむっとしたようにエメルドグリーンの瞳でシャムを見下ろすカウラを睨み付けた。カウラの表情はいつものように押し殺したというように感情の起伏の見えない顔をしている。

「そう言えば明日で謹慎も解けますよね。明日からは……」

「あの一、誠ちゃん。明日はあたしが出張の準備のためにお休みを取っているんだけど……」

シャムの一言に自分の間の悪さを実感する誠。冷やかにそれを笑いながらタバコをもみ消す要。

「誠ちゃんらしいわね……じゃあ撤回しましょう」

一言アイシャが言ったのを聞くと素早くカウラは元の獣道に足を向けた。

「ちゃんと帰れよ！」

革ジャンのポケットに手を突っ込んだままカウラに続いて走っていく要の言葉に、シャムは力ない笑みを浮かべた。そんなシャムの頬を悲しげな表情のグレゴリウスが優しく舐めているのが誠の目に映っていた。

「つつ訳だから。シヤムのことは心配入らないよ……たぶん」

『いざというときには正直になるんですね』

モニターの中の精悍なひげ面に笑みが浮かぶ。遼北と西モスレムの国境ライン上。現在は同盟機構軍との名称の東和、胡州、大麗、ゲルパルトの各軍が増派されて両軍の戦力引き離し作戦に従事している最中だった。

そんな中で暇を見つけて前の所属の所属長である嵯峨に連絡を入れるというまめなところがこのアブドウル・シャー・シン大尉の良さでもあり、その連絡の入った時間が深夜の十時を回っているというところが少し抜けたところでもあった。

「なあに、世の中大丈夫なんて言えることはそう無いものさ。俺だって明日はどうなるか……」

『身から出た錆だと言ってみせるんですか』

「まったく昔から口の減らない奴だ。まあそんなところだが……良いかい？ それなりに忙しいんだろ？」

嵯峨の言葉に思わず背後を振り向くシン。軽く誰かに手を振るとすぐにモニターに目を向ける。

『まあ私の仕事は前線維持ですから……これからは施設運営や兵站部門の皆さんのお仕事ですよ。これからは撤収準備と今回の事件で

キャンセルになった訓練メニューの組み直しが当面の仕事です』

「いい話だな。俺等みたいな物騒な連中は訓練のことだけ考えたられば世の中はうまくいつているってことだ。それが一番だ」

そう言うと嵯峨は慣れた手つきでタバコを取り出し素早く安いライターで火を付ける。隊長室に漂っている煙の中にさらに濃い煙が流れ込んで渦を巻く様を呆然と眺める。

『ああ、それと……ご配慮いただきありがとうございます』

これまでの自信に満ちた鋭いシンの目つきが穏やかなものに変わるのを横目で見ながら嵯峨はにやりと笑った。

「何が？」

『一族の身柄の安全を国王に直訴していただいたそうで……それまではデモ隊が十重二十重に取り巻いて投石だの火炎瓶を投げるだの騒然としていたようなんですが……』

「ああ、あれか？」

明らかにシンがいつかはその話を持ち出すのを分かっていると言っような表情で嵯峨は付けたばかりのタバコの火をもみ消した。

「俺はそう言うのが許せない質でさ……親類に国家の敵が居るとか言っって騒ぎ出す奴……お前は何様なんだよっつて突っ込みを入れたくなるんだよ。まあ俺の場合は一太刀袈裟懸けにして終わりっつて言う方法が好きなんだけどね」

『奥様のことですね……』

シンの顔が安堵から同情へと色を変える。その表情を見るのがあまりにつらいというように嵯峨は隊長の椅子を回して画面に背を向けた。

嵯峨の妻エリーゼはゲルパルト貴族の息女として当時西園寺家の部屋住みの三男坊として陸軍大学の学生をしていた嵯峨の元へと嫁いできた。予科の同窓である赤松忠満や安東貞盛、そして当時は海軍兵学校の学生にして歌人として知られていた斎藤一学と言った悪友達と遊び回る自分がどれほど妻に心配をかけたかは嵯峨は娘の顔を見ると時々思い出されることがあった。

陸軍大学を首席で出た嵯峨だが、本来なら陸軍省の本庁勤めからエリートコースを走るところだったが、彼の義父である西園寺重基の存在が彼の初の配属先を東和共和国大使館付き二等武官と言うドリップアウトしたコースへと導くことになった。

遼南中興の祖ラスバ暗殺を仕掛けるほどの野心家で知られた重基だが、その後の国内情勢がさらなる拡大戦争を欲求し始めた段階で政界を去り、その潮流に乗って民衆を煽り立てる新進政治家達への苦言を呟く日々を綴っていた。しかしコロニー国家として成立し、コロニー建設者である領邦領主に絶大な権限が与えられる胡州において、摂州・泉州二州を領する四大公家筆頭の当主の嫌みは常に公的な側面を持つものだった。

日々、自称憂国の士が懐に短刀を携えて来訪しては警備の警官に逮捕される日々。嵯峨の兄で次期当主として外務官僚をしていた義基も孤立主義に走るゲルパルトと共に反地球同盟を結成した政府を皮肉る父の発言をきっかけとして出勤停止の処分を受けて謹慎の身の上にあった。そんな中、当時は西園寺新三郎と名乗っていた嵯峨は何も知らずに意気揚々と新妻を連れて東都へと旅だった。

東都での彼の任務は東和の胡州・ゲルパルト陣営への引き込みの可能性の調査というものだった。絶対中立主義の東和にそんな可能性が無い事は分かり切っている無駄な仕事。彼は大使館に出勤するのはそこそこに趣味の剣術や書画骨董の蒐集に明け暮れ、エリーゼもまた自由に闊達な東和の雰囲気を楽しんでいた。

やがて双子の娘、茜と楓が生まれ、西園寺家預かりとなっていた絶家となった四大公家の一つ嵯峨家を再興して惟基と名乗り変えた頃、時代は大きく動き始めた。

胡州陣営はさらに嵯峨の仇敵とも言える父、バスバ帝を説得して遼南を自陣営に加えるとそのまま地球諸国に戦線を布告、第二次遼州

大戦が始まる。東和の中立を変えられなかった責。元から不可能だったとはいえ、陸軍省本庁の椅子は完全に遠いものとなるには十分な出来事だった。開戦記念とも言える昇進で外務中尉から憲兵大尉に配置換えをされた嵯峨はそのまま自国の治安を維持することもままならない遼南へと転属になった。

エリーゼと娘二人はそのまま東都から民間機で胡州、帝都の四条畷港へと帰路を取った。地球、特に遼州での多くの利権を握るアメリカとの対立を避けようと東和は不要不急の胡州、ゲルパルト、遼南の軍人軍属とその家族の帰国を勧告していたので混雑する中、被官も連れずに三人は雑踏の中の四条畷港のターミナルを徘徊していた。そこに現われた片足義足の老人。西園寺重基の姿を見て手を振ったエリーゼの隣にあった鉢植えのゴムの木が遠隔操作の爆弾で爆発した。

とっさに娘をかばったエリーゼは全身に爆弾の破片を受け、ほぼ即死という有様だった。重基はただ額にかすり傷を負った程度だったが、次男義基の娘である要が全身の九割を失うテロで右足を失い、今度は三男の嫁を自分を狙ったテロで失ったショックでそのまま死の床につくことになった。

「なあに……俺だって遼南の公安憲兵時代はレジスタンスの幹部をあぶり出すのに同じ手を使ったからな……意志が強いと自負している連中はいくら本人を追い詰めても無駄なもんだよ。そういうときは周りから攻める……お前さんの性格は俺は熟知しているつもりだからね」

『恐縮です』

照れ笑いを浮かべるシンに嵯峨はただ乾いた笑みを浮かべていた。

『それじゃあ無駄話もなんですから……それと吉田少佐に世話になったとお伝えください』

「俺も言いたいんだけどさ……今回の首脳説得の段階での民間ネットワークのダウンはタイミングがベストだったからな……と言っても本人が追われる身じゃあ礼も言えないか」

とぼけたような嵯峨の言葉に軽く敬礼するとシンはそのままいつものように唐突に通信を切った。

「さてと……まあ俺も近いうちに公安に出頭するか……あちらが向いてくるか……」

独り言を言いながらそのまま隊長の椅子に身を投げる嵯峨。上着代わりに羽織っているどてらの中のネクタイを持ち上げる。もうすでに二週間アパートには帰っていない。

「あと四日か……汚れてるなあ……」

そう言いながら静かにネクタイをどてらの中に滑り込ませると静かに目をつぶった。

「いい加減……のぞき見は止めてくれないかな」

人の気配のない隊長室に響く珍しく張りのある嵯峨の声。それに反応するかのように先ほど消えた隊長用の通信端末のモニターに電源が入った。

『のぞき見……確かにそうかも知れませんか』

静かに響く人工的な声。嵯峨はその相手が分かり切っているというようにただにやけたまま画面を見つめていた。

「まあ……仕事はちゃんとしてくれるからさ……ただ俺の迷惑になりそうなことなら事前に言ってくれりゃいいのにねえ。そんなに信用おけないかね」

『信用？ あなたが信用に足る人物かどうかはご自分が一番よく分かっているんじゃないですか？』

「違ういなあ……」

力なく笑う嵯峨。通信はつながっているのに画面は映らない端末にデータの着信を告げる音声は響く。

『俺が指名手配中に集めたデータです……お役に立てば……』

「菱川の御大将の正体ともくろみに関するデータと俺達が四日後に出かける演習先に浮いているあの物体に関するデータか？ じゃあいらねえなあ」

嵯峨の意外な反応に音声の主、吉田俊平は沈黙しなければならなくなつた。

「あれだろ？ 宇宙に浮いている1.5kmのあの巨大な物体。そ

してお前さんが手配されるきつかけとなつたインパルス砲の設計図……つながつた訳か……。そして菱川の旦那は俺達はその破壊に成功しようがしまいが丸儲けをする仕組み作りを完了している……。要はその裏付けと金のやりとりの通信記録つてところだろ？ どうせ証拠じゃ使えねえよ。見たつて自分がふがいなく感じるだけだ」

『察しが良いですね。俺が見込んだ皇帝陛下だ』

「察しが良いのは得じゃ無いよ……しなくても良い心配をするばかりだ。今回だつて何も知らずに移動砲台とこんにちはすればただパイロットとして暴れりゃいいんだから。おかげで今回は俺は来ると分かっている公安連中の接待なんて言う役になりそうだ」

卑屈な笑みを浮かべて机の上の埃を払う。司法機関の実力部隊の部隊長の隊長の机には似合わない積もつた鉄粉がばらばらと部屋のタイルの上に落ちる音が響いた。そのまましばらくの沈黙が暗い部屋の中に続く。そして再び人工的な音声が始まる。

『そうなる……あの物体の破壊は難しくなりますね。神前じゃあ最悪の事態を防ぐので精一杯でしょう』

「まあな。東和宇宙軍じゃもうすでにあれは無かつたことにするつもりらしいが……俺が作った訳じゃないし、壊してくれと頼まれた訳じゃ無いからな。あれの今の持ち主のアドルフ・ヒトラーファンクラブの連中の目的は阻止するがそこから先はテメエで処分しろつて言うのが俺の立場だ」

『でもそうなる……インパルス砲搭載艦を彼等……ルドルフ・カーンのシンパですが、彼等が回収することになりますよ？』

さすがに投げやりな上司に呆れたというように呟く人工音に嵯峨は満面の笑みを浮かべる。

「それこそ『そいつは俺の仕事じゃねえ』ってところだな……ああ、そう言えばあの砲台。連中は『フェンリル』とか呼んでるらしいぜ……北欧の神の体を半分食いちぎったでかい狼。インパルス砲の想定される最低出力で衛星軌道上から地球を撃つとスカンジナビア半島が半分消し飛ばらしいからねえ……言い得て妙だ」

『ただ……彼等が狙うのは地球ではなく……』

人工音の遮る声に嵯峨は頬杖をつきながら頷く。

「そんなのは馬鹿でも分かる。狙いは遼北と西モスレムの国境地帯。両者の核は現在は臨戦態勢を解除したばかりだ。突然の破壊が国境で起これば間違いなく地殻の奥の鉛のシェルターの中のミサイル基地からは佃煮にするほどの厄災があふれ出るわけだ……迷惑極まりない話だねえ……」

のんきに呟く嵯峨の言葉に人工音は再び沈黙した。

『口では他人事を気取るが……』

「本心なんだけど」

『あなたが本心を口にする？ その方が不自然だ』

吉田の言葉に嵯峨は満足げに頷くともみ消したタバコを取り上げる。そして丁寧に分先を元に戻してライターで火を付けた。

「それじゃあ俺が我等が騎士殿に期待していることもお見通しって訳だ」

『クバルカ中佐なら上手くやりますよ』

あわせたような言葉に嵯峨はがつくりと肩を落とす。

「ああ、アイツの期待は今回は07式だからねえ……ホーン・オブ・ルージユの出撃はねえよ」

『え？』

人工音のあげた突然の驚きの声に嵯峨は満足げに頷く。

「我等が騎士殿とはすなわち遼南青銅騎士団団長、ナンバルゲニア・シラムラード中尉のことだ。当然副団長も協力してくれますよね？」

当然のように笑みを浮かべる嵯峨。人工音は押し黙り沈黙が続く。

『あなたは……菱川と敵対しますか？ 協力関係を築きますか？』

主導権を握られまいと苦渋の決断を迫るように発せられる人工音。ただ苦々しげに嵯峨は臭い煙を肺に流し込む。

「それがお前さんの協力条件か……俺の答えはどっちとも言えない。つて奴だが……敵対できるほど俺の足下は盤石じゃねえし、無条件で協力するほどお人好しでも無い……そんな選択無意味だな」

あっさりと質問をかわされて再び吉田の言葉は止まった。嵯峨はただ人工音が響くのを待ちながらゆっくりとタバコをふかす。

『俺は……シャムに従いますよ……それが……』

「おっと！ 皆まで言うなよ。俺は野暮天にはなりたくねえから」

嵯峨はそれだけ言うと静かに端末の電源を落とした。

「これでこちらのカードは揃った……あとは俺にツキがあるかどうかだが……」

ちらりと部屋の脇を見る。並んでいる仏像、その一つ帝釈天の涼やかな目に嵯峨の瞳が引きつけられた。

「四日後は塀の中か……片付け……しようかねえ」

気が進まないというように眉をびくりとふるわせた後、嵯峨は隊長

の椅子から重い腰を持ち上げることになった。

「駄目です！ 本当に困ります！」

女子職員のがりつくの無視して安城秀美はかつての職場である東和国防軍保安部の部室を横切るように歩き続けた。周りで呆然と見守るのはかつての彼女の部下達。安城の強情さを知っている屈強な戦闘用のサイボーグ達は安城が同盟司法局に出向してから総務担当として配属になった小柄な女子職員がいくら騒いだところで安城を止められないことは分かっていたので黙ってその様子を眺めていた。

「昔の部下に挨拶するのがそんなに困ることなのかしら？」

一枚の明らかに他の扉とは違う防弾措置の施された頑丈な扉の前までたどり着いた安城の一言にただ泣きそうな顔で女子職員は頭を下げる。

「大丈夫よ。私は岡田捜査官のお招きでここに居るんだから……嘘だと思っなら……ほら……」

安城の言葉と共に重そうな黒い扉が触れることもなく開いた。女子職員はただあつけにとられて中に入っていく安城を見送るばかりだった。

「来るとは思いましたが……新人の事務官を虐めて楽しいですか？」

薄暗い室内。十畳ほどの部屋にはモニターと計器を接続するジャッ

ク、そしてサイボーグが直接ネットに接続するための装置が並んでいる。その中央には中背の禿頭の中年男が笑いながら椅子に腰掛け、慣れた調子で歩いてくる安城を眺めていた。

「ちよつとした社会勉強になったんじゃないの？ 世の中いるんな人がいるんだから。それより……その様子だと何もつかめていないみたいね……上から言われてるんでしょ、吉田俊平に関するデータを揃えろって」

小憎たらしい笑み。かつて自分の上司として働いていたときはあまり見ることの無かった人間的な笑みに岡田は自然と苦笑いを浮かべて頭を掻いた。

「まあ分かったことと言えば……吉田って男が相当東和国防軍を嫌っているってことくらいですよ。公安には顔を出しましたか？」

「いいえ……その様子だと公安は国防軍のサーバを使って吉田の身元を洗おうとしたわね……」

安城の表情が厳しくなるのを見ると岡田はそのまま彼女に背を向けて自分の端末のキーボードに手を伸ばした。目の前の画面と安城の手元の小さなモニターに大手のネット検索会社のサイトが表示される。

「こうして世の堅気の人々のサイトで吉田俊平と検索をかけると……当然ながらまあ会社の社長やら大学教授やらの名前が表示されることになりましたよねえ。当然、あの男も東和で住民登録をして仕事をしているわけですから、何件かあの男のデータも検索に引っかかる……」

岡田がキーボードを操作するとファンシーな壁紙のホームページが表示され、安城も見慣れたナンバルゲニア・シャムラード中尉の間抜け面とその隣で渋い表情を浮かべる吉田の写真が映し出された。

「だがちよつと深く探ろうとすると……」

そう言いながら岡田がキーボードを数回叩いた瞬間だった。室内の電源が完全に落ちた。そして同時に安城の上半身が糸が切れたマリオネットのように床に転がった。

「隊長！」

「……これは……効くわね」

倒れていたのは一瞬で、安城はゆっくりと頭を起こすと穏やかに笑いながら椅子に座り直した。

「驚かせないでくださいよ……実際これで公安のハッカーが四人廃人になっただんですから」

「それほどヤワじゃ無いわよ。一応、その流れから予想して防壁を張つといたから……でも個人的なサイトにまでこの警備網。ほとんど狂気の沙汰じゃないの」

「まあ俺も引つかかりかけましたから……油断も隙も無いとんでもない野郎ってことだけはこれで分かりましてね。元々傭兵なんて違法な職業に就いている奴だ。まともな神経じゃないのは予想してましたが」

静かに岡田がキーボードを軽く操作すると部屋中のシステムが回復する。そしてそのまままじめに座り直した岡田は慣れた手つきでキーボードを叩き続けた。

「でも傭兵と言えば腕を売る仕事でしょ？ 嵯峨さんが目を付けてからだって彼はいくつか仕事は請け負ってたはずよ」

「そうなんですよ……日の当たる人間には見えなくても日陰の人間

には見える独特の気配というか……空気というか……存在感。俺もこの仕事でそう言う危ない連中には出くわしてきたが大体がとんでもない自己顕示欲の塊でその癖妙に用心深いところがある。なら……」

今度は安城の隣には極彩色縁取りの画面が映し出された。映る画像は裸の女が男達に囲まれてもだえる姿、安城は表情を変えずに振り返った岡田に目を向ける。

「アングラサイト経由……でもそれこそ公安のお手の物じゃないの。こっちで調べが付くならあなたのところに話は来なかったんじゃないの？」

「俺も最初はそう思ってたんですが……念のためってところでね。こつちの世界で吉田の痕跡をたぐったところで何もつかめないのは分かってはいたんですが……何事も試してみるもんですよ」

そう謎をかけると岡田は再びキーボードに向かい片隅の黒い四角をクリックした。安城が予想したとおりその筋の人間だけが入れるようなパスワードを要求する胸ばかりが強調された女のイメージが表示される。岡田は何も言わずにパスワードを入力し、画面を切り替える。

「ここから入ると租界のシステムに侵入できるっていうメリットがありましたね」

「租界？ それは穏やかじゃないわね。でもそれこそ警察関係者なら誰でも見ているんじゃないの？」

「そう、警察関係者は誰もが見ている。そして警察関係者を監視す

る租界の連中もよく出入りするシステムというわけですよ……」

岡田の言葉の意味が分からずに安城はただ切り替わっていく画面を眺めていた。そして十二回目のセキュリティを突破した辺りで岡田は画面を固定した。

黒い背景にただ検索用の窓があるだけの質素な画面。

「ずいぶん変わったところに出たわね」

興味深そうに安城が身を乗り出すのを見ると岡田は静かに『吉田俊平』と入力してエンターキーを押した。

今度は画面いっぱい吉田俊平に関する記事が並ぶ。

「国防軍のサーバーから直接入れるデータはすべてトラップが仕掛けられているのに……見ての通りですよ」

「まあうちの仕事は受けたくないってことでしょ。嫌われてるのよ」

あっさりと言う安城に岡田は苦笑いを浮かべる。

「で、それを確認するためだけに……ってなに？ その顔」

「いやあ、変わらないところもあるものだなと……」

「余計なお世話よ。続けてちょうだい」

すねたように呟く安城を薄ら笑いで眺めながら岡田はキーボードを操作し続ける。

「まあそれを確認してそれだけで終わるってのも癪だったんで、三日ぐらいこの画面とにらめっこをしておいてね……そしたらあることに気づいたんです」

画面が切り替わる。一番上の『バリスト内戦における吉田俊平旗下の部隊の無差別殺戮行為に関する調書』と言う文字が消え、『タイタン総督暗殺犯を予想する』と言う記事に切り替わる。

「ずいぶん物騒な話が並ぶのね……伝説の傭兵らしいというかなんとというか……。でも今は同盟司法局の仕事で相当拘束されている人物についてそんなに調べて回る顧客が租界にそんなにいるのかしら？」

「そうなんですよ……。アングラの検索サイト。元々アクセス数なんてたかが知れているはず。その順位が数日どころごとと変わる……。そこでアクセスしている物好きを捜したわけです」

「全くご苦労なことね」

再び画面が切り替わり、文字列が並んだ。住所。しかもすべて同じ『東和共和国東都港南区港南2-12-6』と言う文字列に変わる。

「同一人物が……。でもおかしくない？ 港南は現在は再開発プロジェクトのはずだから人なんて……。ダミーね」

安城の笑みに岡田は満足そうに頷くとそのまま住所をクリックした。すぐに画面が切り替わり、エラーが表示される。

「そう、ダミー。まあ租界の中の連中が正直に自分の身元を明かさわけがない……。でもまあそこは俺にも維持がありますから……。この住所でいくつか知り合いに問い合わせをしたところ……。出て来たのはこの女」

画面に映し出されるピンクのサングラスのにやけた女の顔。そしてその隣には銃を構えて走る長い髪の女の写真が映し出された。

「物騒な写真ね……」

「六年前……港銀行西口支店襲撃事件の実行犯の写真ですよ……フ
イルターをかけましたが同じ人物と出ました」

「六年前……東都戦争の激しかった頃ね……で、身元は？」

安城の言葉に岡田は力なく肩を落として上目遣いに安城を眺めた。

「相手は塀の向こう側の住人ですよ……書面の上での身元なんてわかったって意味が無いでしょ」

そのため息をついた後、岡田はキーボードを軽く叩く。画面の下に文章が表示される。

「周りじゃあ『オンドラ』と呼ばれているらしいですが……まあ偽名でしょ。南アフリカ製の特注義体を使用しているって触れ込みだが……」

「南アフリカ？ ギルバート・オーディナンス社は倒産したはずでしょ」

「そう、どれも噂の範疇でしかない。まあ租界のアウトローにはらしい経歴ですよ。主に銃器を使った荒事を得意とする奴で人柄に関するデータにはどれも『金にがめつい』とある。まあ金の使い道は心得ているみたいですねえ……逮捕歴が無いですから」

「租界じゃ金こそが正義だもの」

苦笑いの安城を見てそのまま岡田は端末の画面に振り返る。そしてそのままキーボードを連打し始めた。

「ただ、気になったのは金に汚い女ガンマンがなぜ莫大な成功報酬を取る一流の傭兵に興味を持ったのか……情報を依頼する相手にしちゃあ俺が見たこいつの情報収集能力は中学生並みってところだ」

「世間知らずの金持ち？ そんな知り合いがいるような人物かしら？」

首をひねる安城を予想したように岡田がキーボードを叩く手を止めた。

「確か……保安隊に胡州西園寺家のご息女がいましたよね」

「ああ、西園寺大尉ね。……！」

何気ない岡田の言葉に安城の表情が急変する。その様子を読んでいたかのように岡田が満面の笑みで振り返った。

「あのお嬢様は四年前まで陸軍工作局勤務だったはず……胡州の非正規部隊の作戦行動のデータを引き出すのはかなりのリスクがありますが……」

「あの娘……確か東都戦争に参加したって公言してたわよ」

「これでつながった訳だ！」

安城の言葉を聞いて岡田は大きく伸びをすると最後の仕上げというようにキーボードに手を伸ばす。そこには再び一般向けの大手検索サイトが目飛び込んできた。

「こういうところはさっきの物騒なサイトと違って危ない情報には検閲が入って載らないようになってるわけですが……」

岡田は素早く『吉田俊平』と打ちさらに除外条件を入力して選択する。数件の情報が画面に表示される。

「この選ばれたデータ。すべてがあのオンドラが覗いたサイトだって言っただから……」

「吉田俊平はトラップを外して回っているの？」

「おそらくは……良い仲間が自分を捜しているからそれに協力しているんでしょうね……奇特な奴だ」

岡田は弱々しい笑みを浮かべて再び端末の画面に目を向けた。

「それと……おもしろ現象が起きてましてね」

岡田は再びキーボードを叩き始めた。切り替わった画面には味も素っ気もないグラフが表示される。

「まあ同じく検索回数データなんですけど……」

「結論から先にちょうだい」

「いつもながら厳しいですね。遼南系のシンジケート『南聖会』の警察のサーバへの違法アクセスの回数ですが……見ての通り、この一週間急激に伸びている……」

岡田の指の先。確かにそれまで平坦だったグラフが跳ね上がっていた。

「最近は何も話も聞かないし……幹部の逮捕の噂もない……」

「そう、増える理由がどこにも見当たらない……まあ偶然にははおかしくない話ですが……まあ気にしておいて困る話じゃ無いでしょ」

「主にどこに？」

目をグラフから離さずに呟く岡田に予想していたと言つように岡田はキーボードを叩く。死体、義体、放置、遺棄、紛失などの文字が並ぶ。

「狙いは絞れないんですが……死体を、それもサイボーグ絡みの死体を捜しているような雰囲気はありますね……時期とタイミング、そして狙いがサイボーグ。無関係にしちゃあできすぎている」

「でもシンジゲートが動くほど大物なの？ そのオンドラは」

「まあ凄腕ってことで評判らしいですが……租界でも屈指のシンジゲートが動くには小物と言うのが正直なところでしてね……」

安城は岡田の言葉に考え事をまとめようというように親指の爪を噛む。

「東都の街中なら胡州四大公の筆頭の次期当主の看板は役に立つ……塀の向こう側ではその地位が生み出す経済的利益が注目を集める……最近の西園寺家の金の動きも掴んでるんじゃないの？」

鋭い目つきが岡田に向かう。岡田は苦笑いを浮かべながら再びキーボードを叩いた。天文学的な総資産額が並ぶ帳面、そこに一財産と呼べる金額が一日で引き出されている事実が表示されていた。

「まあ確かにたいした金額だ……それでも西園寺家にしたらはした金。出資者が西園寺家と知ればシンジゲートが動く額にはまるで足りない金額……」

「それでもお人好しのお嬢様が仲間を助けようと引き出す額にしちやあ十分よ。つまり彼女はあなたより先に真実にたどり着くと言っ訳ね」

安城の言葉に頭を掻きながら岡田は頷いた。

「癪な話ですが現実はそのなりそうですね……オンドラは東都では手配中の身ですから、代理の人物が近々あのお嬢さん方と接触をするはずですよ。出来れば……」

今にも揉み手をしそうなにやけた表情を浮かべた岡田に呆れたような笑みを浮かべて安城は立ち上がった。

「まあ報告書に必要な分だけの情報が入れば連絡するわ」

それだけ言い残すとそのまま安城は岡田に背を向けて部屋を出ようとした。

「助かります」

岡田はそれだけ言うと再びモニターに向き直った。入り口の大仰なドアが開こうとする瞬間、岡田は思い出したように首だけ入り口に向ける。

「ああ、それと……国防軍くわんぱうぐんのシステムの攻性防壁こうせいぼうへきの設計者の名前なんです……偶然にも『吉田俊平』と言うそうですよ……まあ20年も前の話ですが……」

「いくら義体化していても脳幹の細胞が死滅するほど昔の話ね。まあ参考程度に聞いておくわ」

それだけ言い残すと安城は自動ドアの向こうへと消えた。

「今更どこに行くんだーい！」

「何を叫んでいるんですか？」

オンドラが舳先に立って叫ぶ姿を後ろからネネが窺める。二ヶ月にわたる氷結からようやく開放された北東和の海。その領海すれすれを貨物船が列を連ねるように外海へと向かう。多くは遼北からの脱出者を満載していることは容易に想像が付いた。

遼北、西モスレム両政府は民間のネットのクラッキングが復旧したと同時に国民に平静を求めたが、核による破滅を求める過激な民族主義者達のもたらした恐怖と混沌はとどまることを知らなかった。オンドラもネネも、遼北の非凍結港に遼北脱出を願うそれなりに金を持った人民の群れの噂は耳にしていた。

「そうまでして生きていて価値のある世の中かねえ……」

「死とは理解できない価値観を受け入れること。それだけの覚悟がある人は数えるほどしかない……この現象は極めて健康な出来事だと思いますよ」

淡々とオンドラの愚痴に答えるネネ。背後で二人が乗っている漁船の船長がわざとらしい咳を立てる。昔から彼等東和の漁民達は遼北の人々を見下して生きてきた。それは成金である遼北の人々が生きようとする事への当てつけ以外の何者でもない。ネネは静かに視線を近くの島へと向けた。

「しかし……島には船は近づかないんですね」

「あの外道が近づいてみる……きっと国防軍が皆殺しにしてくれるよ」

満足げに頷く船長。予想通りの回答にただ頷きながらネネはオンドラを見上げた。オンドラは相変わらずふきゲンだった。船長に支払った報酬は明らかに法外だった。最近では遼北の漁業巡視艇も厳しく東和の漁船の密漁の取り締まりを行っていることは二人とも知っていた。東和北部地域の漁獲量のほぼ三割は遼北の排他的経済海域での密漁に支えられていた。彼等にとって東和に生まれたことは自負であり、それ以外の自信は何もない。ネネもオンドラも船長の根拠の無い遼北の民への見下すような視線と金銭への見るに堪えないへりくだった姿勢はただ不快感だけを残していた。

「六時間……本当にそれだけでいいのかい？」

今度は金銭に土下座しかねない嫌らしい笑みが船長に浮かぶ。ネネは答えるのも面倒だというように頷く。

「良いんだよ……そちらの姉ちゃんが問題なんだろう？ そいつを置いて行けば何時間だって……」

「そりゃあそうだ。そのままアタシは北東和の刑務所につながれて身ぐるみ剥かれるんだからな！」

オンドラは思わずジャケットの下に手を伸ばしていた。そこには拳銃があることくらいこつこつ危ない橋を金目当てに渡ってきた経験の多い船長は苦笑いを浮かべながらそのままキャビンに消える。

「全く反吐が出る……先進国って看板を掲げた土地に生まれただけで果てしなく無能な連中は……人間の資格をすぐにも剥奪した方がいいんじゃないかねえか？」

「その意見には同感だけど……金は力よ。彼等も落ちるところまで落ちれば自分の価値を認識できる。それまでは誰も彼等に彼等自身の価値を教えることは出来ない……ある意味それは彼等にとって不幸なことじゃないかしら？」

見た目はどう見ても小学生程度のネネの言葉にオンドラは静かに相づちを打つ。オンドラが意味を理解しているかしていないか。そんなことはどうでも良いというようにネネは視界の中で拡大していく一つの殺風景な島をじつくりと眺めていた。

「本当に6時間で帰ってきてくれよ……」

「分かったって言ってるだろ！」

心配そうな表情の船長を怒鳴りつけながらオンドラは背後からゴムボートを引っ張り上げる。軍用の軽量かつ搭載量の多いゴムボートの存在はこの船がまともな漁をする船ではない事実をオンドラ達に思い知らせる。一人で軽々とそれを持ち上げるオンドラにネネは不器用に手を貸そうとする。

「一応、あなたは雇い主なんだから……」

珍しく裏のない笑みを浮かべたオンドラはそのまま目の前の荒れる海にボートを投げた。浮かぶボートに足下の大きめのバッグを投げ、そのまま舳先に縛られたロープをたどって上手い具合に乗船するオンドラ。

「手を……貸してください」

「預言者もさすがにこんな船に乗るのは初めてかねえ」

皮肉を込めながらネネの手を取るオンドラ。ネネは小さな体でひよこりとボートに飛び移る。軽い船体が小さなネネを受け止めただけでも大きさに水しぶきを上げた。

「6時間過ぎたら超過料金……」

「くどいつてんだよ！」

船長を怒鳴りつけたオンドラはそのまま船体の後ろにあった小型の推進器で船を陸地へ向けた。

「全く……金がいくらあっても足りねえや……経費の精算の時に苦労するな」

「まあオンドラさんは通常のルートは使えないですからね。私だけで良ければ航空料金と宿泊費だけで済むんですが……」

ネネの重い口調で自分がお尋ね者だったことを思い出してオンドラは黙り込むとそのまま船を遠くに見える黒い砂に覆われている浜辺へと向けた。

「吉田俊平……そのオリジナル。こんな僻地に住んでいるとはねえ……国家元首の暗殺なんてことを何度となくやるような凄腕だぜ……なにを好きこのんでこんな寂しい場所に住んでるのやら」

「それは本人に聞いてみないと分からないことですよね。それに……これから会う初めての生きた吉田俊平が本物の吉田俊平とは限らない……」

浜辺を見つめたまま曖昧に笑いながらネネが呟く。オンドラは不可解そうな顔をしながらそれ以上話を続けずにただ船を進めた。

海流の関係か、波の割に船は滞ることなく一直線に浜辺に進んでいく。オンドラが振り返るとすでに彼女達が後にした漁船はもう点にしか見えなかった。オンドラは大きくあかんべーをするとそのまま船を浜辺にぶつけるように進めた。

「ちょっと待ってな……」

ジーンズが濡れるのも躊躇せずにおンドラは浜辺の膝ほどの深さの水に飛び降りる。ネネが周りを見回すが、氷結が解けたばかりの海峡を見渡す丘には深い雪が残っているのが見える。生身の人間であればその冷たさから無事では済まないだろうと言う状況の中でオンドラは文句も言わずにそのままネネが濡れずに上陸できる地点まで船を引きずってくれる。

「優しいんですね……」

「なあに、金のためさ」

淡々とそれだけ言うとネネが船を下りたことを確認したオンドラはそのままゴムボートを引きずって浜辺の奥の岩陰へと歩いて行った。

ネネは静かにムートン生地のコートの襟を手で寄せながら空を見上げた。この時期の東和北部の気象条件の典型的な例を示してみせるように薄い雲が太陽を隠し、もやのような空の曇りの中から光が静かに地面に注いでいるのが見える。

「本当に……人が住むには適していない場所なんですね」

静かにそれだけ言うとオンドラが消えていった岩陰に目をやった。すぐにそこからブーツを脱いで中に入った水を抜きながら素足で歩いてくるオンドラの姿が目に入った。

「本当に大丈夫なんですか？」

「一応ミルスペックの義体だからねえ……とりあえず異常は感じないけど……もし問題があったら追加料金を請求するからな」

「まあそのお金は西園寺のお嬢さんに言えば出してくれるでしょ」

それだけ言うとネネは確かな足取りで砂浜から黒い岩肌の崖を登りはじめた。オンドラはその足取りがあまりに確かで確実なのでしばらくは呆然とその様子を見守っていたが、しばらくして自分が雇われ人である事実を思い出して慌ててネネの後ろについた。

「心配しなくても大丈夫ですよ……山登りは遼州にいた時には必須科目でしたから」

「でもなあ……」

「心配してくれているんですか？」

「まあ金の分は」

苦笑いを浮かべるオンドラに自然体の笑みで応えたネネはすぐに崖を登ることに集中した。決して緩やかな崖ではない、さらに所々に吹き付けられた強い風でめり込むように白く染まった雪の塊があつて素人ならばすぐにでも滑り落ちてしまうような峻険な崖を順調そのものに登つていくネネ。オンドラはただ租界という閉鎖環境でその中立的な立ち位置と正確かつ的確な助言から『預言者』の二つ名で呼ばれる幼く見える情報屋の自分の知り得ない才能に驚きつつその後ろを続けて登つた。

正直オンドラはネネに付いていくのがやっとだった。確かに百キロを超える義体の重さはあるにしても馬力ではネネはオンドラの十分の一にも満たないはずだった。もし足を踏み外したり手を添える場所を間違えれば生身の人間の反応速度なら対応できずに転落して行くしかないような切り立った崖。そこを一つの間違いもなく的確に登り続けるネネ。

「あんだ……山登りの趣味でもあるのかい？」

「久しぶりですよ……本当に……たぶん東和に来てからは初めての経験です」

さすがに体力には自信が無いようで息を切らせながらもネネは的確な動作で崖を登り続け、ついには船から見た崖の最上部へとたどり着いていた。

「ああ、疲れまして……日頃の運動つてものは大事なんですね……」

そのままひよこりと近くの岩に腰掛けてほほえみを浮かべるネネ。オンドラはようやく重い体を崖から引き上げるとこれまで登ってきた崖の高さを確かめるべく下をのぞき見た。百メートル以上はあるそれでも目の前のネネは涼しい顔をしてこれから向かうべき洞窟があるという北の方角をじっと眺めている。

「本当に……あんたは凄い奴だな」

「あなたの親御さんが育った遼南にはこんな山道はありふれているんですよ……まあもう二度と戻ることの出来ない国だとあなたは言うかも知れませんが」

それだけ言うとネネは疲れも見せずに立ち上がり、崖の横に不自然に出来ている道をゆっくりと北へ歩き始めた。

「風がないのが幸いと言えば幸いかねえ……」

黙っていることが苦手というように苦笑いを浮かべながらオンドラは早足のネネの後に続いた。事実、続く道の中央の地面の岩が露出して見える事実はこの島が冬には北からの強い季節風に煽られる日々を重ねることを示していた。

「幸運は訪れるときは立て続けに訪れるものです。そして不幸もまた同じ……」

「妙に悟った発言だねえ……ただそれはアタシも知っている話だ」
ネネはオンドラの仏頂面を確認するために振り返りにこりと笑うとそのまま道を進む。波の音だけが響いている文明社会から隔絶された北方の島。

「全く……吉田俊平……何者なのかどんどん興味が出る光景だよ」
オンドラの軽口が続く。ネネはただ静かにそれを聞き流しながらまるで来たことがある道とでも言うように迷うことなく真っ直ぐ続く海沿いの小道から笹藪に覆われた獣道に足を踏み入れる。

木々は凍り付き、微かに吹く風に遙か高い梢が揺れているのが目に入ってくる。

「ここは本当に東和かねえ……人が入った気配がまるでねえや」

「山の向こう側に行けば空港も街もありますよ」

ネネはそれだけ言うとそのまま獣道を進む。足下を遮る笹の葉は凍り付き、ネネのブーツに当たる度に金属のような音を発してくだけて落ちる。オンドラは傾斜が急になるに従って肩からずり落ちそうになる大きなバッグを気にしながら珍しく黙ってネネに続いた。

道は緩やかな左右への蛇行を繰り返しながら続いた。しばらく行くと道の左脇に沢の流れのようなものが見えた。沢の中央はちよろちよろと凍結を免れた僅かな水が積もった雪に遮られて勢いを殺されながらも静かに流れ続けていた。

「熊とか……いるんじゃないかねえ……」

「いるかも知れませんよ」

立ち止まりオンドラを振り返りにやりと笑うとまたネネは前を向いて歩き出す。オンドラは思わずバッグに手を伸ばすがすぐに思い直して黙ってネネの後に続いた。

急に道は終わりを告げた。正面には崖が壁のように立ちはだかつている。森も途切れ、そこから先は完全に岩と氷ばかりの世界であることが黒いつやのある崖の石が語っていた。

「もうすぐですね」

ネネはそう言うとそのまま迷うことなく岩の一つに手を伸ばした。確実に手を置く場所を押さえて小さな体を片腕で持ち上げる。足もまた的確に今にも滑りそうに見える岩と岩の隙間に置かれるとネネは次の動作へと移って切り立った崖を登り続けた。

「やっぱりあなたは登山の才能があるよ」

「褒める暇があったら付いてきてください……ただし落ちないでくださいよ」

さすがに振り返って振り向く余裕はネネには無いようでそれだけ言うとそのまま崖を登る動作を繰り返す。オンドラは一瞬躊躇した後、ネネが手をかけた岩と足をかけた石の隙間を確認しながら慎重に崖を登りはじめた。

しばらくネネの動作を思い出しながら自分が崖を登るのが精一杯だったオンドラが上を見上げたとき、すでにネネは二十メートルほどの頂上に這い上がろうとしているところだった。

「これじゃあアタシがおきやくさんだねえ」

ただ苦笑しながらオンドラは必死になつて崖を登り続ける。軍用と銘打っていた義体を闇で手に入れたオンドラ。地球製と闇屋は説明していたが出所なんて掴みようがない闇物資に生産地名など記録されているはずもなかった。半年に一度、その闇屋とつながりのある民生用義体メーカーのエンジンニアのチェックをしてはいるが、彼等の扱う民生用の義体とオンドラの軍用義体とは構成される部品の精度からしてまるで違うものでそのチェックが意味のあるものだったのかとオンドラは急激に体内の人工筋肉内に蓄積されていく疲労物質を感知するシグナルを頭の中で受け止めながら苦虫をかみつぶすように表情を変えた。

「ぶっ……」

なんとか重い体を崖から引き上げたオンドラを涼しい顔でネネは待ち構えていた。

「これからはあなたのお仕事……」

「ちょっと待ってくれよ」

「なんですか？」

表情一つ変えずに本心から不思議そうにオンドラを見つめるネネ。

「もしかして疲れているんですか？　一応あなたは……」

「言いたくはねえがこの体のスペックじゃこれまでの行程は無理があつたつてことだ。やはり専門の技師のチェックが必要な程度の代物らしい」

「それならより気合いを入れてこれからの仕事にからなくてはなりませんね。今回の仕事が成功すればおそらくは西園寺のお嬢さんは定期的に私達に仕事を回してくれるでしょう……しかも破格の条件で」

「確かに……」

反論をする元気もオンドラには無かった。体内プラントが正常に機能していることを確認しながらオンドラは出来る限り体を動かさないように背負っていた重いバッグを地面に置いた。そして静かに目の前にぽっかりと口を広げた洞窟に目をやる。

「まるで……ファンタジーの世界のダンジョンの入り口みたいな雰囲気じゃねえか？」

「それなら時代は中世ヨーロッパの世界観で作られているでしょうが……」

ネネはオンドラの軽口を聞き流しながらそのまま洞窟の脇の雪の中に手を入れた、オンドラは気になっていたがネネは手袋はしていない。それでも平気で雪の中から笹の枝を取り出すとそのままむしる。

「こうして……焼け焦げた跡がある……おそらく爆風によるもの」
オンドラはパイプ状の鉄をバッグから取り出しながらネネの手にある筐の端が炭化している様を確認した。

「トラップか……だろうね。そうするとアタシを連れてきた理由がよく分かる……それにしてもネネ。あんたは凄いよ。あんたが船まで登山用具を持ってきておきながら置いて行った理由がよく分かったわ」

「褒めているんですか？」

「いや、呆れてるんだよ」

それだけ言うとオンドラはパイプ、アサルトライフルの銃身を機関部に組み込む作業を止めてそのままバッグの奥から箱状のケースを取り出して地面に置いた。

「何を……」

「まあ見てなつて。アタシも初めて使うんだけど……」

オンドラが取り出したのはスキー用のゴーグルのように見えた。それを顔に取り付けた後、そこから伸びるコードを自分の後頭部にあるジャックに差し込む。

「爆発があつたつてことは空間のゆがみが物理的に発生したつてことだ。焼け焦げた跡があると言うことはそれほど古い話じゃ無い。しかも近くにはトラップに引っかけた間抜け野郎の姿も無い」

そう言いながらオンドラは洞窟の入り口を眺めた。高さは二人が立つて入るには十分。幅から考えれば手榴弾クラスの爆発でも二人を巻き込んで殺傷するには十分だろう。

「おお……見えるねえ。法師じゃねえのに歪んだ空間を示す色の変化がばっちりだ」

「そんなものが出来ていたんですか？」

「あれだろ？ 地球のお偉いさん達はこの前のなんとかつて言う胡州の馬鹿野郎のおかげで法術つてものが知られるようになる以前からその存在を知っていた。知つてて隠していた……」

オンドラはゴーグルを付けたまま洞窟に入る。周りの岩や地面を何度か確認し、納得しながらゆっくりと進む。ネネはオンドラが置い

て行った銃をバッグに無理矢理詰め込むとそれを引きずりながらオンドラに続いた。

「第二弾だ……色が薄いつてことはそれなりに昔に引つかかった奴がいるな……場合によっては得物があるな。ネネ、済まねえ」

背後までバッグを運んできたネネに頭を下げるとオンドラはゴーグルを付けたまま手慣れた手つきで銃を組み立て始めた。銃身を機関部に深くねじ込むとその下にグリップを当ててピンをたたき込んで固定する。そのまま機関部の後ろにも同じようにピンを刺してストックを固定。鉄の塊はすぐに銃へと姿を変えた。

「手慣れたものですね」

「これが食い扶持だからね」

そう言うとオンドラはそのまま銃を構えながら中腰の姿勢を取る。

「ネネ、アタシの頭より上には手を出さないでくれよ……不可視レーザーが走ってる。右の壁のセンサーへの光線の供給が途絶えたら何が起きてもアタシのせいじゃねえからな」

「それほど物好きじゃありません」

ネネはかがみながらオンドラの後に続く。またオンドラが歩みを止めた。今度は跨ぐようにして何かを乗り越えている様子が後ろのネネからも見えた。

「古典的だね……ピアノ線。まあ确实と言えば确实だが」

「トランプが好きみたいですね、吉田って人は」

「まあ傭兵なんて言う職業柄だろ？ 東都の租界にもそう言う奴は何人かいるぞ。なんなら紹介しようか？」

「そう言う悪趣味な友達は欲しくありません」

オンドラの冗談に真顔で答えるネネ。その様子に振り返って笑みで答えるとオンドラは再び真剣な表情に戻って洞窟を奥へと進んだ。

さすがに普通のトラップはネタ切れという感じでオンドラは止まることなく五十メートルほど洞窟を奥へと進んだ。左右が急に開けて天井が高くなる。

「どう見る……雇用主様」

「壁面を見る限り風化や落盤で出来た空間じゃありませんね。重機で削り取った跡を整えてそれっぽくしたって言うところじゃないですか？」

「ご名答だね。で、あの文字をどう見る？」

オンドラが指さす天井。ネネはすぐにコートから小型のライトを取り出して照らしてみた。文字のようなものが浮かんでいるのが見える。ネネはすぐにそれが本来このような場所にある文字ではないことを悟った。

「オンドラさん。よく文字だと分かりましたね。あれは遼州文字……この星に人が住み始めた時代に使われていた文字です」

「遼州文字……遼州文明は文字を持たないってのが特徴じゃ無かったのか？」

どこかで聞きかじったという感じで呟くオンドラ。ネネは微笑みながらただ文字を見上げていた。

「確かに現在の記録……つまり地球人がこの星にやってきた時には

当時の七王朝は文字を持たない文明でした。彼等の間に伝わっていた伝承の中にはかつて人を不幸にする要素として鉄と並んで文字が上げられています。遼州の先住民、すなわち私達の祖先は意識して文字を捨てて青銅器文明に回帰したんです」

「ずいぶんと物好きな話だねえ……便利さを捨てて原始に戻るって遼州の前の文明の指導者にはアーミッシュでもいたのかねえ？」

感心したのか馬鹿にしているのか、口笛を吹くオンドラを見てただ慈悲に満ちた笑みを浮かべた跡、再びネネは文字を見上げた。

「『この文字を読める者にのみ、この先の扉は開かれる』って暗号でも記しているんでしょうか？」

「おいネネ！　読めるのか？」

「先遼州文明の資料は何度か目にしたことがあるので大体は……」

「さすがインテリ！」

「褒めているようには聞こえませんかよ……」行く手に現われた道は偽りの道。汝、それを通る無かれ。ただ道は心の中にあり、汝、その道を進むべし」

そこまでネネが読んだときにオンドラは呆れたようにため息をついた。

「心の中の道？　なんだよそれ……あれか？　東和軍とかが使っている意識下部プリンティングセキュリティシステムでもあるって言うのか？」

「こつ言つ謎かけをする人はそんなハイテクを使う趣味は無いと思いますよ……とりあえず続きを読みますね。『心の中は常に乱れるものなり、汝の乱れが我への道なり』……以上です」

「は？」

オンドラはただ呆然と文字を読み終えて振り返ったネネに答えるだけだった。

「『乱れ』が重要なんですよ」

ネネの確信のある言葉にただオンドラは首をひねるばかりだった。

「乱れねえ……あれか？ いきなりスカートをこうして……」

ネネのスカートに手を伸ばそうとしたオンドラの頭を思い切りよくネネははたいた。

「それで道が開かれるなら別にこの文字を読む必要は無いんじゃないですか？ 偶然で大体の片が付く」

「違えねえ」

オンドラはそう言つとそのまま先頭に立ってホールのようになった道を引き続き歩き続けた。すぐにそれは行き止まり、小さな穴が開いた壁に突き当たった。

「ここか……」

ただ静かにオンドラは壁に手を擦りつける。よく見ればそこには裂け目があった。

「この穴はマイクですね。そうなると」

ネネは迷うことなく継ぎ目にナイフを突き立てようとすオンドラを押しつけた。

「『ネルアギアス！』」

一言、はっきりとそう言ったネネ。オンドラはしばらく呆然と何が

起きたか分からないようにネネを眺めていた。

すぐに結果は現われた。微動だにしないと思われた継ぎ目がぎりぎりとはたがり、人が一人通れる程度の隙間が生まれた。

「おいネネ……何をした？」

「何を……見ていませんでしたか？」

「見てたけどさあ。何なんだよ！」

ただ疑問ばかりが頭に押し寄せて混乱しているように見えるオンドラに静かにネネは笑いかけた。

「そうですね。これは遼州文字と古代遼州語の知識がないと分からないことです。まず、この文字を書いた人……まあ中八九この奥で私達を待っている吉田俊平なんですが……彼が要求していた知識はまず遼州文字が読めることでした」

「まあな。そう書いてあった」

ネネの窘める口調に少しばかり苛立ちながらオンドラが吐き捨てるようにそう言った。その様子に満足げに頷くと続いてネネは先ほどの文字の辺りを振り返った。

「古代遼州語で『乱れ』とは何か？そして『心』に関する言葉は何か？それを知っている人ならば答えは一つ、『ネルアギアス』という単語になります」

「だからその『ネルアなんとか』がなんで『乱れ』で『心』と関係

するんだよ！」

明らかに不機嫌に呟くオンドラ。ネネは静かに言葉を続けた。

「遼州の民……一説には五十万年前にこの星にたどり着いたと言う話ですが……彼等はこの地にたどり着くと同時に文明を捨てて青銅器の世界に回帰しました。彼等は人の心のある力が自分達を滅ぼしかねないと思つてその力を放棄することを誓つたんです。その為、後の現在でも遼南の山岳地帯の少数民族などが使っている現遼州語ではその力を指す言葉……『ネルアギアス』が『乱れ』という意味で使われています」

「言語学のお勉強か？ アタシはご免だね！」

「尋ねてきたのはオンドラさんですよ。それに私はあなたの雇用主です。今後のことも考えて最後まで聞いていただきますよ。『ネルアギアス』とは古代遼州語では『技術』と言う意味なんです。彼等は技術が人を滅ぼすと経験し、この星で原始に戻つた……まあそうなつた理由までは私も分かりませんが」

それだけ言うとネネは不機嫌そうに腕組みをしているオンドラを置いて洞窟を奥へと歩き始めた。

開いた道はこれまでの洞窟の自然を装った姿は無かった。明らかに重機で削った爪痕が克明に残っているのがわかる。

「しかしあれだねえ……さすがというか何というか……」

銃をかざしながら先を進むオンドラが感心した視線を振り返る度にネネに向けた。

「何がですか？」

「古代遼州語？　そして現在の遼州の言葉の地図。全部頭に入っているわけか？　すげえ話じゃねえか」

オンドラの珍しく本心から感心しているような言葉遣いにネネも少しばかり気をよくして微笑んだ。

「あなたの商売道具は手に持っている銃だとすれば、私の場合はこれです」

静かにネネは自分の頭を指さした。振り向いたオンドラは分かりましたというように大きく頷く。

「伝説の情報屋……馬鹿には確かに勤まらない仕事だ」

オンドラはそう言うとゴーグルを外して銃の銃身の下にぶら下げたライトで行く手を照らした。

行き止まりには銀色の扉が見えた。

「もう偽装の必要も無いってわけか……どんな人物が待ち受けているのか……」

「予想はいくらでも出来ませんが、今はするだけ無駄でしょう。顔を合わせて話せば一番手っ取り早く分かりますよ」

ネネはそう言うと躊躇うように立ち止まっているオンドラを追い抜いてドアの前に立った。ドアはゆっくりと音も立てずに開く。オンドラはさすがにネネの行動が無謀だと感じてその前に飛び出して銃口を部屋の中に向けた。

薄暗い明かりが二人を包んだ。そしてその明かりがだんだんと強くなっていくので二人は思わず眼を細めていた。闇に慣れた目が何とか光を捉えることが出来るようになった時、二人は部屋の中央に棺桶のようなものがあるコンピュータールームと言うのがその部屋の正体だと知った。

「なんともまあ……」

オンドラは銃口を棺桶に向けたまま部屋を見回した。壁面を埋め尽くすモニター画面。中空にもフォログラムモニターが展開しており、そこにはオンドラも何度か見たことがある様々なテレビ番組や映画、ネットの検索画面やゲームのプレイ画面が映し出されていた。

「監視者気取りのドラキュラさんの顔は……」

苦笑いを浮かべながら棺桶に顔を突き出そうとした瞬間、棺桶の蓋が勢いよくはじき飛んだ。オンドラも場数は踏んだ手練れ、蓋をか

わして飛び退くとそのまま銃口を蓋の中から現われた半裸の人物に
向けた。

「なんだ！ テメエは！」

オンドラの叫び。ネネはただ黙ってにらみ合う二人をじっと眺めて
いた。

「なんだテメエは……？　そう言うテメエはなんだ？」

男の目が笑っている。その様が不気味に見えて思わずオンドラは顔をゆがめて身を引いた。男の顔かたちは彼女が調べた保安隊の第一小隊二番機担当者吉田俊平のものだが、そのやせぎすの義体は軍用とはとても思えないものだったし、爛々と光る目はどう見てもまともな人間のそれではなかった。

「そうですね……侵入者は私達の方ですから」

「ほっ……」

ネネの言葉にすぐに吉田は関心をネネへと向けていた。棺桶からジャンプして飛び出し、跳ね回りながらネネの周りを回る。

「オメエ……アングラ劇団の劇団員か？」

「失礼なことを言う！」

思わず出たオンドラの本音にこれもまた大げさに反応するとそのままじりじりと顔を銃を手にしているオンドラに近づけた。もし彼女が素人ならば恐怖のあまり引き金を引いているところだが、吉田は相手がそれなりに場数を踏んだ猛者だと読んでかうれしそうな表情を浮かべてじりじり顔を近づける。

「来るんじゃないよ！　気持ち悪い！」

「それを言うならこちらの方だ！　せつかく良い気分で眠っていれば突然の侵入！　君ならこんなときにご機嫌でいられるかね？」

オンドラとは話が合わないと悟ってか、吉田は話をネネに振ってきた。

「でも入り口のあの文字。あれを書いたのがあなたなら私達を歓迎してくれても良いと思いますよ」

ネネの言葉に矛盾はなかった。しばらく吉田は天井を見上げて一考した後、手を打って満面の笑みを浮かべた。

「そうか！　あの謎かけを解いたのか！」

「そうじゃなきゃここにいねえだろ？」

オンドラのつぶやきを無視して吉田はネネの手を取った。

「学究の徒、遠方より来たるか！　これはまた楽しいことだな！　酒宴でも催したいところだが……見ての通り空ものもろくない有様でね」

「酒宴だ？　まっぴらだね」

またも呟くオンドラ。吉田は敵意の視線をオンドラに向けた後、すぐに満面の笑みに戻ってネネの手を取る。

「この星に眠る謎。どれもまた興味深いものばかりだ！　それを尋ねてもう何年経つか……成果を横取りしようとする馬鹿者達の相手も疲れ果てたところだからね」

「成果を横取り？ あなたはこの部屋で研究成果をハッキングして
いるだけなんじゃありませんか？」

うんざりしたように呟いたネネの言葉。だがネネには吉田の敵意が
向かうことはない。満面の笑みを崩すことなく何度となく頷き笑い
声を静かに漏らす。

「確かに……個々の研究成果はどれも私ではなくそれぞれの実地の
研究者の地道な活動の賜であることは認めるよ……でもそれを統合
し一つの成果として世に送り出す天才が必要だ。そうは思わないか
ね？」

「自分を天才呼ばわりか……終わってるな」

再び殺気を帯びた敵意の表情がオンドラに向けられる。ネネはその
様子があまりに滑稽なので吹き出しそうになりながら吉田の次の言
葉を待った。

「終わっているか……それはいい！」

そう叫んだ半裸の吉田。その狂気表情にネネは目を背けた。目を見開き、ただ口を半分開けて笑みと呼ばれる表情を浮かべるそれ。

「その面！ 見ててむかつくんだよ！」

オンドラの言葉にただひたすら笑いだけで返す吉田。

「だから何だつて言うんだ？ まあいいや、君達は運が良い。俺は今大変に機嫌が良いんだ」

「そうは見えませんが……」

それとないネネのつぶやきにも吉田の笑みは止まることを知らない。

「まあいい。君達は俺のことを捜していた……」

「さもなきゃこんなところに来るかよ」

「そうだな……だが機嫌が良い俺に会えるのはそう無い機会だぞ」

吉田はそう言う一つの端末に取り付いた。狂ったようにそのキーボードを叩き続けた結果ついに全面的画面が切り替わる。

すべてはアルファベットの羅列に埋め尽くされた。それがドイツ語のものだとネネはすぐに気づいた。

「ゲルパルトの仕事でも請け負っているんですか？」

ネネの言葉に吉田は狂気を孕んだ笑みで頷く。

「大きく時代は動く……時代を動かす機会とは無縁だと思っていたが……世の中そう捨てたもんでもないらしい」

「お前の場合すでに捨ててるみたいなものだけだなあ」

オンドラのつぶやきを無視して吉田の笑みは続く。

「君達も見ただろ？ 海峡を越えていく避難民の乗る輸送船の群れを」

「あれはもう片が付いた……終わった事実を受け入れられない人達の群れに見えましたけど」

非難めいた響きを湛えたネネの言葉に吉田は耳を貸す様子もない。

「いや、彼等は正しいんだよ……まもなくそれは証明される……外惑星の連中……悪意を湛えていい顔をしていた……実にいい顔だった」

「悪意を湛えたい顔？ そんなものがあるなら見てみたいね」

「君は今俺を通して見ているじゃないか！」

「なら見たくもないな」

オンドラの言葉に話すに足りないと言うように吉田は目をネネに向ける。ネネは無表情に吉田を見つめた。

「おかしな話とは私も思います……悪意はどこまで行っても悪意ですから」

吐き捨てるように呟かれたネネの言葉に吉田は大げさに肩を落としました。

「残念だ……」

心底残念そうに肩を落とす吉田にネネはただ黙ってその表情を見つめるだけだった。

「人の死を望む存在に同情する余地は無いと思いますが……」

「そうかな？ 世に自分の利益を求めない人がいないのだから時に国家というものに依存するパーソナリティーがその国家に敵対するものに死を望むのは珍しい話ではないだろ？」

吉田は再び饒舌を取り戻してネネを睨み付ける。

「私はそう言う狂信者とは距離を置くのをモットーにしているもので」

「確かにそれは賢明な発想だ。だが成功には時として彼等と共闘することを求める場面もある」

そう言うと得意げに吉田は背後に並ぶ画面に目をやった。瞬時にそれは何か巨大な施設を映し出す。

「何ですか？ それは」

ネネの興味深げな反応に満足げに吉田は頷いた。

「興味があるね？ 先ほど狂信者と距離を置くと言いながら……こ

れが狂信者の作品そのものだというのが」

「ゲルパルト辺りの秘密兵器というところか？」

オンドラの当てずっぽうの問いに吉田はもったいを付けたような笑みを浮かべている。

「それであなたは何をしようというのですか？」

「私が望んだ訳では無いよ。狂信者はただ敵の死を望む。その様子の観察をもくろんだだけだ」

「悪趣味だな」

「なんとでも言いたまえ！ 私は私の快樂の為に存在しているのだから」

背後のメカニズムの動きにネネ達の視線は釘付けになる。何度となく繰り返される惑星を狙撃する巨大砲台の映像。

「それは『管理者』の望んだことなんですか？」

静かに放たれたネネの一言。それまで満足の笑みを浮かべていた吉田の表情が崩れる。

「管理者……誰だね？ それは」

「あなたのお仲間が消された場所に必ず残っていた符号です。『管理者』……あなたはそれが誰かを知っていると思いますか？」

「知らないな！ 『管理者』？ そんな存在を私は……！」

そこまで言ったところで吉田の体が突然空中に撥ね飛んだ。絶え間ない痙攣を引き起こしながら地面に転がり、口からは泡を吐き始める。

「おい！ ネネ！ 何をした！」

オンドラが叫ぶのも当然だった。先ほどまで満面の笑みでネネ達と会話をしていたサイボーグはただ痙攣と骨髄反射を繰り返しながら床に転がるだけだった。

「ようやく本当の『吉田』さんが現われますよ……」

目の前の惨めな義体を見下ろしながらネネは静かにそう呟いた。

『本当の俺ねえ……』

突然部屋に響き渡った電子音声にオンドラは顔を顰めた。

「突然喋るんじゃないよ」

『失礼した。まあ……こっちの方がかなり手間をかけたわけだから
そう謝る必要は無いか』

「そうかも知れませんね」

白い目でネネがオンドラを見る。

「なんだよ……アタシが無能みたいじゃないか」

『みたいじゃなくて無能そのものだったね。君の情報調査能力……
預言者ネネ。多少買いかぶりすぎていたんじゃないですか？』

「いえ、別に買いかぶってなんていませんよ。それだけ無能だった
からこそ私達はこうしてあなたに出会えたんですから」

ネネの確信を込めた言葉。オンドラは不機嫌そうに銃口をまだ痙攣
している義体へ向けた。

『ああ、そいつなら好きなだけ撃つてくれ。俺としてはそんな偽物
がはびこっている世の中にはうんざりしているんでね』

吉田の言葉が終わるまでもなくオンドラはフルオートで義体に弾丸を撃ち込んだ。痙攣が止まり地べたに血が拡がっていく。

『気が晴れたところで……まず君達を知りたいことは何なのかな？』

での悪い生徒を教える教師宜しく呟く吉田の言葉にネネは眉を潜めた。

「私の知りたいこと……最初にあなたの悪趣味が先天的なものかどうかを知りたいですね」

『これは意外なところから話が始まるね……悪趣味……確かにそうかも知れないね。あちこちに分身の死体を残して消える……少なくとも趣味の良い存在のすることじゃない』

「確かに。趣味が良ければ最初から分身なんて言うものを作る必要がねえからな」

オンドラの言葉。吉田の感情を表すように黒く染まったモニター画面が軽く白く点滅した。

『一つの意識……そこから出発するのが人間という生命の特徴だとするならば、俺のそれは多数の視点を持つ意識集合体として出発することになったからそれを統合する必要が生じた段階で個々の異端的意識を消す必要が生じた……こう言う説明では不十分かな？』

「不十分ですね。まず、なぜあなたの意識が最初から分裂して多面的な視点を持つ必要があったのかの説明が必要になります。またその必要に妥当性があったとして、なぜ突如としてその多面的な視点

が百害あつて一理無い状況に至つたのか……それも説明をいたさないことには……」

ネネの言葉。すぐに画面が再び白く点滅する。

『預言者……その二つ名は伊達では無いんだろ？ なら二つの回答の予想も付いているんじゃないかな』

吉田の言葉にネネは答えることもなくにんまりと笑う。

「ここにちょうど良い証人としてのオンドラがいますから……彼女に分かるように説明してください。そうしないと私も契約相手のあなたのことを心配している同僚にあなたについて説明をする自信が無いんです」

『これは一本取られたな……じゃあ始めようか……俺が何者で何を目指しているのか……』

満げな吉田のつぶやき。オンドラはただ黙ってそれを聞いているだけだった。

吉田俊平は後頭部に刺さったジャケットを引き抜くと大きく息を吐いた。

「ずいぶんと……お時間がかかったようですけど……大丈夫かしら？ 西園寺家……いえ、山城グループとしてはかなりあなたに期待しているのですからそれに答えていただかないと困りますのよ」

吉田の後ろには上品そうな物腰で彼を見つめる女性の姿があった。留め袖の牡丹柄の西陣織の着物も、彼女が着れば決して派手には見え、むしろ力不足に見えた。その特徴的なタレ目もまたその目の奥の人を引きつけるような光を押さえる役目を果たしていると考えれば不自然には見えない。

「まあ……あのお嬢さんに手柄を取らせるのは苦労するってところでしょうかね」

苦笑いを浮かべながら振り返った吉田を見る女性の目が一気に殺気を帯びる。

「……要ちゃんはそんなに無能だとおっしゃりたいのかしら？」

「い！ いえ！ そう言うわけでは無いんですが……ワルを気取って租界に顔を利かすには役不足なのは確かかと……」

吉田のいい訳に着物の女性は表情を満足した様子に急変させた。そのコロコロと変わる表情に思わず吉田の額に冷や汗が流れる。

「まあ……吉田さんの人を見る基準は新ちゃんだものねえ……あの子は本当に利発で賢い子だから」

「46でお子様扱いか……隊長もかわいそうに」

「私に勝てないうちはいつまで経っても嵯峨惟基なんて言う立派な名前は不釣り合いよ。新ちゃんでも十分」

女性はそれだけ言うと満足げに吉田の座っているモニターの並ぶ部屋を後にした。部屋の自動ドアを出ると白い詰め襟の制服を着た兵士が敬礼をして彼女を迎える。

「お方様……吉田殿の首尾は？」

「上々と言いたところだけど……あとは要ちゃん次第ね。それより相馬君達の準備は出来たのかしら？」

相変わらずの余裕の表情。それに詰め襟の士官はにんまりと笑って頷く。

「すべては予定通りです……しかし、康子様。あのインパルス砲台。今すぐ破壊してしまった方が手っ取り早いのでは無いのですか？」

士官の言葉を聞くと康子は静かに帯に指していた扇子を取り出して軽く自分の顔を扇いだ。

「それが出来るのでしたらとっくの昔にやっておりますわ。あれは簡単に壊せる代物ではない……確かに私は壊してみせる自信がありますが……私が手を出さずとうちの人がいろいろ面倒を負うことにな

るでしょ？」

「まあ胡州のファーストレディーが東和の国有物を破壊したとなれば……元々東和は胡州に遺恨がありますから」

「そう言うわけ。あくまであれの破壊は遼州同盟司法局によってなされなければならぬ。しかも出来ればその破壊が行われたことすら外に漏れない方が後々の為になる……本当に難しいお話ですわね」

まるで茶飲み話でもするようにつこりと笑う。士官はその西園寺康子と言う人物の底知れなさに怯えながらただ敬礼をして彼女がハングーに向けて去るのを待つのが精一杯だった。

「おお！ これぞ我が職場の有様ぞ！」

「要ちゃん……嘘っぱいのも大概にして」

保安隊の駐車場に降り立ち、大きく伸びをする要にアイシヤが突っ込みを入れる様を誠はただ苦笑いで見つめていた。実際一週間は長かった。たしかにその間の給料が出ないことは痛いと言えば痛い。誠もいくつか予約を入れていたプラモデルのキャンセルをしなければならなかったほどだった。

だが、それ以上に雰囲気がまるで変わっていた。

「まるで廃工場だな」

運転席から降りたカウラの言葉で誠は自分の違和感の正体を見極めた。

ともかく人の気配がしなかった。

いつもならアサルト・モジュールの部品を運ぶための大型クレーンのうなりが響いてくるハンガーが沈黙で満たされている。

「まあ、良いじゃねえか。行くぞ！」

すっかり上機嫌の要はそのままいつものようにハンガーに向かった。いつもなら目にするランニングや銃器の訓練のためにライフルを背負った警備部の面々の姿もそこには無かった。ただ誠達の背中を見

つめるだけの最低限の歩哨の視線だけがある。

「本当に……演習前って感じね」

「いつもこうなんですか？」

「貴様は初めてじゃないだろ？」

カウラに言われて配属直後の『近藤事件』前後の出来事を思い出してみた。あの時も同じようにアステロイドベルトでの演習を前にしての沈黙があつたような気がする。

「いやあ、普段を知らなかったもので……」

「まあそんなものよ……」

アイシャがそのままハンガーの半分開いた扉を通りすぎるのを見て誠も後に続いた。

がらんとした空虚な空間がそこにはあつた。奥に見えるいつもは誠達の05式に隠れるようにひっそり存在している漆黒の嵯峨の愛機の『カネミツ』の姿が見える。

「きれいなもんだねえ……すべては新港に搬送済みか！」

要の言葉が人気のないハンガーに響いた。

「分かり切ってること今更言っても……それにしてもクバル力中佐の『ホーン・オブ・ルージュ』は演習参加機体に入ってたけど？」

「ああ、あれはオーバーホールに入るそうだ。元々手がかかる機体だからな。シャムの『クローム・ナイト』と整備時期がかぶるとま
ずいだろ？」

「へえ……そうなんだ……」

カウラの言葉にアイシャが意味ありげに呟いた。

「空に浮かんでいるのがネットに出ている地殻すらぶち抜く大砲でも……頼りになるのはシャムだけか……」

あきらめを孕んだカウラの声に要がぴくりと眉を動かした。

「おいおい、それはいくら何でも神前の野郎に失礼じゃないのか？」

「そんな失礼だなんて……」

愛想笑いを浮かべながら呟いた誠を要が鋭い視線で睨み付けた。

「事実だろ？ 確かにあの砲の威力も干渉空間を展開すればおそろくは耐えきれぬ」

「なら問題ねえじゃねえか」

あっさり答えた要にカウラはひたすら大きなため息をついた。

「要ちゃん……いくら防いで壊せなきゃなんにもならないじゃないの。それとも出来るの？ 誠ちゃんに砲台の破壊。あんな撃つてそれで終わりなんて言う甘っちょろい代物が浮かんでいるんだったら東和宇宙軍も護衛の艦隊ぐらい配置しておくはずよ。スタンドアローンで敵中突破が可能な防御性能くらいはあると考えるのが普通じゃないかしら？」

アイシャの言葉に思い当たることがあるというように要の表情が変

わる。

「ほら……誠ちゃんじゃ対応は無理。おそらく07式を駆るランちゃんも部隊の指揮で手一杯……攻撃に当てられてしかも成果が期待できるとなるとシヤムちゃんのクローム・ナイト以外は想像が付かないんだけど……」

「まあな……でもあいつも遼南内戦で知られた猛者だ」

苦し紛れの要の言葉に再びカウラが大きくため息をつく。

「こちらの手札は一枚。相手は……もし東和宇宙軍があればの確保を優先するとすれば艦隊規模で向かってくるわよ……勝ち目はゼロね。まあそうなれば遼州同盟崩壊の主犯になるからそれは無いとしても……東和宇宙軍と噂の絶えないゲルパルトのいくつかの公然武装組織。あるいは大統領の超法規的判断で動いたアメリカ海兵隊。これはあまり考えにくいけど個人的なつきあいの関係で遼南宰相のアンリ・ブルゴーニュ氏のつながりでフランス海軍や海兵隊が動くって可能性も……」

「ぐちゃぐちゃうるせえな！　ともかくシヤムが潰せば良いんだよ！　」

「ああ、そのシヤムなら今日は有給だよ」

ハンガールの奥から叫び声が聞こえた。そこにはタバコを啜えた嵯峨の姿がある。

「お前ら……想像力を働かせるのは大変結構な話だけど……やることがやってからにしてくれよ。とりあえず着替え。それと終わっ

たら隊長室に来て謹慎開けの報告。それが終わったらランの奴からレポート用紙預かってるからそれに反省文を記入して今日中に提出お願いね」

それだけ言つと嵯峨は悠然とハンガーの階段を上つて隊長室のある二階に消えていった。

「とりあえず着替えか……」

カウラのその言葉を合図に誠達は嵯峨が立っていたハンガーから二階の執務室や更衣室のあるフロアーへ向かう階段へと急いだ。

階段を上る間も物音も気配もなかった。

「技術の連中は新港か……」

「運行部はどうなんだ？」

要の言葉にアイシャは曖昧に頷く。

「まあうちはシミュレーターがあるしねえ……それに新港には機関部のスケベ連中がいるから近づかないわよ」

誠はすぐにどろどろした女性関係を山ほど抱えた機関部の面々の顔を思い出した。昔からもてるという言葉とは無縁だった誠にはあまり想像の付かない世界。面倒そうだなと思いつながら管理部のいつものように忙しく働いている様子の見える二階へとたどり着いた。

「さっさと着替えるわよ……まあ誠ちゃんは一人で男子更衣室だけ」

廊下を足早に歩きながらのアイシャの一言。まあ誠はいつものことなのでただ曖昧に頷きながらその後ろについて歩く。

確かに人通りは少なくなっている。機動兵器を運用する部隊がどれほど技術面での支援を受けているか、そしてその支援のためにどれほどの人員が割かれているのか、それを誠はしみじみと実感した。

「じゃあ誠ちゃんはいい」

誠は男子更衣室の前に置き去りにされる。中に入ってもやはりひんやりとした空気が中を占めているばかり。いかに多くの技術部の面々がこの部屋を利用していたのかを実感しながら誠は自分のロッカーを開いた。

慣れた手つきでジャンパーを脱いでセーターをハンガーに引っかけ、カーキーグリーンのワイシャツを身にまとい、ワンタッチ式のネクタイを首に巻く。

「ふう……」

いつもならそこで島田や菰田の突っ込みが入るところだった。その島田はたぶん新港で05式の運搬作業の監督をしていることだろう。菰田は先ほど端末のモニターを睨み付けながら首をひねっている様を見たばかりだった。

「なんだか寂しい感じなんだな」

それだけ言うと誠はスラックスを素早く履き、ベルトを無造作に締め、ジャケットを羽織って略章の位置を直すと下士官用の制帽を被って廊下へと出てみた。まだ女性陣の姿は無い。

「このまま一人で隊長室か……」

「そりゃあストレスだわな」

突然足下から声をかけられて驚いて飛び跳ねる。

「おい……そんなに驚かれても困るんだけど」

苦笑いを浮かべているのは部隊長の嵯峨本人だった。

「隊長……暇なんですか？」

「まあね……鑑定を頼まれてる品物は全部東都の別邸に送っちゃったし……さすがにこれから任意の取り調べを受ける人間が銃のカスタムなんて……する気も起きないしね」

そう言つとそのままよたと健康サンダルの間抜けな音を立てながら隊長室へと歩いて行つた。

「隊長！」

誠の突然の呼びかけに頭を掻きながら嵯峨は面倒くさそうに振り向いた。

「今回の演習……」

「ああ、予定通り。なんにも起きないよ」

あっさりとそれだけ言う嵯峨は再び隊長室に歩き始める。

『聞くだけ……無駄だよな』

さすがに嵯峨という人物が分かってきた誠はそう思い直すと奥の女子更衣室から要達が出てくるのを待った。

「おう、暇そうだな。待ちぼうけか？」

再び暇そうな人物が誠の前の医務室のドアを開いて現われた。小太りの眼鏡、浅黒い肌がどう見ても部隊の誰とも一致しない個性を持っている男。

「ドム大尉。出撃前の健康診断とかは……」

「健康診断だ？ そんなものをしなくたってお前等はみんな健康だろ？ それとも何か？ 日々の訓練はあれは飾りか何かか？」

不機嫌そうに呟くドムにただ誠は頭を掻く他無かった。

「そう言うわけでは無いんですが……データをとりとるか……」

「戦闘が人に与えるストレスのデータなんざ16世紀くらいから集められてるんだ。今更俺が何をしろって言うんだよ。それに法術絡みとなれば俺はお役ご免だ。その点ならヨハンあたりに聞くのが一番だろ？」

「ええ、まあ」

尤もな発言に誠はただ黙るしかない。

「まあ、あれだ。帰還後はみっちり検査の予定が入ってるからな。こう言うのは始まる前より終わった後が大事なんだ。いくら技術が進んでも、うちの整備の連中ががんばっても宇宙放射線の影響やら反重力エンジンから発せられた素粒子の遺伝子に与えたダメージやらの計測はヨハンの手にはあまるからな。覚悟しとけよ」

それだけ言うと出て来たときと同じく突然のように扉を閉めて医務室に閉じこもる。

「何が言いたかったのやら……」

「待たせたな」

考え込んでいる誠の背後からカウラの声が響いた。驚いて振り返る誠の前に苦笑いを浮かべる要と口笛を吹いて余裕の表情のアイシャの姿も目に入ってきた。

「さあ、小言でも食らいに行きますか！」

やけに張り切ったようにそう言うと要はすたすたと隊長室目指して歩き始める。誠も重い足取りでその後を静かに付けていった。

隊長室の前に付くと早速ドアノブに手を伸ばそうとする要の前をカウラが遮った。

「礼というものがある」

ただそれだけ言うと無表情にカウラはノックをする。

『おう！ どうせベルガー達だろ！』

相変わらずのやる気のなさそうな声にカウラは肩を落としながらドアを開いた。

「どうだ？ ずいぶん片付いたろ？」

誠達が部屋を見回す前に嵯峨が叫ぶ。いつも見慣れた書類と銃の品の散乱した隊長の執務机とは別物のように磨き上げられてそれらしく見える机と何もない部屋に誠達はただ言葉もなく黙り込んだ。

「あれだ……公安の連中が俺のことを嗅ぎ回ってるからな……近々任意の取り調べってことになるかも知れないからな。そうなる鑑定を頼まれてる品が心配だ。物の価値も知らない連中のことだ。下手をして傷つけられたらたまったもんじゃねえから片付けた」

「簡単に言っけど……あれじゃねえのか？ また茜の奴を使っただろ？」

苦笑いを浮かべる要。

「まあ……門前の小僧、習わぬ経を読むって奴でね。アイツも餓鬼のころから俺の事務所で骨董の類を見る眼もあるし、そう言う品を専門に預かる業者にも顔が利くしな」

「かわいいそうな茜ちゃん」

いつもはこういう時には黙っているアイシャですら同情の言葉を吐く。美術品運搬の専門業者がこの部屋に鎮座していた嵯峨に鑑定や極め書きを頼んだ品を運び去っただけには見えなかった。軍の連隊長クラスのそれなりに威厳のある机に不釣り合いな使い込まれた万力を初めとした嵯峨の趣味とも言える拳銃のカスタム用の部品や工具まで部屋から消えている。

さらにいつもなら歩く度に巻き上がる金属粉も、べつとりと染みついていてガンオイルの汚れすらぱっと見た限りどこにも存在しなかった。

「この部屋を三日かそこらで一人で掃除……」

「一人じゃ無理だな。茜と……つきあいで渡辺。それに叔父貴のカスタムの秘密を盗みたいと言うことでキム……さらにはそのつきあいでエダ……四人がかりならなんとかなるだろ？」

要の推測に嵯峨は満足げに頷く。

「当りだ……少しはモノが見えてきたみたいだねえ……叔父として心強い限りだが……」

そこまで言つと嵯峨は胸のポケットからマイクロチップを取り出す。

「脇が甘い……あれだろ？ 租界の『預言者』に吉田の情報を探らせているらしいじゃねえか……しかも出してる金額聞いたら……呆れたよ」

嵯峨は哀れむような視線を要に向けたままどっかりと隊長の机に腰を下ろした。

「機密には金がつきものだろ？」

若干自信が揺らいでいるようで要の言葉は振えていた。嵯峨はいつものように胸のポケットからタバコを取り出すと自動的に火を付ける。

「まあ……相場という奴がね。それにだ。お前さんは俺が『預言者』の話を持ち出すことに疑問を感じていないようだが……水漏れの準備もまるで無しか？ 機密が聞いて呆れるよ」

嵯峨の言葉は明らかに要を嘲笑していた。強気の要が完全に打ちのめされたというように俯いて両手を握りしめている。カウラもアイシヤも相手が嵯峨、胡州陸軍では諜報活動の先端を担う東和大使館付き武官を出発点として、外地におけるゲリラ摘発の特殊部隊の部隊長を勤めたその道のプロであることを思い知らされた。

「ただ……相手も一流の情報屋だ。俺も何度か依頼をしたが……突っぱねられた口でね。そう考えるとよくつなぎを付けたもんだと感心させられないこともないな」

「そ……そうかねえ……」

俯いたままの要。その表情を誠がのぞき見ると少しだけ口元が緩んでいるように見えた。

「二つ名が付くような裏の世界の人間は仕事を選ぶからな。金、主義、顧客の人柄。どいつもこいつも海千山千の怪物ばかりだ。その

基準は人に分かるもんじゃ無い。そんな一流どころが俺を嫌って要を選んだ……なかなかおもしろい話だな」

嵯峨の口から吐かれたタバコの煙。元々遠慮と言うことはしない嵯峨らしくせつかくきれいになった隊長室の天井がすぐにヤニで染まることになるだろうと言うことはすぐに想像が付いた。

「しかし……なぜ西園寺を選んだんですか？ 隊長を袖にしたと言いますから……」

カウラの真つ当な質問にアイシャも頷いて嵯峨の答えを待つ。嵯峨はただひたすら天井を見上げてじっとしている。

「お前さん達。依頼者……『預言者ネネ』についてはどれだけ知ってるよ」

突然の嵯峨の言葉は鋭く残酷に響いた。カウラもアイシャもそこで自分達が依頼した相手についてただ要のチョイスだけに任せていた事実が気がついた。

「東都戦争の時にはすでに伝説だったな……抗争の最中、旧共和軍系のシンジケートとイスラム系のシンジケートの銃撃戦の中を一人の少女が買い物かごを持って歩いて渡った。その少女が近づくと両者は銃撃を止め、彼女が通り過ぎればまた激しい銃弾が飛び交う……誰も彼女に手を触れることは出来ない。それをした組織は東都じゃ飯が食えなくなる」

「要……それは伝説ができあがってから後の『預言者』の立場だ。何でネネと呼ばれるどう見ても栄養失調のメス餓鬼が億単位の東和から綾南に向けての援助物資の横領品の争奪戦をしている最中でも

それを気にせずに行動できる身分に成り上がったか……その説明が無ければ回答としては0点だ」

嵯峨の言葉は全く持つてその通りだった。カウラとアイシャは要の俯いた姿に目を向ける。要は再び目を落としたまま動くことも出来ずに黙り込んでいた。

「そう言う叔父貴は……知ってるのか？」

振り絞るような要の一言。誠達は息を飲んで嵯峨に目をやる。嵯峨は相変わらず天井にタバコの煙を噴き上げていた。

「噂はねえ……どれも信憑性が乏しいからねえ。まあ確実に言えるのは……次の手を読むのが上手いってことは確認できるな」

「次の手？」

要がゆっくりと顔を上げる。うちひしがれていた姪が少しばかり元気が出たのがうれしいのか、にんまり笑いながら嵯峨は言葉を続けた。

「横流し品、横領品、密輸品。どれもモノが動き出した時点じゃ情報を売り買いで飯を食っている一流の連中でもその様子は熟知しているもんだ。動き出す直前、そこですでにその品物の輸送ルートのパターンを想定して対立勢力や関心のある連中に情報を売りつける。まあそれも一流とは言えないねえ……本当の一流はすでにその時点でどこがその品物に関心を持っているか、官憲などどこまでその動きを把握しているか、そしてその品物の行方によって状況はどう変わるのか。そこまで分析できて初めて一流だ。だがそれでも伝説の情報屋にはほど遠い」

「もったい付けるなよ」

すでに嵯峨の話に身を乗り出している要の変わり身に呆れながらも

誠は嵯峨の言葉の続きを待つ。

「ネネってのはそんな情報屋。一流どころが手にするだろう情報の内容を当ててみせるんだ。つまり情報屋の情報を売りつけるってわけだ……情報屋も頭がネットとつながっているサイボーグばかりじゃ無いのはお前さん達も知ってるだろ？ そんな人様のおつむの身をぴたりと当ててみせる。まあ伝説にもなるわな」

そこまで言うと嵯峨は満足したように啞えていたタバコを真新しい灰皿でもみ消す。

「そんな芸当……占いの類か何かじゃないですか」

誠の当然の疑問に嵯峨は満足そうな笑みを浮かべる。

「それが出来るから『預言者』の二つ名で呼ばれるんだよ。鈍い連中には予兆も感じない人の流れや物資の動き。時には時代さえもぴたりと当てる。確かにこいつは『預言者』と呼ぶしか無いよな」

「時空間干渉能力……法術師ですね」

しばらく黙って嵯峨の話を聞きながら自分の顎に手を当てて考え込んでいたカウラの一言。嵯峨は曖昧な笑みを浮かべる。

「時間……俺達の次元の把握能力じゃただ流れていくとしか思えないもんだ。それをまるで俺達がサイコロを見て裏の目を当てるように自然に分かる力のある奴がいる……気分のいい話じゃ無いがヨハーンに聞いたらあってもおかしくはない能力なんだそうな」

嵯峨の言葉に部屋に沈黙が拡がった。未来を読む能力を持つ予知能

力者。その存在はある意味これまでの法術に対する誠達の考え方を根底から揺るがすことになる。

「でも……それならお仕事を受けた時点で吉田少佐が何者かってことくらい教えてくれても良いんじゃないの？」

それとなくアイシャが呟いた言葉に誠も大きく頷く。

「そりゃあ『預言』だけで飯が食える世界にネネが生きているならな。だが……それを言ったとしてオメエ等がネネの言葉を信じるか？」

嵯峨のふざけたような口調に誠はむくれながら隣の要の顔をのぞき見た。

「確かに……そう言う能力があるって話は知ってたさ……」

苦し紛れのように呟く要。アイシャはその言葉にあざけるように肩を揺らして笑いをこらえている。

「でも……あれだろ？ 先の可能性……いくつがある時間の分岐点の一部が見えるってだけって話じゃねえか」

「あのなあ、それでも十分だよ。言つたら？ ネネってのは特別勳が良いんだって。可能性が見えるってことはそれだけ未来が絞られるってことだ。しかもその持ち前の勳で見える未来の中から可能性の薄いモノを消していけば後は答えが分かっている推理小説の犯人を当てような話だ」

「それはそれは本当に便利。私も欲しい能力だわ」

アイシャの徒勞に付き合わされた嫌みから出た一言。だがそれも嵯峨には鼻で笑う戯言だというように面倒くさそうに再びタバコに火を付けながら言葉を続けるきっかけでしかなかった。

「本当にそうか？ 見たくもないものまで見えるんだぜ……俺はご免だね。それにお前さんみたいに先を見たがつている連中はごまんという。其奴等が大拳して喋りたくもない未来を喋れと迫ってくるんだ……悪夢そのものじゃないのか？」

嵯峨にそこまで言われるといつもの鼻っ柱の強いアイシャも自然と伏せ目がちになる。

「法術……俺の祖母さん。あの遼南の女帝ムジャンタ・ラスバは帝位に就く前は先遼州文明の研究者だったからその絡みでいろいろ話は聞いていたが……法術師を作った宇宙文明って奴は確かに悪趣味の極みだね。人間はそんなに強くちゃいけないよ。強さってのは弱者に自慢するだけが取り柄の馬鹿野郎にはうれしいものかも知れねえが……その強さの意味ってモノが分かっちゃまうだけの頭の回転がある人間には重荷意外の何物でもないよ。自分の出来ること、しなければならぬこと。それが嫌でも分かっちゃまう。そして人もそれを期待してしまう。伝説の預言者が東都のゲッターに籠もるようになったのも何となく分かるような気がするね」

独白。それは嵯峨が自分自身のことを言っている。そして誠達のこれからについても暗示している。誠にはそのような意味に聞こえて自然と口元が引き締まるのを感じていた。

「まあ……明日は新港への移動日だ。今日中にネネから要に連絡が入ると思うぞ……吉田の正体。しっかり聞いてきてくれよ」

それだけ言つと嵯峨はくるりと隊長の椅子を回して窓の外へと視線を移した。

「おい、叔父貴は吉田のことを……」

要の言葉にめんどくさそうに嵯峨が顔だけで振り向く。

「くどいねえ。俺は部下の才能は買うが個人のプライバシーまでのぞき見て喜ぶ趣味はねえんだよ。とつとと寮に帰って演習の予定表にでも目を通しておけよ」

そのまま振り向いて手で出て行けと合図する嵯峨。誠達は仕方なくいつもとは勝手の違うきれいすぎる隊長室を後にした。

「芝居？」

外に出たとたんにアイシャが要を見下ろして呟く。その青い瞳を見ながら要は苦々しげに首を振る。

「さあな……要するにアタシが相当な世間知らずだったと言ったことが分かったのがアタシとしての収穫だよ」

「それは良いことだ。実に良い進歩だな」

皮肉めいたカウラの言葉に反論する元気もなく、要はとぼとぼと実働部隊の執務室へと向かった。

相変わらず人気のない廊下を渡り、執務室のドアを開ける。

「なんでアイシャが来てるんだよ」

部屋に一番に入って伸びをした要が振り返りながらそう言うのにアイシャはしたり顔でその肩を叩く。

「まあ……私は優秀だから準備はすべて終わってるの。それより……残務整理、たまっているんじゃないの？」

アイシャに指摘されて誠もそそくさと自分のデスクに向かった。机の上には冊子が一枚と小さなディスク。そしてつたない文字で『心配をかけたからやっといたからね!』という手紙が残されていた。

「シャムの奴……気を利かせたつもりかよ。って言うか、シャムの仕事だろ？信用できるのか？」

「まあディスクの中身とレポートは副隊長が仕上げたんだろ。シャムが出来るのはそれを机に置くことくらいだ」

「さすが……よく分かってらっしゃる」

カウラの言葉に要は苦笑いを浮かべながらディスクを自分の机の端末のスロットに差し込んで端末を起動させた。

「そう言えば最近クバルカ中佐は徹夜が多かったですからね……」

「あれじゃあまるで児童虐待だぜ」

「西園寺。帰ったらそれを中佐に報告しておくか？」

皮肉るつもりのカウラの言葉に要は大きく首を振りながら端末の画面を覗き込む。

「こりゃあ丁寧な作りなこと……」

誠も続けて立ち上がった端末の画面に丁寧に作り込まれたレポートがあるのを見て頷いた。

「まあランちゃんも凝り性だから……でもこれじゃあ仕事も何も無いわね。本当に隊長の言うとおり帰るしか無いわね」

「そう言うことが……」

渋々要は端末を閉じながらぺらぺらとレポートをめくった。誠も目を通すが、宇宙での05式の動作特性に関する注意事項と連携を中心としたミッションの展開状況に関して念入りな図入りの文面にランの力の入れようを感じた。

「でも……空に浮いてるあれがどうなるかで無駄になるかも」

アイシャの一言に場が一瞬で凍り付く。

「その時……アタシ等が何が出来るのかね」

「それは明日になれば分かることだ。帰るぞ」

カウラの一言に誠も緊張した脳を解放しながらそのまま飛び出していく要の後ろに続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1135o/>

遼州戦記 保安隊日乗 7

2011年11月16日23時44分発行